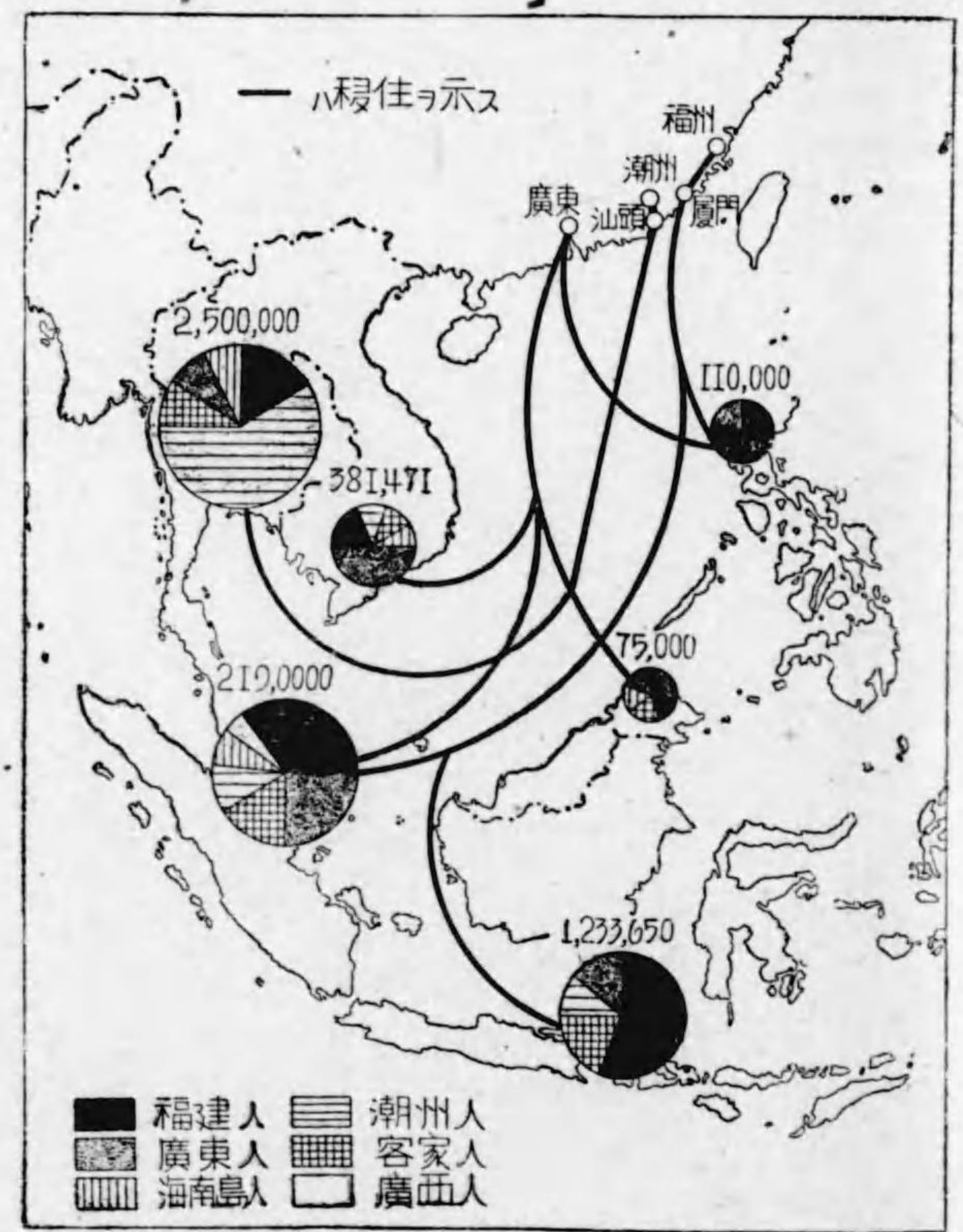


第67圖 南洋における出身地別華僑人口分布圖

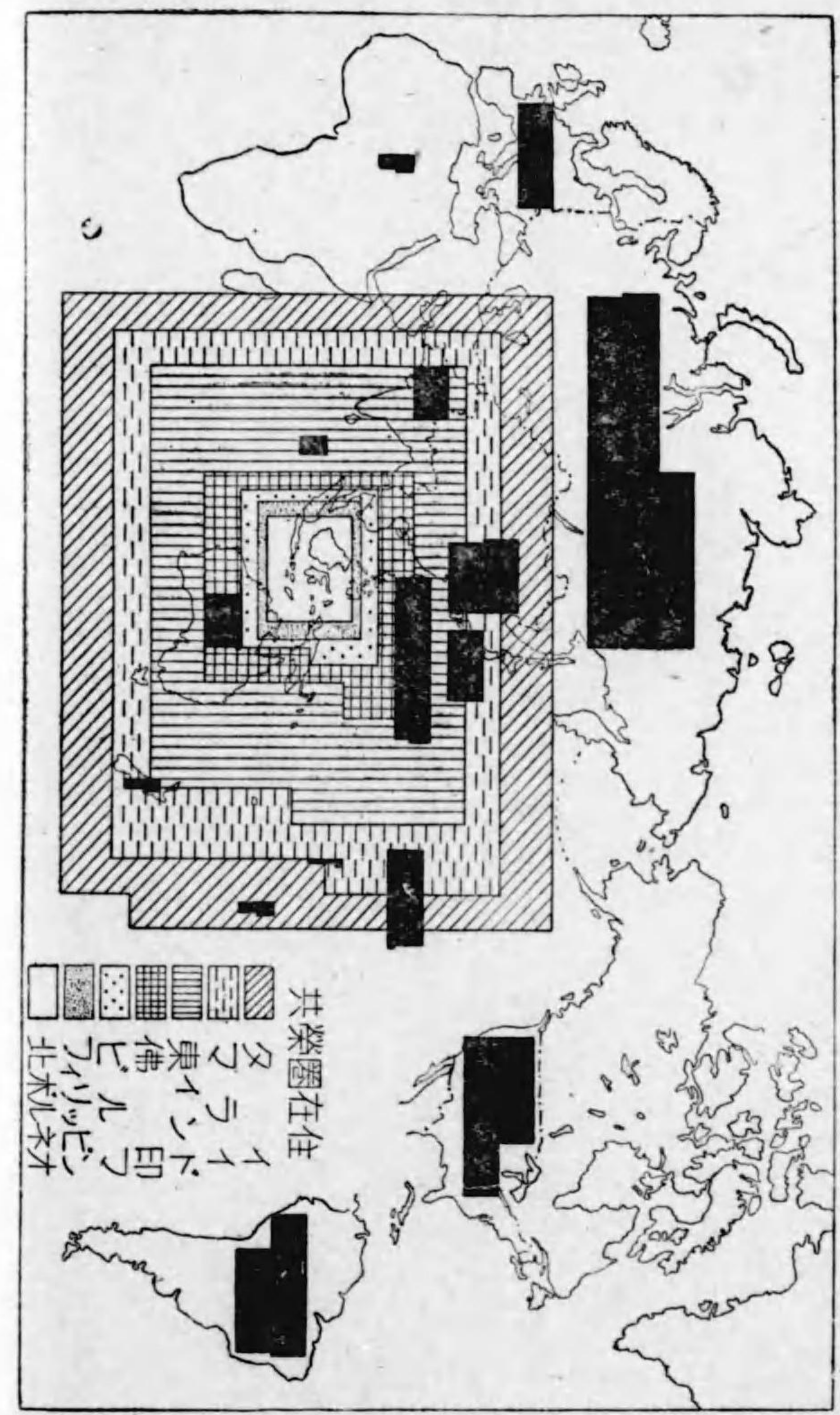
〔單位=人〕



一
總
論

一五九

第二部 南方の民族
第66圖 世界における華僑人口分布および比率



二五八

おける華僑の總數は七、七八〇、〇〇〇人であるが、そのうち、南洋地域の華僑人口は六、二〇〇、〇〇〇人餘となつてゐるによつても、いかに南方と華僑の關係が密接であるかを知らうるのである。

5 華僑の役割

支那の華僑研究家である陳達は、

「南洋で華僑が一人前の商人になるには、通常、工人、行商、小露店主および大商店といふ順序に、三ないし四の段階を経過する。赤手空拳または貧困なものは、まづ勞働者から出發し、漸次上昇してゆく。小資本のできたものは、勞働者の過程をへずして直接行商から出發し、ことに、身體の強健なものは、深山、僻地にわけ入つて商品を一手に販賣する。また、ややくらしむきのよいものは、その知人が店でも開けば、やとられて下級店員となる。かくして、少しばかりの蓄積財ができると、路傍あるひは裏町においてではあるが、固定的な場所で露店をだし、いろいろな商品を販賣する。さらに資本が漸増すると、製造、卸賣あるひは小賣などを商業股賑な地區で經營するやうになる。」

とのべてゐるが、強靱な生活力をもつ彼らは、かうした過程をふんで漸次南洋諸國の經濟的實権を獲得し、いまではまづたく土着原住民を壓して、外來の白色人種とともに、南洋の經濟を獨占するにいたり、その投資額は次掲第四〇表の如く、マライにおいて四九三、〇〇〇、〇〇〇海峽ドル、東インドに六五四、八五〇、〇〇〇ギルダ、

第40表 南洋における華僑の投資額

	マ ラ イ (千海峽 ドル)	東 印 ド 千 ギ ル ダ ー	フ イ リ ッ ピ ン (千ペソ)	佛 (千比 ド)	印 (千 ル)	タ イ 國 (千 バー)
農業	244,000	200,000	126	15,000	—	—
工業	50,000	850	277	—	—	—
計	317,000	215,850	41,090	40,000	50,000	50,000 ⁰
貿易	150,000	400,000	100,002	120,000	250,000	250,000
融 資 業	15,000	13,000	7,926	100,000	300,000	300,000
計	165,000	413,000	107,928	220,000	550,000	550,000
その他	11,000	26,000	69,000	30,000	—	—
合計	493,000	654,850	218,018	305,000	600,000	600,000

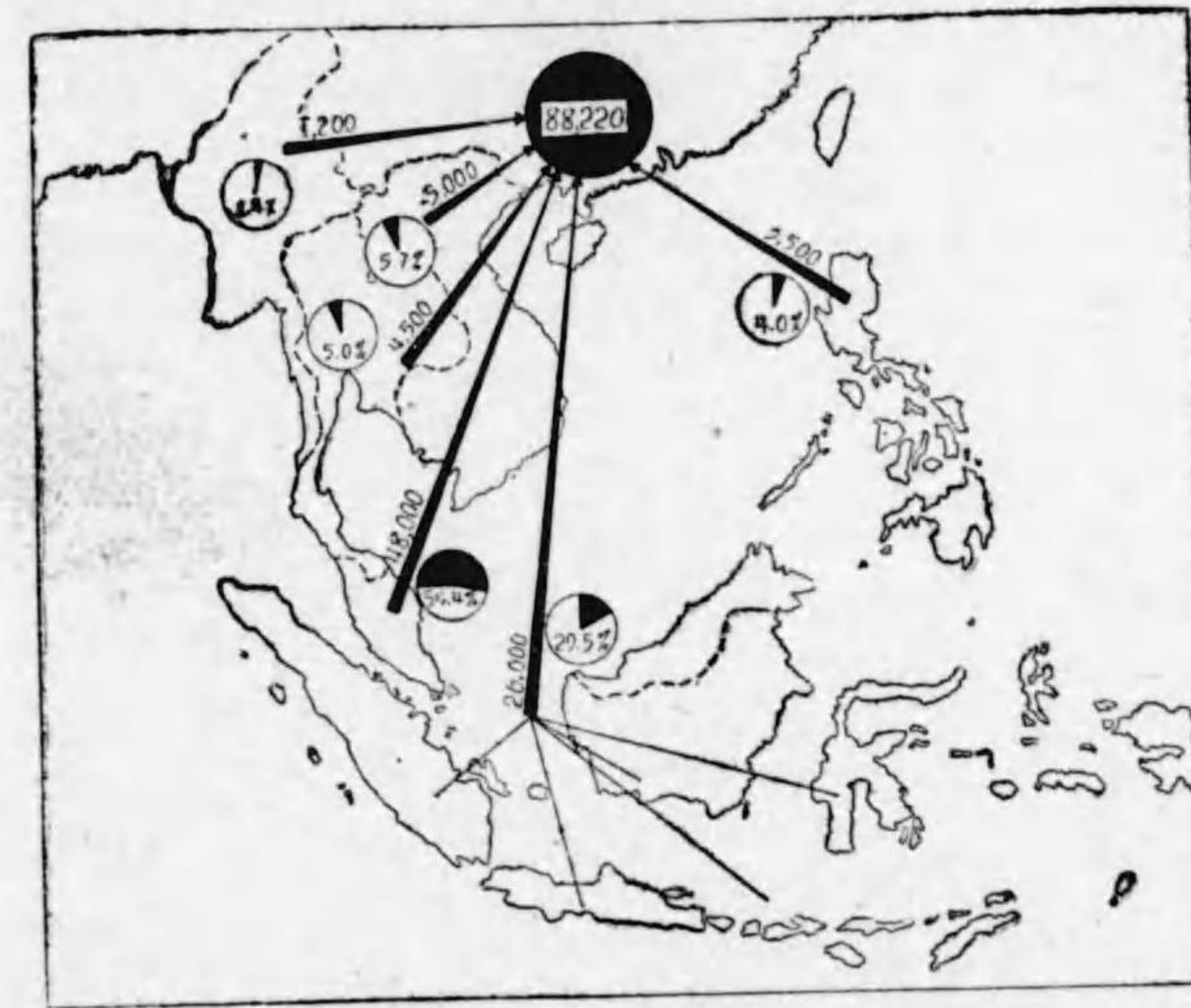
[1930年基準、福田省三氏調査]

フィリッピンに二一八、〇一八、〇〇〇ペソ、佛領インド支那に三、〇五、〇〇〇、〇〇〇比ドル、タイ國に六〇〇、〇〇〇、〇〇〇バーツにおよんでゐるのである。この總計を邦貨に換算すれば實に四、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇圓に達し、本國への送金もまた、つきにかかげた第六八圖の如く八八、二〇〇、〇〇〇元におよび、各種義捐金は、一九三八年一月から三九年四月までの半歳のあひだに二六、〇〇〇、〇〇〇元餘の巨額をかぞへ、蔣政權の大きな財政的抗戦力の役割をはたしてきたのである。

南洋華僑の出身地は、主として廣東と福建であるが、その大部分はタイ國、マライ、東インドに集中され、ことに、タイ國、マライにおける華僑の勢力は、敷においても、また經濟的にも壓倒的であり、マライの如きは、原住民であるマライ人よりも、外來華僑の人口の方がわづかではあるが凌駕してゐるといふ奇觀を呈してゐるのである。

これらの華僑は、經濟的實権をにぎることによつて、南方諸國

第68圖 南洋華僑の本國送金額
〔單位=1,000元〕

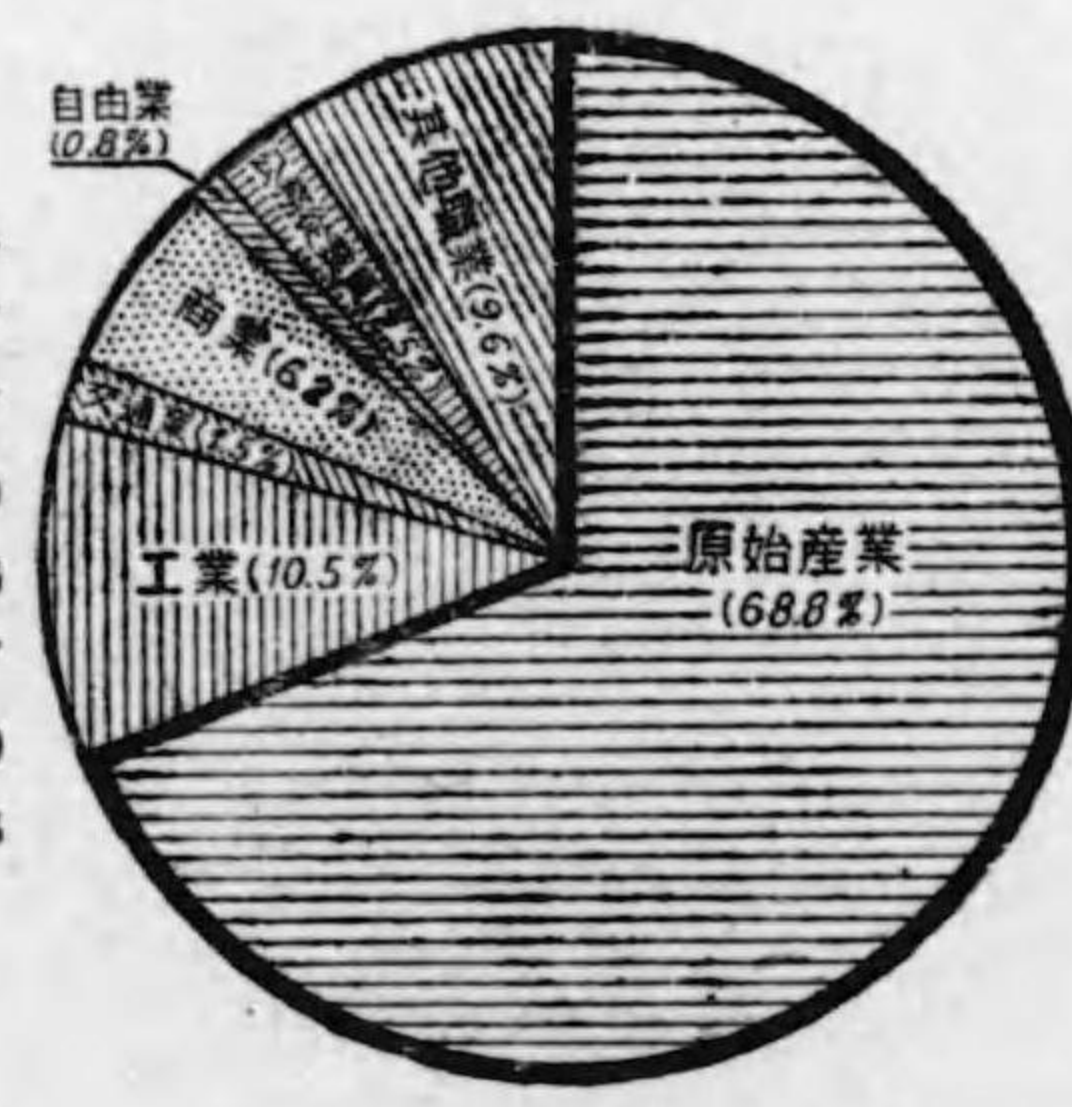


第41表 南洋華僑の義捐金額
〔單位=元〕

國別	金額
マライ	10,969,434
東インド	4,788,947
フィリピン	3,784,477
タイ國	2,400,000
ビルマ	1,502,783
北ボルネオ	440,697
ホンコン	1,800,000
計	25,686,333

(1938年11月より
39年4月まで)

第69圖 職業別人口構成比率



における中産階級としての地位を占め、そしてこのことは、土着原住民の民族運動を強力ならしめなかつた原因となつたのである。

インドネシアにおいても、佛領インド支那、フィリピンにおいても、その民族運動の擔當者は、一部上流階級の指導者と、白人支配者の壓政にたまりかねて反抗した下層農民や労働者であり、社會の中堅層である中産階級は、ほとんどなんらの動きをもしめなかつたのである。

さらにまた、重慶抗戦力の支柱として、南洋の華僑がどれほど重要な役割をけたしたかは周知の通りである。すなはち、支那事變勃發以後から昭和十五年一〇月末までの華僑の本國への送金總額は、救國公債、義捐金をのぞいて三〇〇,〇〇〇,〇〇〇元を達し、また、公債應募も、重慶政權財政部の發行した國防公債は、一般民衆のあひだに少しも消化されなかつたことをおもへば、華僑方面にすくなくならぬ部分が賣りさばかれたことが想像されるのである。

このやうに、南洋華僑の動向は、經濟的のみではなく、政治的にもきはめて重大な意味をもつものであつて、さる昭和十六年二月、昭南島における福建華僑の巨頭であり、中國救濟資金委員會聯合會長である陳嘉庚が重慶との離反を通電し、そしてまたこのたびの大東亞戰爭以後、南洋華僑はアメリカ・イギリス國際資本との連絡を完全にたたれ、南洋華僑の大きな轉換が豫想されるとはいへ、それだけになほ、彼らに對する民族政策と經濟政策は、よほどしつかりした態度と計畫とをもつて遂行されなければならぬであらう。

南洋華僑の動向は、重慶政權につよく影響するところであらうし、また、わが國の對重慶政策如何は、南方華僑の動向を決定するのである。

華僑はすでに南洋諸國にとつて、外來者ではないのである。彼らは數百年以前から着々と定着し、フィリピンやタイ國においては、原住民族とのあひだに廣汎な混血がおこなはれてゐるのであつて、それぞれの地域において、異分子ではなく、有力な構成員の一人として、共榮圈建設に協力せしめるやうに指導することがもつとも重要である。

二 フィリッピン民族史

フィリッピンは七、〇〇〇餘の島嶼よりなり、總面積は一一四、四〇〇平方マイルで、わが朝鮮、臺灣、樺太、南洋委任統治領、澎湖列島を合したものにひとしく、その七〇パーセントはルソン島およびミンダナオ島によつて占められてゐる。

人口調査は、一九一八年におこなはれたものが一番新しいのであるが、それによると一〇、三一五、〇〇〇人（外人約六五、〇〇〇人をふくむ）となつてゐるが、年間人口増加數等を基礎として推定したものとすると、一九三六年七月一日現在で一三、二六六、七〇〇人、人口密度は一平方キロあたり四五人とされてゐる。

(1) フィリッピンの民族

構成民族は、マライ族、ネグリート族、その他外人、蕃族等で、そのなかにふくまれる種族は複雑をきはめてゐるが、その根幹をなすものはマライ族であり、總數一三、〇〇〇、〇〇〇人におよび、フィリッピン總人口のほとんど全部を占めてゐるのである。

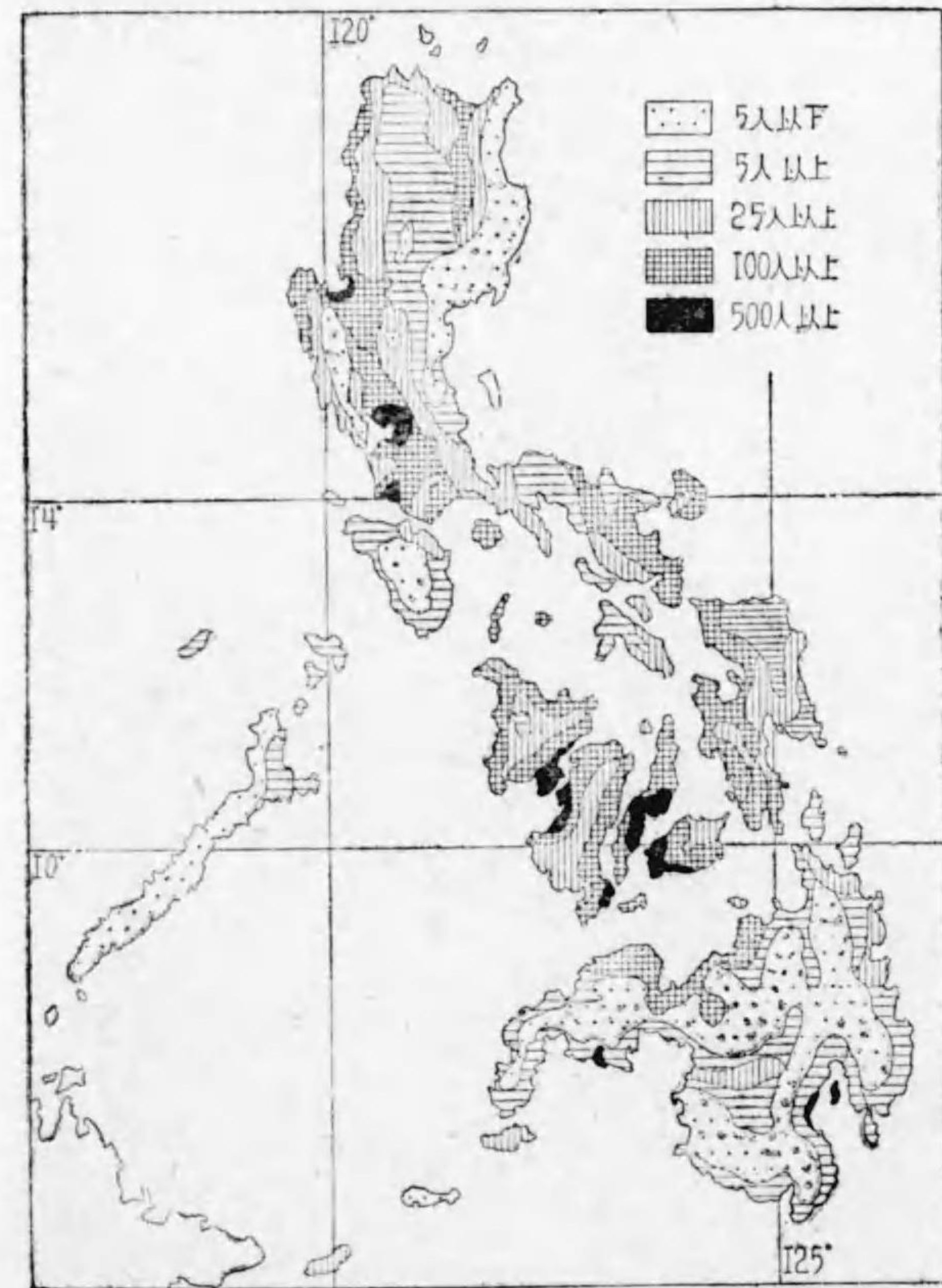
このマライ族は、一五六五年にスペインがフィリッピンを征服して以來、相ついで移住してきた外人、すな

第73圖 フィリピンの宗教別種族分布圖



二
フィリピン民族史

第72圖 フィリピンの人口および人口密度圖
〔平方キロ當リ〕



第二部 南方の民族

はち主としてスペイン人および支那人と、先住民族および先住マライ族とが混血して形成されたものといはれてゐるが、その九パーセントがキリスト教化して、現在一般にフィリッピン人および、のこりの九パーセントが非キリスト教徒としてなほ未開の生活をいとなんでゐるのである。

フィリッピン人 フィリッピン人とは、マライ族のうちのキリスト教化したヴィサヤ、タガログ、イロカノ、

パンパンガ、バンガンナン、カガヤン、サンバル、ピコルの八種族を總稱するのであるが、全人口の九パーセントを占め、白人の文化と血液をうけて多分に歐米化されてゐる。これらの八種族は、いづれもそれぞれの特徴を發揮してフィリッピン社會の主力をなしてゐるのであるが、一八九九年アメリカの領有以來、輕薄なアメリカニズムがいたづらに彼らの優秀な素質を低下せしめてゐるやうである。

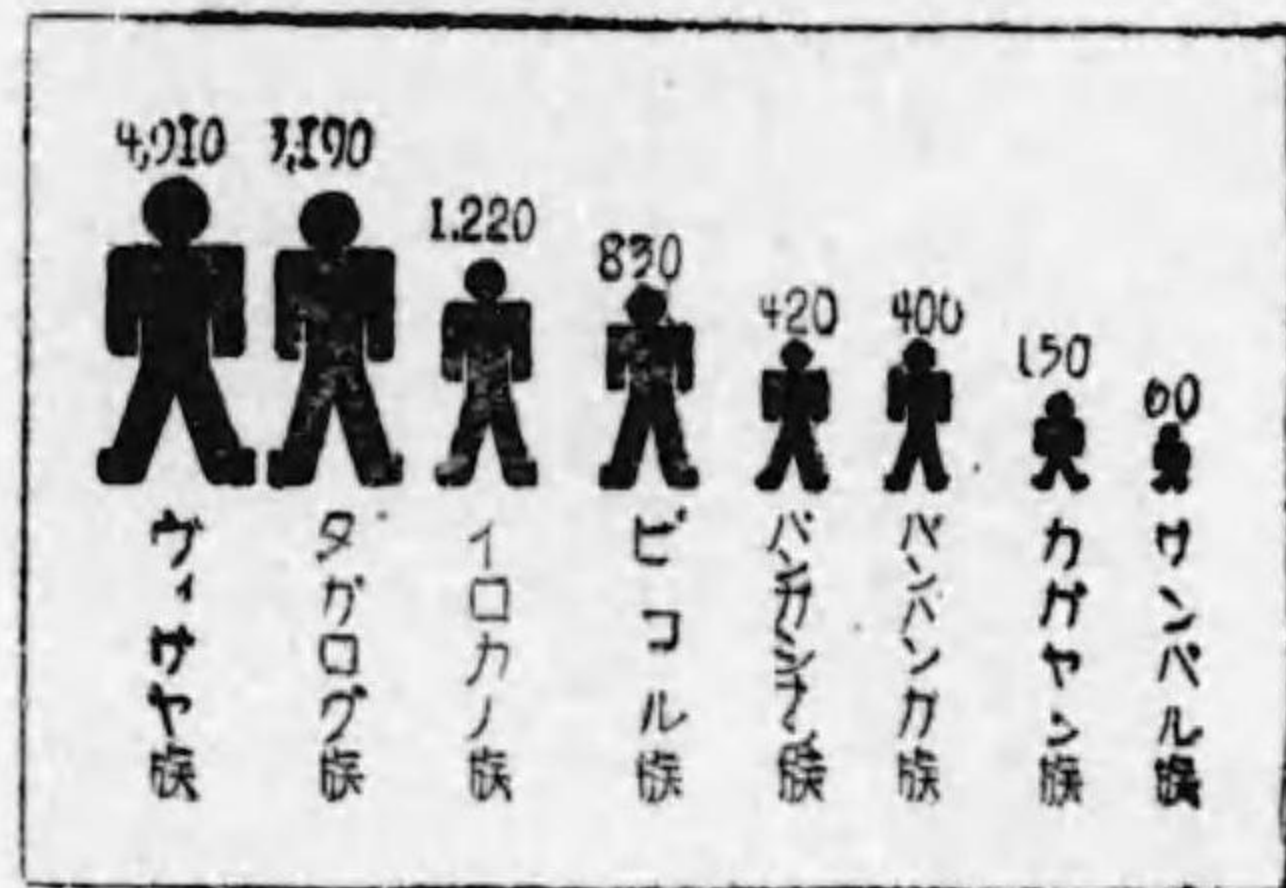
以下において、フィリッピン人を構成する八種族について、多少くはしく検討をこころみることにしよう。

【ヴィサヤ族】

人口四、九一〇、〇〇〇人でフィリッピン人總數の約五〇パーセン

第74圖 フィリッピン人構成種族人口 (1929年)

(單位=1,000人)



トを占め、フィリッピンに在住する諸族のうちで人口のもつとも多い種族である。文化程度はややタガログ族におとるが、ヴィサヤ諸島、ミンダナオ島、北部パラワン島等にひろく分布し、また、人口増加率は驚異的にたかく、一八五八年の一、五六〇、〇〇〇人から一九〇三年には三、四九〇、〇〇〇人に激増したほどで、今後ますます發展する種族といへよう。

【タガログ族】

人口三、一九〇、〇〇〇人で、數においてこそヴィサヤ族におとつてゐるが、ルソン島要部に分布する關係上、よくヴィサヤ族に拮抗し、文化程度もたかく、フィリッピン諸民族のうちでもつとも中核的分子である。

【イロカノ族】

人口一、二二〇、〇〇〇人を有するこの種族は、人口、社會的勢力において第三位にあり、主としてルソン島北部に居住し、勤勉であり、愛國的である。

【バンガンナン族】

人口四二〇、〇〇〇人、ルソン島平野に分布し、性格はイロカノ族ににてゐる。

【パンパンガ族】

人口四〇〇、〇〇〇人、ルソン島中央部の肥沃野に住み、きはめて勇敢であり、文化程度もたかい。

【カガヤン族】

人口は一五〇、〇〇〇人で、ルソン島北部に分布し、かつてスペインの侵入に對してもつとも強硬に反抗した種族である。

【サンバル族】

ルソン島のサンバルス州に住み、未開にちかい種族で、人口もきはめて少く約六〇、〇〇〇くらゐである。

【ピコル族】

人口は八三〇、〇〇〇人で、ルソン島東南ソルソゴン、アルバイ、カマリネス地方に住み、文化程度は低くヴィ

サヤ族の分族である。

モロ族

マライ族のうちの非キリスト教徒を代表する種族で、回教を奉じ、主としてミンダナオ島、スール島、

パラワン島に分布してゐるが、一九一八年の國勢調査では三七二、四六四人をかぞへ、非キリスト教徒マライ族

の約三分の一を占めてゐる。

このモロ族は、一四、五世紀ごろアラビアから移住したものと、それ以前からミンダナオ島に在住し、回教に

歸依したものとがあるが、きはめて悍悍な種族で、回教による團結心もつよく、スペインの侵入當初から猛烈に

反抗して最後まで屈せず、モロ族王國を維持しつづけた種族である。しかし、アメリカ領となつて以後はこれに

歸順し今日にいたつてゐるが、生業は農耕が主である。

ネグリート族 このネグリート族は、フィリピンの原住種族であり、また、群島中唯一の黒人である。その

人口は三〇、〇〇〇ないし四〇、〇〇〇をかぞへ、主としてルソン島のサンバル山脈中に住居してゐる。性質が溫和であるため、後來の他民族に山中へ驅逐され、あるひは奴隸となり、衰退の一路をたどつてゐる。

その他の蕃族 ルソン島の蕃族は、イゴロット族、チンギャン族、イフォ族、カリンガ族、イロンゴット族、

カタバンガン族等が存在してゐるが、米作や狩獵に従事してをり、その數約四〇〇、〇〇〇人である。

ミンダナオ島の蕃族は、ブキドノン族、マノボ族、マンダヤ族、バゴボ族、クラ

マン族等が居住し、その數は約三〇〇、〇〇〇人である。

外國人 上掲第四二表の如く、一九三六年の調査による外國人數は一〇、九

七五人に達してゐるが、一九〇三年の統計と照合すると、日本人が九二二人から

二〇、六四一人に激増し、ついで支那人が約倍増してゐることがわかる。この統

計にはアメリカの軍隊が除外されてゐるが、主として指導的官吏、もしくは經

濟人である在フィリピンのアメリカ本國人が、一九〇三年の八、一三五人から

三六年には六、〇七八人に減じ、また、かつての支配者であつたスペイン人が現

在五、〇〇〇人たらずの状態であるのに反して、東洋人である日本人および支那

人華僑が、在フィリピン外國人のうちで壓倒的に多數をしめてゐるのである。

日本人は周知の如く、在留人の七〇パーセントがダバオ市に、その他はマニラ

第42表 フィリピン島在住外國人數

人種別	1903年	1936年
支那人	41,035人	76,456人
アメリカ人	8,135	6,078
スペイン人	3,888	4,647
日本の	921	20,641
その他	667	640
計	1,492	2,513
	56,138	110,975

市で麻栽培、商業、漁業等に従事してゐたのであるが、支那人はこの地においてきはめて特殊な役割をはたしてゐるのである。

在フィリッピン支那人の数は七六、〇〇〇人餘とされてゐるが、實数はそれよりもはるかに多く、一三〇、〇〇〇人ないし二〇〇、〇〇〇人と推算されてをり、さらに、華僑の大部分が男子であつた關係から、フィリッピン人女子との結婚が多くおこなはれ、この結果としておびただしい混血人を加へるならば、在フィリッピン支那人種の数は龐大であることがかんがへられるのである。ことに支那人とフィリッピン人との混血人は、スペイン系の混血人と同様に、フィリッピン人のうちでもつとも優秀な指導者であり、兩院制時代の議員の約七五パーセントは支那系混血人であつたとさへいはれてゐる。

一八九九年からスペインにかはつてフィリッピンの統治權をにぎつたアメリカ政府は、本國においてなしたと同様に、支那人排斥を適用し、支那人労働者の入國を禁止したのであるが、それにもかかはらず、支那系血液の侵潤が、その政治的意識の如何は別として、一個の無視し得ない東洋民族系の指導層を形成しつつあることは、興味ある問題であらう。

(2) フィリッピン民族の史的概観

フィリッピン群島在住のマライ族のうち、キリスト教化したものをいはゆるフィリッピン人と稱してゐること

は前にも述べた通りであるが、數において群島全人口の大多數を占めてをり、文化水準からみても、ことにその上層階級は、先進東洋民族、白人に比していささかの遜色もないといはれるこのフィリッピン人が、フィリッピン民族問題の中心であることはいふまでもない。モロ諸族、その他の種族が、スペイン植民當局の手をやかした例はあるが、それはスペインの苛酷な統治が誘因した反抗であるし、また、それらの種族はいづれも少數分散的で、その反抗も組織的な力を發揮したとはいへないのである。もちろん、フィリッピン人達がスペインの領有に對し、また、アメリカの侵略に對してしめした熱烈な自衛運動ないし獨立運動も、モロ諸族、その他における反抗運動と比較していちじるしく組織的であり、集團的であつたとはいへないのである。

「スペインが住民の反抗にあひつつも、比較的容易にフィリッピンを征服し、かつたびかさなる失敗にもかかはらず、三世紀のながきに互つてよく領有を全うし得たのは、一つにフィリッピン人に國民的團結がかけてゐたからだ」と、フィリッピンの革命家たちがいふやうに、フィリッピン人各種族のあひだには、その獨立に關し思想的にも實際的にも一つとして連絡と團結のなかつたことはもとより、一致もなかつたことがフィリッピン民族の獨立運動を單なる局地的反抗にをはらしめた最大の原因であつたのである。

しかし、過去のそれにもかかはらず、今日フィリッピン人なるものは、一個の渾然たる民族力といふべきものをもつてゐるのである。それでは、彼らの民族意識はいかにしてよびさまされたのであるか、あるひはまた、民族としての集團的な力はいかなる要因によつて形成されたのであるか、といふことが重要な問題となつてくる。

フィリッピン人に對する民族政策の基底は、その分析のなかにもとめられなければならないであらう。

スペインの來侵當時、フィリッピン人の母體であるマライ族は約四〇〇、〇〇〇人であつたといはれてゐる。そのころ、彼らは他の原住民族であるネグリート族やインドネシア諸族と同様、なんら國家的組織を形成してをらず、バランガイと稱する部落單位にのみ團結してゐたにすぎないのであつて、そのおびただしい數にのぼるバランガイが各島に散在してたがひに獨立し、あひ反目してゐたのである。すなはち、相當強固な部落意識といふものはあつても、民族意識、國家意識といふものはまったく缺如してをり、他のバランガイへうつることなどはきはめて嚴重に禁じられてゐた。

一五二一年、マジエランのフィリッピン群島發見、および一五七四年の遠征隊の來航以來この地に侵略の手をのべたスペインは、モロ族をはじめその他原住民の頑強な抵抗にあひながらも、フィリッピン原住民の團結心の缺如に乗じてらくらくと征服してしまつたのであるが、征服したのちのスペインの統治方式は、根本的には重商主義であり、具體的には極端な專政、重税、強制労働の賦課、住民文化の破壊、腐敗官僚の跋扈以外のなにもでもなかつた。

これに對するフィリッピン原住民の叛亂は、これまた分散的な統一のないものではあつたが、一五七四年、マジエランの戦死を皮きりに、一八四〇年代まで約三〇〇年間のスペイン統治全期間を通じて斷續した。この叛亂は、當初はほとんど重税と強制労働が原因であつたが、その後期においては、ことに一九世紀に入つてからは、

叛亂ないし陰謀には、平等待遇の要求、立憲國民たる権利の要求、フィリッピン獨立の要求などがいりまじつてきた。

すなはち、ヨーロッパにおいて、ナポレオン軍は一八〇八年にスペインへ侵入したのであるが、このナポレオンの代表する新時代の自由主義思想が、スペインを通じてフィリッピンに傳播し、それがフィリッピンにおける原住民の民族意識を昂揚せしめるにいたつたのであつて、他の南方諸地域において、白人の強大國ロシアを撃破した日本の興起が民族意識を自覺せしめる契機であつたのに比較して、フィリッピンでは、ヨーロッパの自由主義が直接の契機となり、しかも、それが日本よりもはやく導入されてゐたといふことは注目すべき第一の點である。

世界的にわきおこつた自由主義の風潮は、スペインのフィリッピン統治方式にもある變革をあたへた。マニラの開港がその第一のあらはれであつて、これによつて、從來スペインの關門を経るにあらざればおこなひ得なかつたフィリッピン貿易が、自由に諸外國とのあひだにおこなはれることとなり、フィリッピンの農業および工業は飛躍的に發展したのであるが、この結果、國內に新興ブルジョアが擡頭し、この新しい階級は、フィリッピン獨立運動の中核體として活動するにいたつたのである。

しかし、一九世紀の後半において熾烈となつたこれらの革命運動は、民族獨立運動とよぶにはあまりに穩健なものであつたとおもはれる。そのあげる主張は、

- 一、スペイン僧侶團の廣大なる土地所有の廢止
 - 二、重税および強制労働制の廢止
 - 三、スペイン本國議會へのフィリッピン議員の派遣
- 等であり、スペインからの獨立といふよりは、むしろ、スペイン國家の一地方として、本國各地方と同様の待遇を得ようとするもので、民族的要求といふよりは、デモクラシー的要求にちかひものであつた。

3) フィリッピン獨立にともなふもの

リサール、ビラー、アギナルド等を代表戦士とするこの革新運動は、それがきはめて穩健なものであつたにもかかはらず、スペイン統治下においては實現されず、一八九九年のアメリカ・スペイン戦争を機とするアメリカの介入によつて、アメリカの支配下においてとに角約束だけはあたらへられるにいたつた。

當初、フィリッピンをスペインにかはつて領有しようとするかみへたアメリカに對し、フィリッピン人は銃（アメリカ・フィリッピン戦争）をもつてむくいたのであるが、一九二九年の世界的大恐慌以來、アメリカ國內における對フィリッピン態度は、領有派と放棄派の二派に分れたために、フィリッピンに對する侵略はつねに不徹底にはつたのである。ただわづかにタフト總督の政策がある程度フィリッピン人を瞞着するに成功したのであつた。

このタフト總督の政策について二、三説明すると、大審院判事の定員九名のうち六名までをフィリッピン人出身者をもつてあてたこと、フィリッピン大學の創設をはじめ、教育の普及、スペイン教團所有の土地開放、交通網の整備、産業の振興、衛生に關する努力等々により、自由主義によつてめざめたフィリッピン人の民族的要求をある程度抑止し得たのである。しかし、その後もなほフィリッピンの獨立運動が繼續されたことはもちろんである。

一九一二年、フィリッピン放棄派を代表する民主黨ウィルソンの大統領就任を契機として、獨立運動はアメリカおよびフィリッピン双方の大きな關心事とはなつたのであるが、一九三三年にホース・カッチング獨立法案がアメリカ下院を通過し、ついで翌一九三四年にタイディングス・マクダフィー獨立法案が成立して、一〇年後の一九四四年にフィリッピン共和國の成立が約束されるにいたり、三〇年間國をあげて努力した獨立運動はアメリカによつて約束されたのではあつたが、なほ空手形にはることを危惧されてゐた。

4) 新しい民族への途

現在のフィリッピン人は、滔々たるアメリカニズムの風潮のなかにある。二〇世紀初頭からの四〇年餘にわたるアメリカの稱する「善政」は、まさしくフィリッピン人を温室のなかに胎蕩たらしめ、いはゆるアメリカニズムを骨の髄まで滲透せしめたのである。一九世紀初頭のふるくから自由主義の思潮をうけて、共榮圈内の他の諸

民族に比して、拔群の文化水準を維持するこのフィリッピン人は、先天的に民族意識にかけてゐたわけでは決してないのであつて、三〇〇有餘年のスペイン統治時代を通じて、たえず非東洋民族の壓政に抗してたち、また、アメリカの領有に對して一度は熾烈な民族意識にもえて反抗したことは、前にのべた通りである。

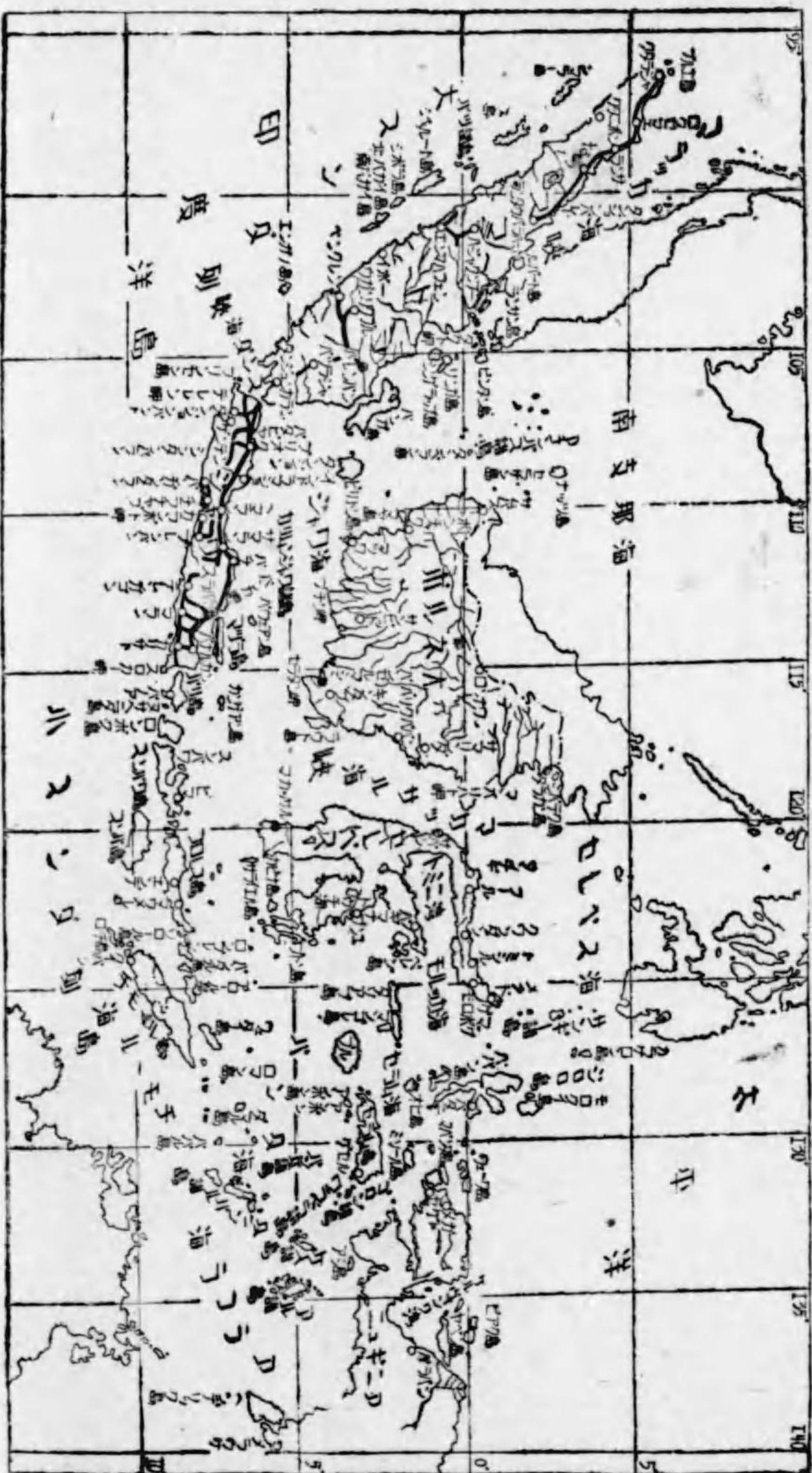
大東亞戦前まで、フィリッピン人の特性といはれた怠惰、無批判な模倣性、虚榮心、うそを吐いて恬淡たる性格、計數觀念の缺如などは、まづたく命とダンスと賭博を通ずる享樂主義の所産であらう。しかし、大東亞共榮圏の一翼たる使命の遂行にめざめたフィリッピン人にとつて、獨立の達成は無上の榮譽と感激である一面には、苦闘と努力の道であることはいふまでもない。あまやかされた生活は、今後絶對にゆるされないであらうし、また、彼らはたかい文化生活を維持するためのあらゆる物資を自ら生産するために、經濟組織の困難な再編成を實行しなければならぬことはもちろん、怠惰で勤勉にかけ、仕事に執着心のとぼしいフィリッピン人の民族性が、共存共榮の大理想のもとに一大試煉をへて見事に東洋民族としての自覺の上に新しい民族の理念をきづきあげなければならぬからである。

わが國よりも六、七〇年もはやく自由主義の世界思潮に接し、デモクラシーのながい政治的訓練をうけたフィリッピン人を、アメリカ的な思想から解放し、東亞民族としての眞面目にたちかへらせる仕事は、眞實容易ではない。

しかし、大東亞戦前のフィリッピン人はもはや今日のフィリッピン人ではない。日本の東亞民族解放、大東亞

共榮圏建設の眞意をあまりとろなく解し、繚然過去の夢からさめたフィリッピン人は、あげて大東亞戦争の完遂に協力しつつある現状からいつても、かならずや洋々たる前途への希望を抱いてフィリッピン獨立のはえある發足がなされるものとおもはれる。

第75圖 東インド全圖



三 温和な東インド民族

(1) 原住民族と外國人

東インド(舊蘭印)は、北緯六度から南緯一度、東經九五度から一四一度にわたつて、赤道をほぼ中心として南北兩半球にまたがる多數の密集した島々からなり、これを大別すると大スンダ諸島、小スンダ諸島、モルッカ諸島、ニューギニアおよびその屬島の四群にわかれ、總面積一、九〇〇、〇〇〇平方キロでわが國の約二倍半におよび、その總人口は六〇、〇〇〇、〇〇〇餘である。

原住民は、本来的にはマライ族であり、ネグリート族、ネシオット族、プロト・マライ族等の先住民族は、その數においても、社會的勢力においてもいふにたりない。

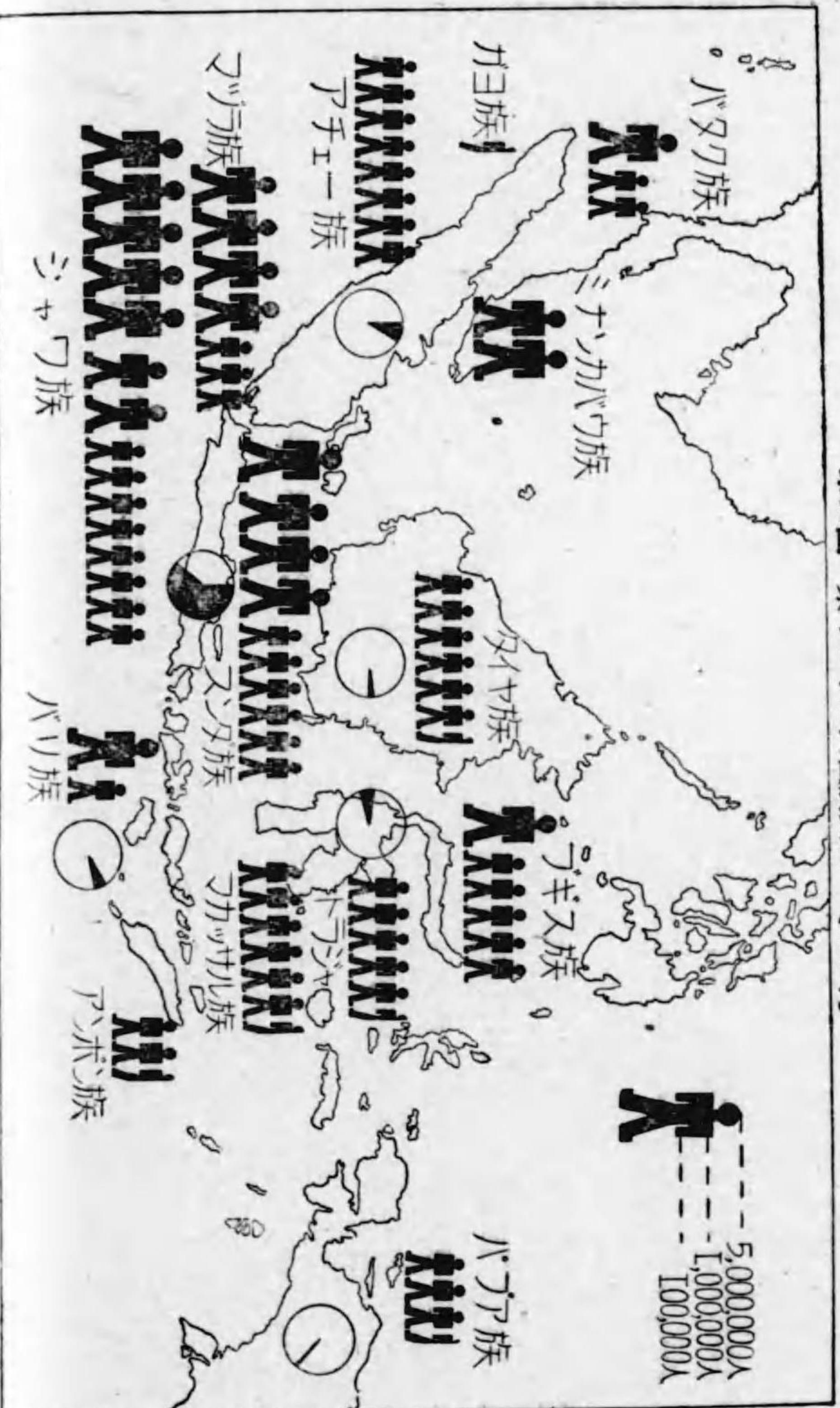
原住民および外國人の構成は、上掲第四三表の通りである。

第43表 東インドにおける
歐米人および日本人人口
(1930年)

	人口(人)	比率(%)
オランダ	208,269	86.72
オーストラリア	7,381	3.07
ドイツ	7,195	3.00
日本	2,414	1.01
イギリス	8,948	3.73
フランス	790	0.33
アメリカ	643	0.27
その他	240,162	100.00

三 温和な東インド民族

第76圖 東インドの人類別人口 (1930年)



第14表 東インドの人口増加表

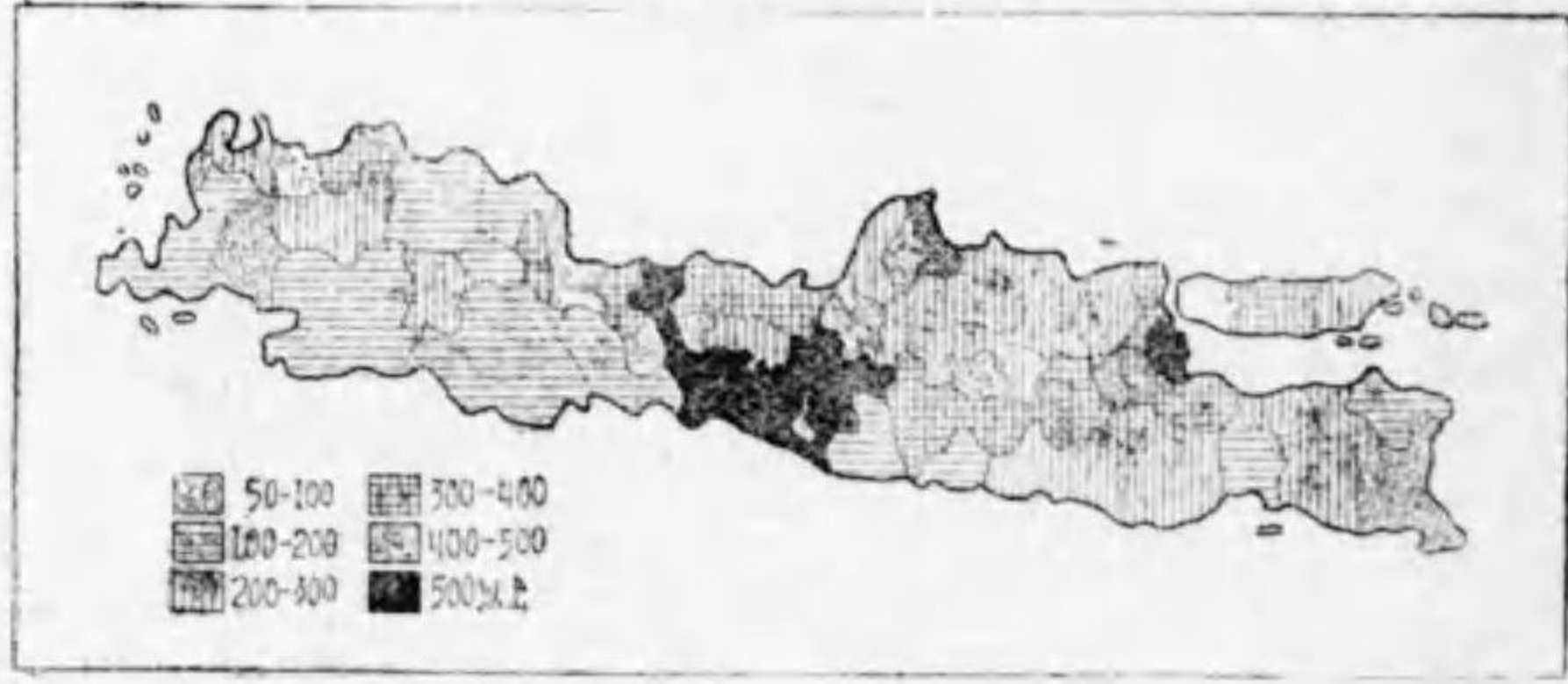
地域	年度	土着住民	外国人	支那人	アラビヤ人	總人口
シヤム及マラ	1860	12,514,000	—	149,000	6,000	—
	1880	19,541,000	44,000	207,000	11,000	—
	1900	28,386,000	72,000	277,000	18,000	—
	1905	29,979,000	75,000	295,000	19,000	30,360,000
	1920	34,433,000	135,000	384,000	28,000	34,984,000
	1930	40,891,000	193,000	582,000	42,000	41,719,000
	1905	7,375,000	16,000	—	—	7,710,000
	1920	13,871,000	34,000	—	—	14,366,000
	1930	18,253,000	44,000	—	—	19,011,000
	外	1860	—	44,000	221,000	9,000
1880	—	60,000	344,000	16,000	—	—
1900	—	91,000	537,000	27,000	—	—
1905	37,354,000	95,000	563,000	30,000	38,070,000	—
1920	48,304,000	163,000	809,000	45,000	49,350,000	—
1930	59,144,000	240,000	1,233,000	71,000	60,731,000	—
合	計					

第45表 東インドの人口統計表

地 域	人 口	密 度	内 部	
			土着住民	支那人を除く外国人
西 部 省	11,397,000	244	11,039,000	260,000
中 部 省	11,141,000	396	10,965,000	130,000
東 部 省	1,559,000	492	1,539,000	13,000
スラバヤ州	2,565,000	425	2,536,000	21,000
ジャバ州	15,056,000	314	14,812,000	158,000
スマタラ州	41,718,000	316	40,891,000	582,000
スマタラ州	8,254,000	17	7,745,000	27,000
スマタラ州	2,169,000	4	2,017,000	6,000
スマタラ州	4,232,000	22	4,174,000	8,000
スマタラ州	1,803,000	175	1,789,000	1,000
スマタラ州	1,657,000	26	1,646,000	1,000
スマタラ州	894,000	2	876,000	5,000
スマタラ州	19,009,000	11	18,247,000	48,000
スマタラ州	60,727,000	32	59,138,000	240,000
外 領				1,233,000
外 領				651,000
外 領				9,000
外 領				7,000
外 領				11,000
外 領				41,000
外 領				134,000
外 領				449,000

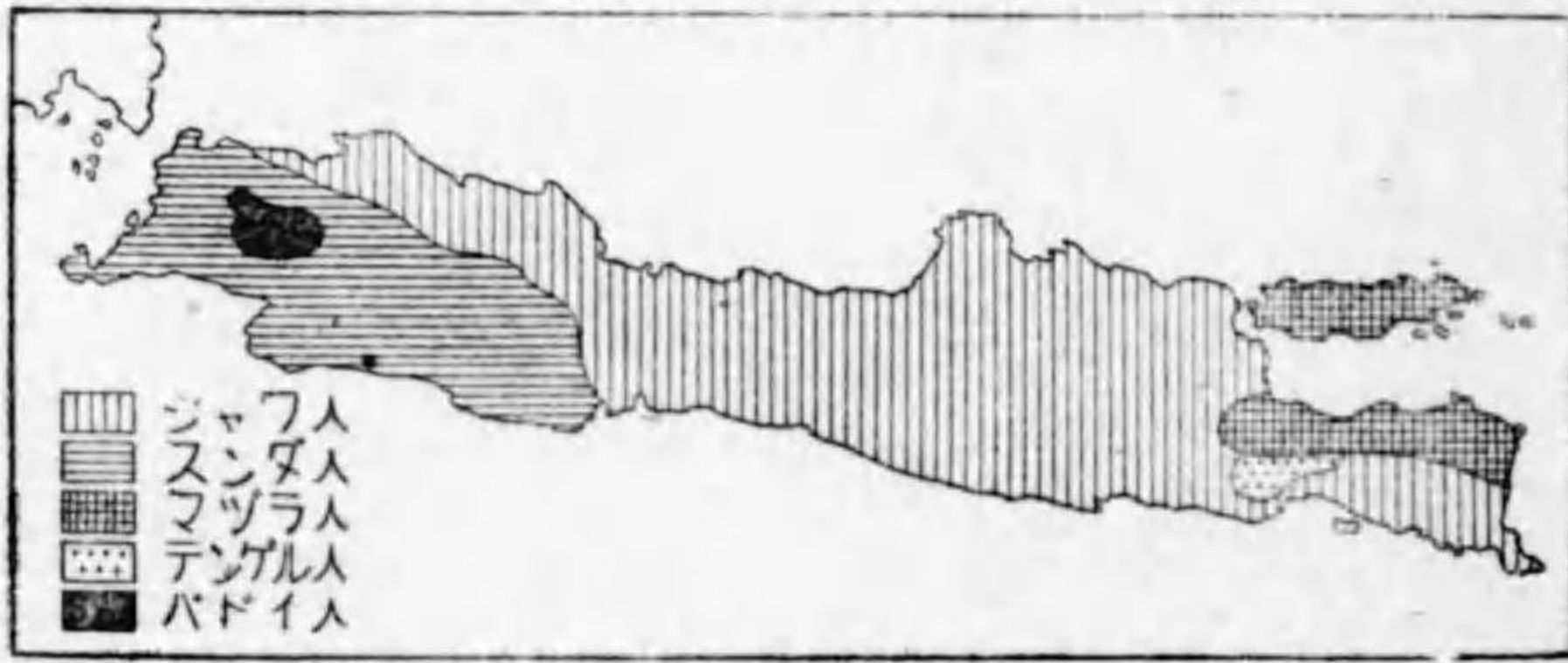
(1930年国勢調査)

第77圖 ジャワ島の人口密度圖
[平方キロ當リ=人]

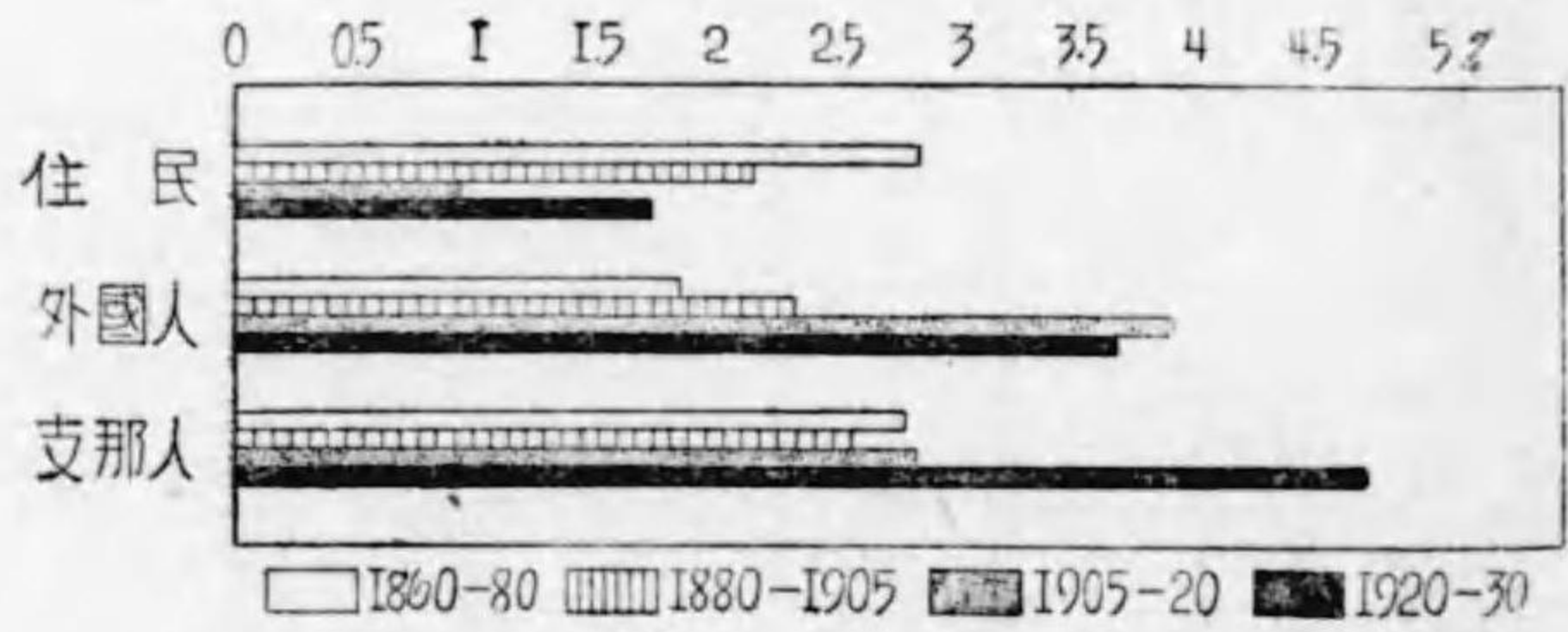


三 溫和な東インド民族

第78圖 ジャワ島の種族分布圖



第79圖 東インドの年間人口増加率



[住民のみはジャワおよびマズラにおける調査, %は年間]

一八七

第30圖 スマトラの種族分布圖



東インドにおける人口増加推定

年度	ジャワ	外領	合計
1935	44,940,000	20,470,000	65,420,000
1936	45,620,000	20,790,000	66,400,000
1937	46,300,000	21,090,000	67,390,000
1938	46,990,000	21,410,000	68,410,000
1939	47,700,000	21,740,000	69,440,000
1940	48,410,000	22,060,000	70,470,000

2 住民と生活形態

マライ族は、元來蒙古系に屬する民族であるが、民族移動の波にのつて南下し、ジャワを中心として東インド群島全體に侵潤したもので、一九三〇年の調査によると、總人口は五九、〇〇〇、〇〇〇餘人で、東インドの總人口の九七パーセント強を占めてゐる。最近の統計は發表されないで現在の實數は不明であるが、前にかかげた第四四表のやうに、一九〇五年に三七、〇〇〇、〇〇〇餘人であつた土着住民が、一九三〇年には五九、〇〇〇、〇〇〇餘人をかぞへ、二五年間に二二、〇〇〇、〇〇〇人の増加をみてをり、また、一九二〇年から三〇年までの増加率を年間約一・五パーセントとして推算すると、上にかかげた第四六表の如く、一九四〇年には七〇、〇〇〇、〇〇〇餘人に達してゐることになる。

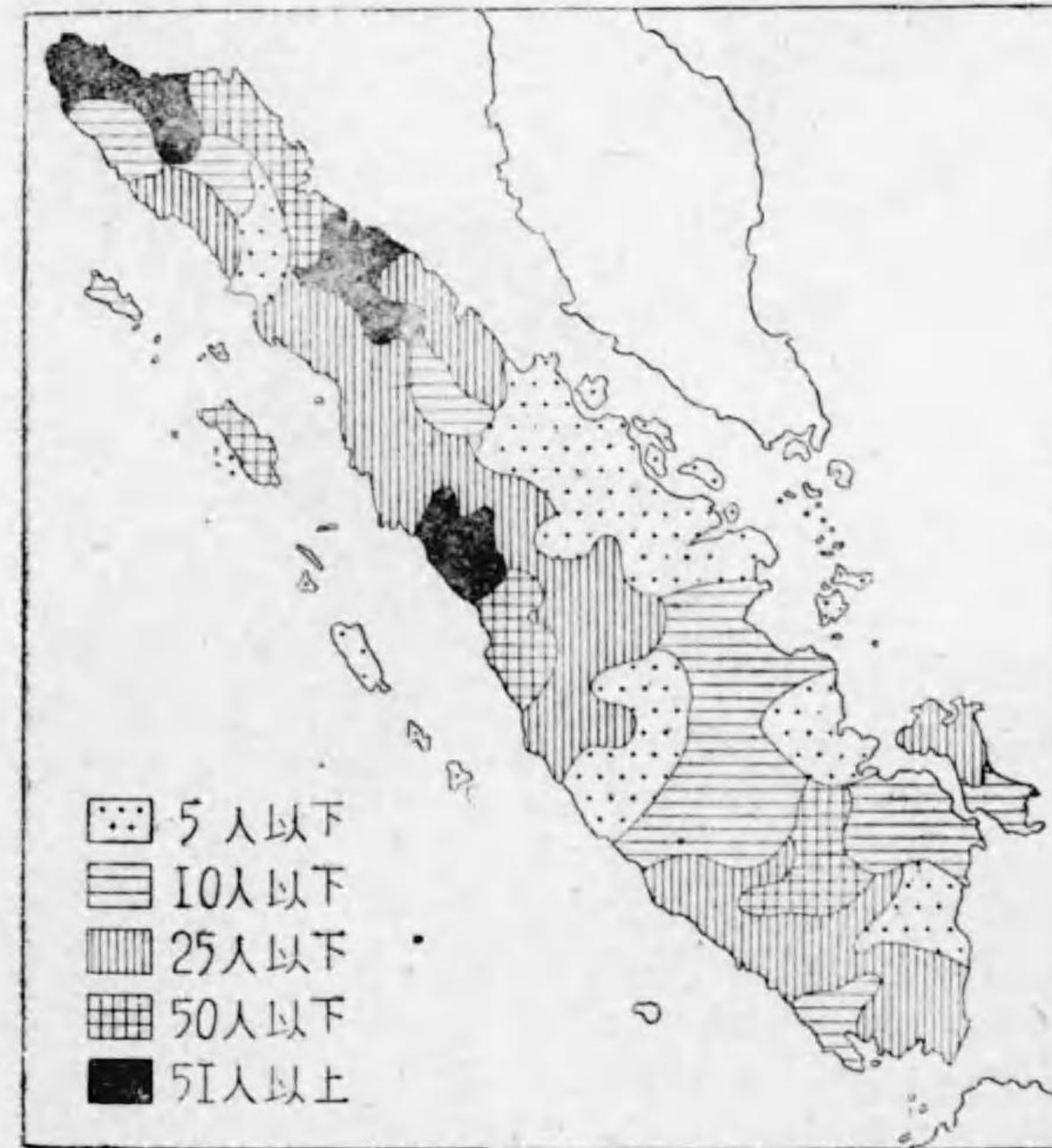
マライ族の太宗とする原住民は、前にかかげた第四五表の如く、ほとんどジャワおよびマズラに集中し、土着住民總人口五九、一三〇、〇〇〇人のうち四〇、八九〇、〇〇〇人がジャワおよびマズラに住み、のこりの一八、二四〇、〇〇〇人が、スマトラ、ボルネオ、セレベス、その他の外領に分布してゐるのであるが、マライ族

第82圖 ボルネオの種族分布圖



第81圖 スマトラの人口密度圖

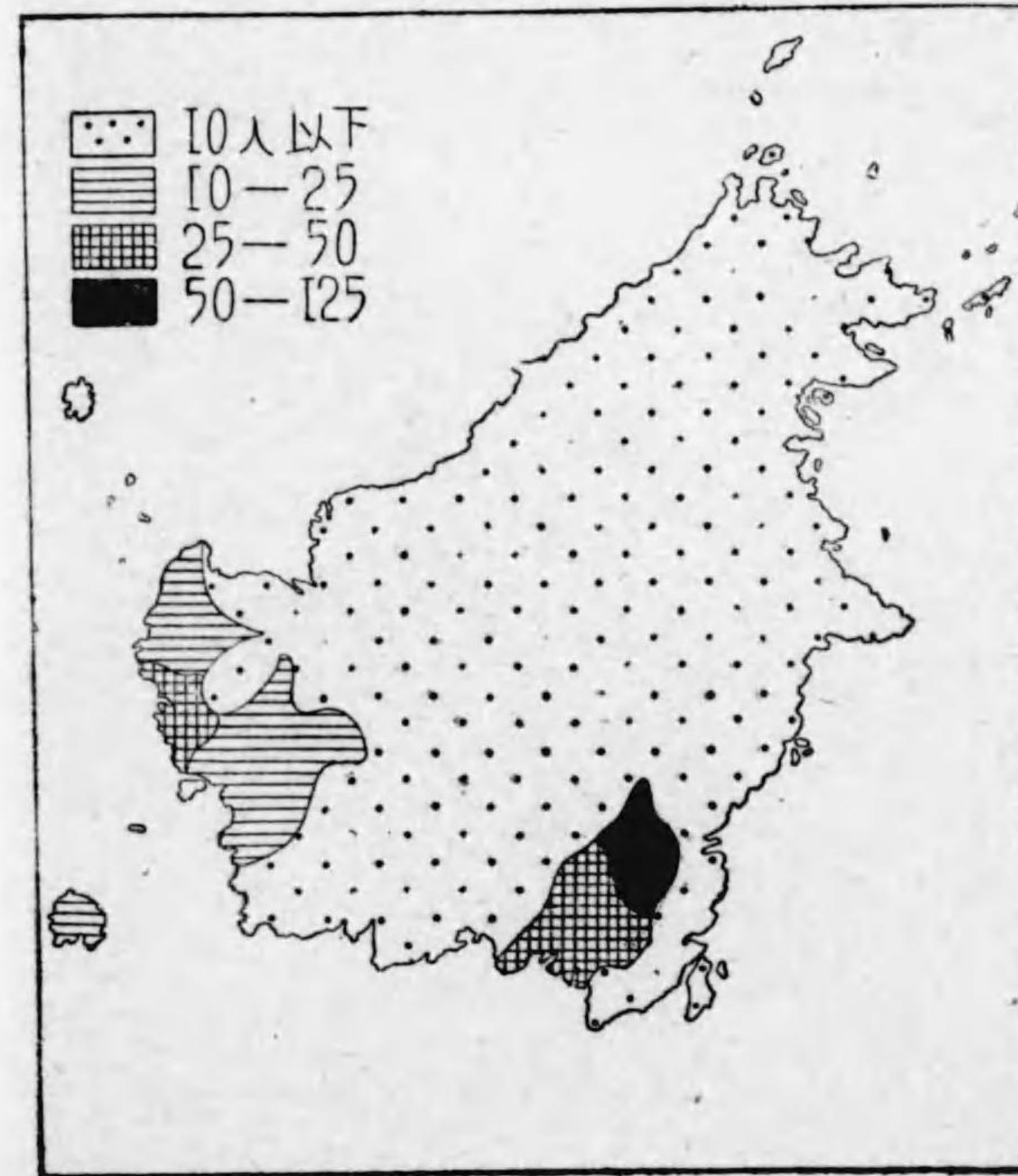
[平方キロ當り]



第84圖 セレベスの種族分布圖



第83圖 ボルネオの人口密度圖
〔平方キロ當り〕



と總稱されるこれら原住諸種族の基本的性格は、農業労働者のそれであつて、しかも、文化程度の低級な種族はもちろん、ジャワ人の如く比較的高度の水準を維持する種族にしても、いはゆる封建的な小規模農業の經營に従事してゐることが一つの特色である。

由來、東インドの農業經營は、白人のそれと土着民のそれとに大別されるが、ヨーロッパ人の農園が、砂糖、ゴム、コーヒー、茶、規那、ココア、たばこ、グタバルチャ、フィカス、やし、コカ、こしょう、オイルパーム、にくづく等の輸出向農産物を對象としてゐるに反し、土着住民の農園は、米を第一として、とうもろこし、カツサバ、落花生、豆類等の内地消費向農産物を對象としてゐるのであり、その經營はいまなほきほめて原始的な生産方法を固守してゐるのである。

第47表 東インドにおける土着住民の耕作面積 (1932年)

作物別	面積(ヘクタール)
水稲	8,070,486
陸稲	1,057,068
とうもろこし	4,950,945
カツサバ	1,774,113
落花生	530,491
大豆	588,549
その他の豆	547,383
薯蕷	358,320
甘藷	350,304
たばこ	176,071
番薯	59,237
馬鈴薯	27,682
藍	4,893
その他	1,261,747
計	19,767,839

また、一九三〇年に舊蘭印政廳が發表した統計をみても、農業人口として計算された一、二、〇〇〇〇〇人のうち、ヨーロッパ人の近代的エステート經營に従事するものは一、三五〇、〇〇〇人で、わづかに一〇パーセント程度を占めてゐるにすぎないのである。

ヨーロッパ各國の植民地行政のうち、東インド

第85圖 ジャワ島の農産 (1934年) [ゴム・規那]



三 温和な東インド民族

の經濟政策ほど成功した例は少いとよくいはれるが、植民地から得られるだけの最大限をまうけることが成功であるならば、それはまさしく事實であつた。

一六世紀末東インドへ侵入して以來のオランダ政府の公然の目的は、この「エメラルドの島々」を最極限にまで開發することであつた。いはゆるファン・テン・ボッシュ制とよばれる「強制栽培制度」もそのあらはれであり、オランダ植民當局は、一八七七年において實に八三二、〇〇〇、〇〇〇フロリンを本國に送金し得たのであるが、その後も、漸次國際的植民地の性格をおびるにいたつた東インド諸島の土着農業は、各國の私的企業の跳梁にまかされて、つひに食糧の自給自足、農業經營の多角化といふ農業經濟本來の發展方向へ指導されることなく、従つて、マライ族の民族としての原來的な發展は、今日にいたるまですこしもみられないのである。

(3) 民族の現状

マライ族を構成するおびただしい種族、たとへばジャワ島のジャワ人、

マズラ人、スンダ人、スマトラ島のミナカバウ人、セレベス島のミナハサ人、マカッサル人、プギ人などのあひだには、村落形態、生活意識等のなんらの共通點がない。すなはち、相互に種族の性格をことにし、ミナハサ人がアンボイナ人を、また、アンボイナ人がバプア族を支配するといふありさまで、たがひに分裂反目しあつてゐるのであつて、そこには、いまだ民族的統一はなされてをらず、回教運動を濫觴とする汎インドネシヤ民族運動も、一部少數の民族主義者、もしくは共産主義者によつて提唱されたにすぎないのである。

オランダ植民当局は、根本的には搾取主義經濟政策をとるとともに、文化的には蒙昧政策をとり、先進文化の潮流を土着住民の中へつぎこむことを極力さけたのであつて、今日東インド人で文字を解するものは、總人口のわづか五パーセントといふおどろくべき状態で、あとの九五パーセントは無教育な原始人のまま放置されてゐるのである。

(4) 回教と民族運動

東インド、タイ國、佛領インド支那、ビルマ等における如く、中核となる國民的民族をもたない。東インド社會はかす多い諸種族のあつまりであり、それに華僑をも加へて、經濟的にも、政治的にも複雑な社會の形態をとつてゐるのであるが、この複雑な社會をつらぬく一本の線は、宗教問題、すなはち約六〇、〇〇〇、〇〇〇人の土着原住民のうち、五〇、〇〇〇、〇〇〇人ないし五四、〇〇〇、〇〇〇人までを占める回教徒である。ことに、東イ

ンド諸種族の中核をなしてゐるジャワ族、スンダ族、マズラ族のいづれも回教のシャフェイト派を信奉してゐるのであつて、その生活風習を回教のおきてにしたがつてかたちづくつてゐることは、對インドネシヤ諸政策の遂行にあつて、ふかく留意されなければならないところである。

インドネシヤの回教化は、西歴一四世紀ごろからはじめられたもので、主としてインドから渡來した商人、後にはアラビヤ南岸からやつてきたアラビヤ人によつて回教が傳播され、それよりさきすでに五世紀ごろまでのヒンヅー教文明と八世紀ごろ傳來し一二世紀より一五世紀ごろまで全盛をきはめた佛敎の影響によつて宗教的素地をあたへられてゐたインドネシヤ全島に、潮の如くひろがつて行つたのである。

二〇世紀初頭、オランダがインドネシヤを完全にわがものとしたころ、インドネシヤの回教化は一應その極點に達したのであるが、このごろまでの回教問題は、インドネシヤにとつても、オランダにとつても、なんら重大な問題ではなかつた。それを一個の政治問題と化したのは、日露戦争のもたらした東洋の覺醒であり、世界大戦によるヨーロッパの混亂である。日露戦争における日本の「世界を驚倒させた」勝利が、支那革命を生み、トルコの奮起をうながした如く、インドネシヤにおいても、最初の國民組織であるブーディ・ウートモ（一九〇八年）が成立したのである。このブーディ・ウートモは、インドネシヤ民族運動の濫觴ともいふべきものであるが、民族運動については後にのべるごととして、この民族の自覺を契機として相ついで結成された回教諸團體の動向をみることにしよう。

サリカト・イスラム(回教協會) ジャカルタにおける經濟團體、サリカト・ダガン・イスラム(回教商業者協會)が發展して、一九二二年サリカト・イスラムとなつたのであるが、厳格な規約のもとに政治運動へのりだし、一九一六年にはバンドンに第一回全國大會、つづいてジャカルタに第二回大會を開いて急進的な傾向を示した。このサリカト・イスラムは、回教團體でありながら、回教の色彩は比較的にうすく、民衆の意向をオランダ政府當局に上達し、國民參議會に委員をおくり、また、住民の罷業、暴動を指導するなど、主として政治問題に活躍したのであるが、一九二九年にサリカト・イスラム・インドネシア(インドネシア回教協會黨)として再發足して以來、民族主義政黨聯盟に加入して、ことごとくに政府當局に抗議をつづけた。現在百數十の支部と、約四〇、〇〇〇の會員を擁してゐる。

モハマディヤ協會 サリカト・イスラムが、宗教團體といふより、むしろ政治團體の色彩をおびてゐるに反し、このモハマディヤ協會は、いかにも宗教團體らしい行きかたを示しながら、同時に、政治結社としてインドネシア政黨派の有力な一員となつてゐる團體である。

この協會は、ジャワ島を本據として、回教の傳道と住民の教育とに力を入れ、みるべき業績をのこしてゐる。すなはち、傳道師學校の建設、不信徒への傳道、さらに療養院、貧民救濟所などの社會事業までがこの協會の手によつておこなはれてゐるが、ことに、學校教育については、この方面に對するオランダ政府の事業よりも一層熱心であり、また、大がかりである。すなはち、小學校、豫備學校、標準學校、あるひは師範學校等、あらゆる

種類の學校を經營するとともに、それらの上に回教大學まで置かうとしてをり、また、婦人運動に對しても積極的である。

このほかに回教の革新團體として、ベルサトゥアン・イスラム、ワル・ファジュリ協會、エル・イシヤド協會、ベルサトゥアン・アラブ・インドネシア協會、ラホール派といつた諸團體があり、それぞれ政治問題なり教育問題なりに首をつつこんでゐるが、いづれも小規模で、大きな勢力をもたないのである。

(5) 溫和なる民族

これらの回教諸團體が、複雑な東インド社會にとつて、すくなくとも統一のくさびであることはまちがひのないところである。その意味において、回教の東インドにおける意義はゆるがせにできないのであるが、回教諸團體のあひだになんらの連繫共同のないこと、また、たとへばアラビヤ、インド等における他の回教團と、政治的宗教的つながりをもたないことは、マライ族の歴史的大多數が回教徒であるといふ外見からくる印象ほどには、東インドの回教は強い力を發揮してゐないのである。この分裂的性格は、インドネシア民族運動にまた顯著にあらはれてゐるのである。

インドネシアの民族運動は、日露戰爭に刺戟されて、一九〇八年ブウディ・ウートモとよばれる土着住民團體

の結成にはじまり、ついで一九一七年から二七年にかけてサリカト・イスラムを中心とする騷擾をくりかへし、その後、共産黨的な色彩を多分にもりこむにいたつたのであるが、現在インドネシア民族運動の二大潮流をなしてゐるインドネシア國民黨を代表する真正民族主義派と、インドネシア共産黨を代表するボルシェヴツキとのあひだに、根本的な對立があることはもちろん、その他群小の政治團體は、あるひは政治協調派であり、あるひは非協調派であつて、それぞれの標榜する民族的要求には、すこしも一貫性がないのである。そこにあるものは、ただ、土着住民の白人に對する反感と憎悪だけである。このことは、東インドの構成種族が、あまりに複雑であり、地理的にあまりにまとまりがないことに原因をみるべきであらうが、より根源的には、オランダのつた蒙昧政策が、經濟的にも、文化的にも、インドネシア、マライ族を未開のわく内にとちこめたことにあるといはなければならないのである。

インドネシアの民族運動は、過去において、また近年において、他の南方諸地域のそれにくらべて不活潑である。また、東インド諸種族は比較的温順であり、ことにジャワ人などは、およそ地球上にすむ人種のうちでもっとも温和順良な性格をもつといはれてゐるが、このことはただちに對インドネシア民族政策の安易さを示すものではない。たがひに分裂し、そして複雑な社會をかたちづくつてゐる東インド諸種族を、共榮圈構成民族の一翼として育成することは、民族的まとまりをもつてゐる他の地域におけるより一層困難であるともかんがへられるところである。日本農業の先進技術を導入して、農本民族として彼らの正常な發展をはかることが肝要である。

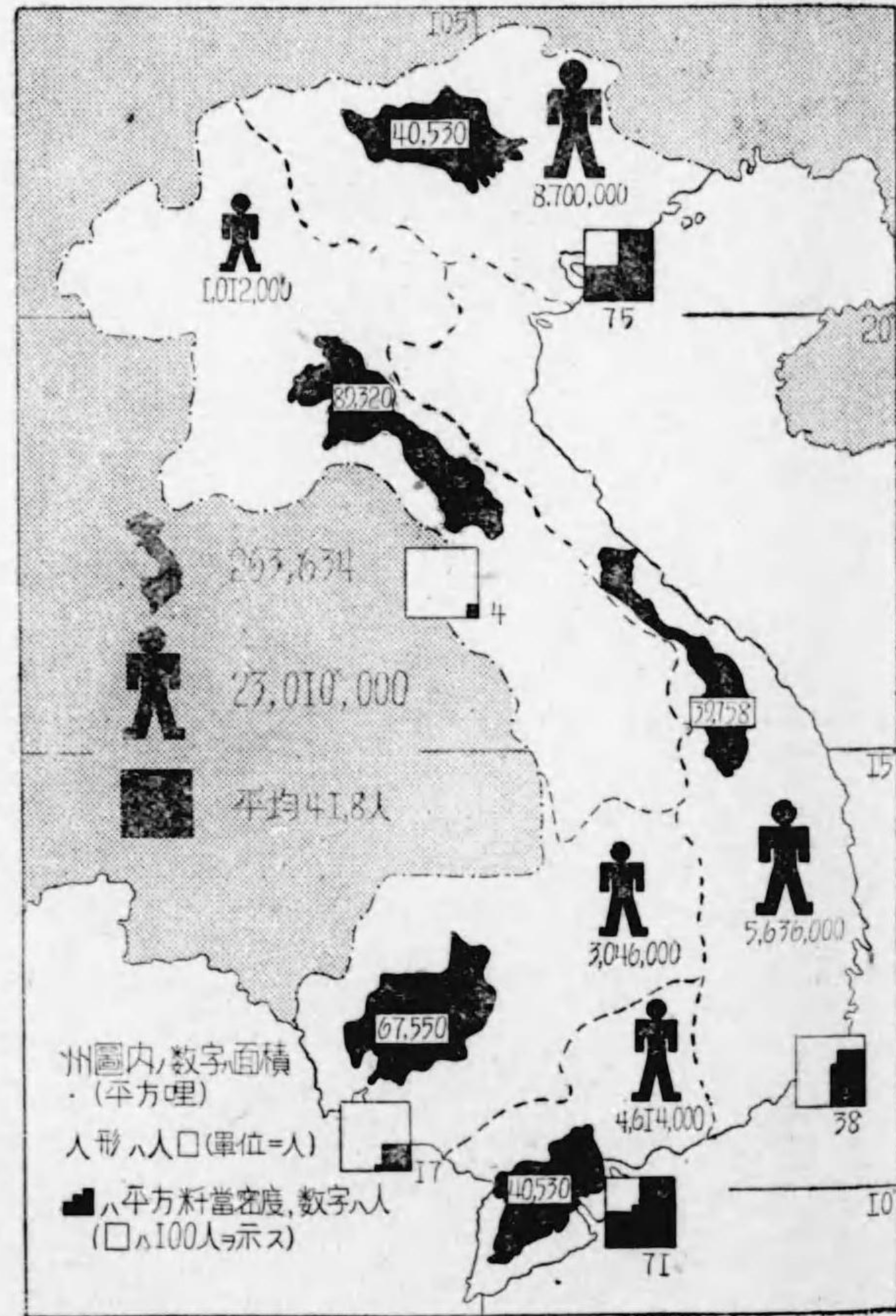
四 アンナン民族抗爭史

(1) 佛領インド支那の民族

フランス・インド支那聯邦は、インド支那半島の東海岸を占める舊越南帝國の本國およびその屬領、タイ王國の舊屬領、それに廣州灣租借地を合して形成する植民地であり、總面積は七四〇、〇〇〇平方キロであつたが、タイ國との失地問題が一九四一年三月わが國の調停によつて解決した結果、約一割五分を減じ現在面積は六七〇、〇〇〇平方キロである。フランス本國の約一倍半、わが總面積とほぼ同じである。

これをいまずこしく細別すれば、北部のトンキン灣にのぞんでトンキン平野をなすトンキン地方、トンキン地方とランピアン高原の中間地帯に位しアンナン山脈の山脚が南支那海岸に迫るアンナン海岸地方、アンナン山脈を中心にとんど山地と高原からなるラオス地方、東にアンナン山脈、西にカルダモナス山脈、北はダンレク山脈にかこまれて陥落地域をなすカムボチャと、これらの山脈からはなれメコン河流域の交趾支那よりなつてゐる。當領の一九三六年における總人口は二三、〇〇〇、〇〇〇人である。

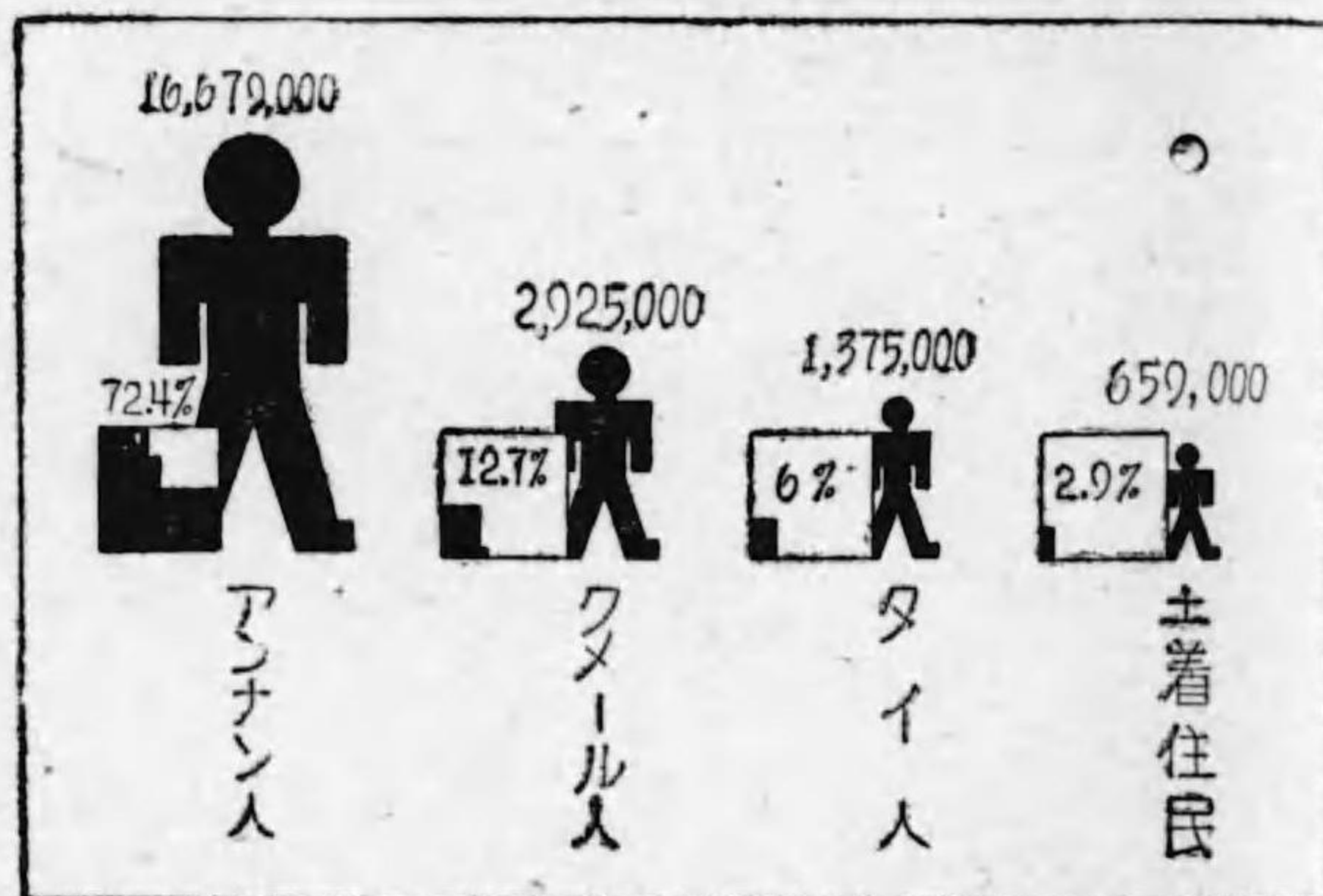
第87圖 佛領インド支那の地方別面積および人口



第86圖 佛領インド支那全圖



第89圖 佛領インド支那の人種別人口



四 アンナン民族抗争史

人種構成はきまめて複雑であつて、先住民族としてネグロイド族に属するモイ人、未開の猿族、苗族、ロロ族等のほかに、チベット、支那、インド等から侵入してきたクメール人、マライ人、タイ人等があり、さらに、後代流入した支那人、フランス人、日本人等がある。

以上の種族のうち、もつとも指導的中核分子であるアンナン人については後述することとして、その他の諸種族の概貌をみることにしよう。

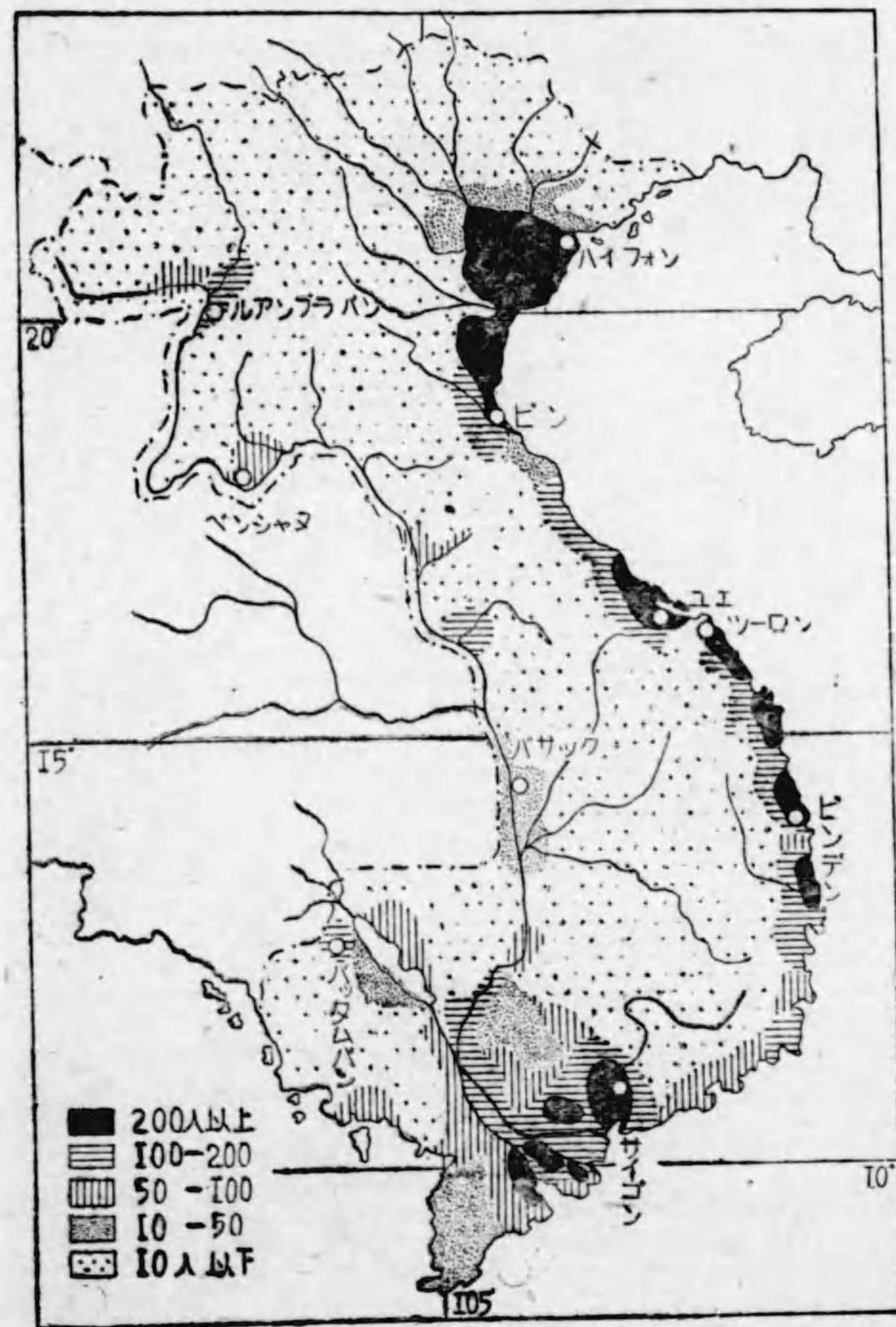
原始先住諸族 佛領インド支那はいはゆる北高、南低の地勢であり、その住民は山地種族と平地種族とに分れる。

平地種族が山地種族を壓迫して勝利者となる例は、つねに歴史にみられるところであるが、その例にもれず、佛領インド支那の原始先住諸族もむかしから山地の住民であつたか、あるひは、他民族に壓迫されて山地におひつめられたかのいづれであつて、ほとんどが北部山間に分散し、文化程度のひくい未開の

二〇五

第88圖 佛領インド支那の人口密度圖

〔平方キロ當り〕



第二部 南方の民族

二〇四

第48表 佛領インド支那における未開種族の分布状態

族系	種族	分布地方	人口(人)
オーストロアジア族系	モイ族	北部ラオスおよびアンナン山地	750,000
	カムク族	ルアン・アラバン地方	250,000
	チャム族	アンナン山地	50,000
タイ支那族			—
チベツト系	ロロ族	ラオス北西國境山地	12,000
	猪苗族	トンキンおよび北ラオス山地	214,000
	苗族	トンキン山地	77,000

四 アンナン民族抗争史

生活をおくつてゐる。その數も佛領インド支那全人口のわづか四パーセント餘にすぎず、その社會的勢力も、なんら重要性をもつてゐない。

クメール族 クメール族、すなはちカムボヂヤ人は、オーストロアジア系に屬しネグリート族とマライ族との混血したものといはれるが、このクメール族は、すでに五世紀ごろのむかし、いまの南部カムボヂヤの沃野に扶南國なる王國を樹立し、その後、真臘國と合して一二世紀から一三世紀にわたつて繁榮をほし、いまに、クメール文明の精華ともいふべきアンコール・ワットの大がらんを建造し、アジア美術史上に不朽の一頁をのこした種族であるが、メナム流域を南下してきたタイ族およびアンナン人によつて漸次壓迫され、また、原住民の血をまじへてその勢力を失墜した。現在のカムボヂヤ王國がその残りであるが、民族的生命はすでに消滅し、全く老衰期に入つてゐる。

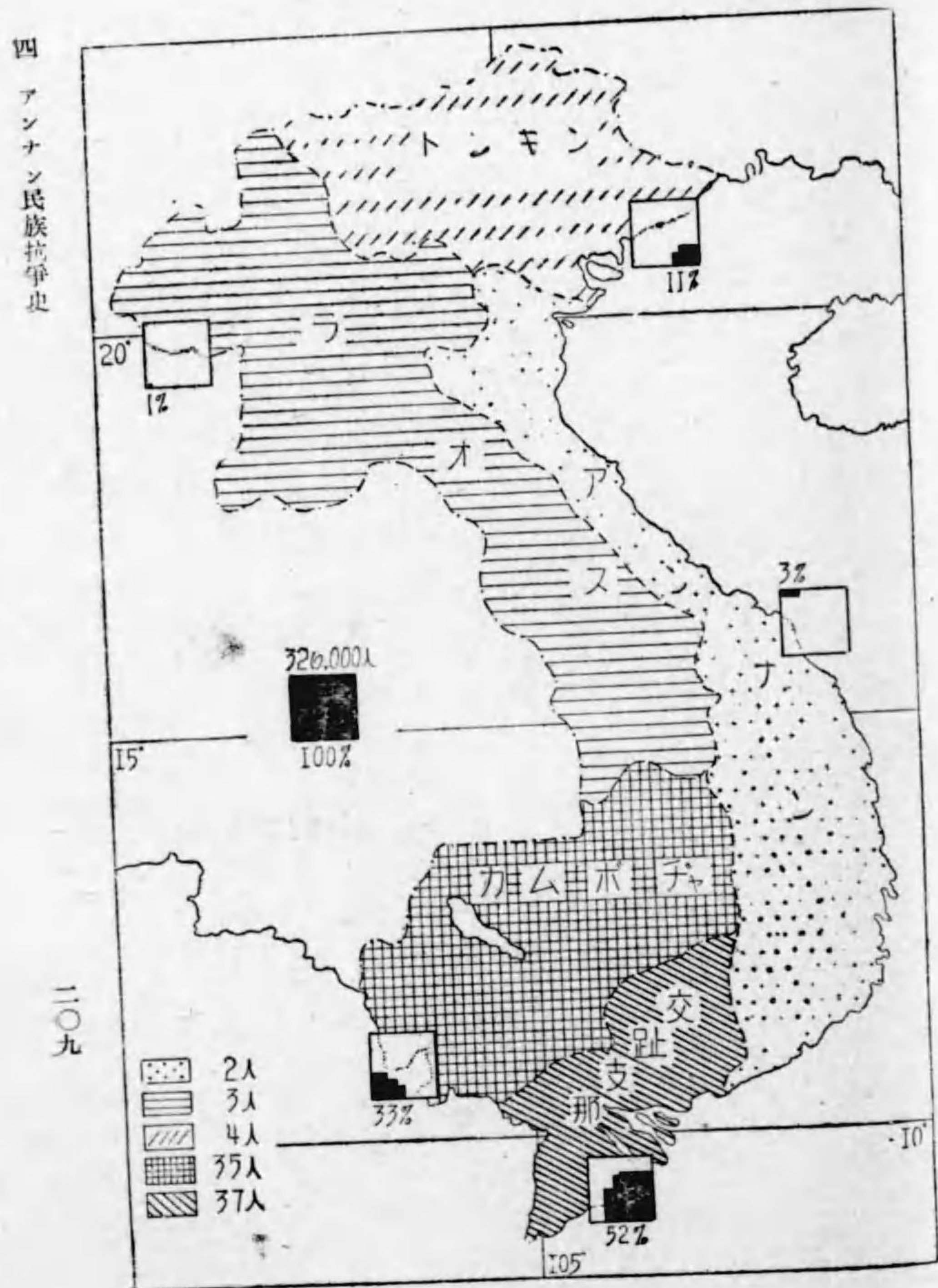
人口は約三、〇〇〇、〇〇〇人で、全佛領インド支那人人口の一三パーセントにあたり、カムボヂヤ王國および交趾支那の西部に分布してゐるが、タイ族の影響をうけて佛敎を信仰し、朽ち崩れたアンコール・ワットをおもはせる宗教的祭壇氣のうちに水田耕作に従事し、米作をいとなんでゐる。

第90圖 佛領インド支那の種族分布圖

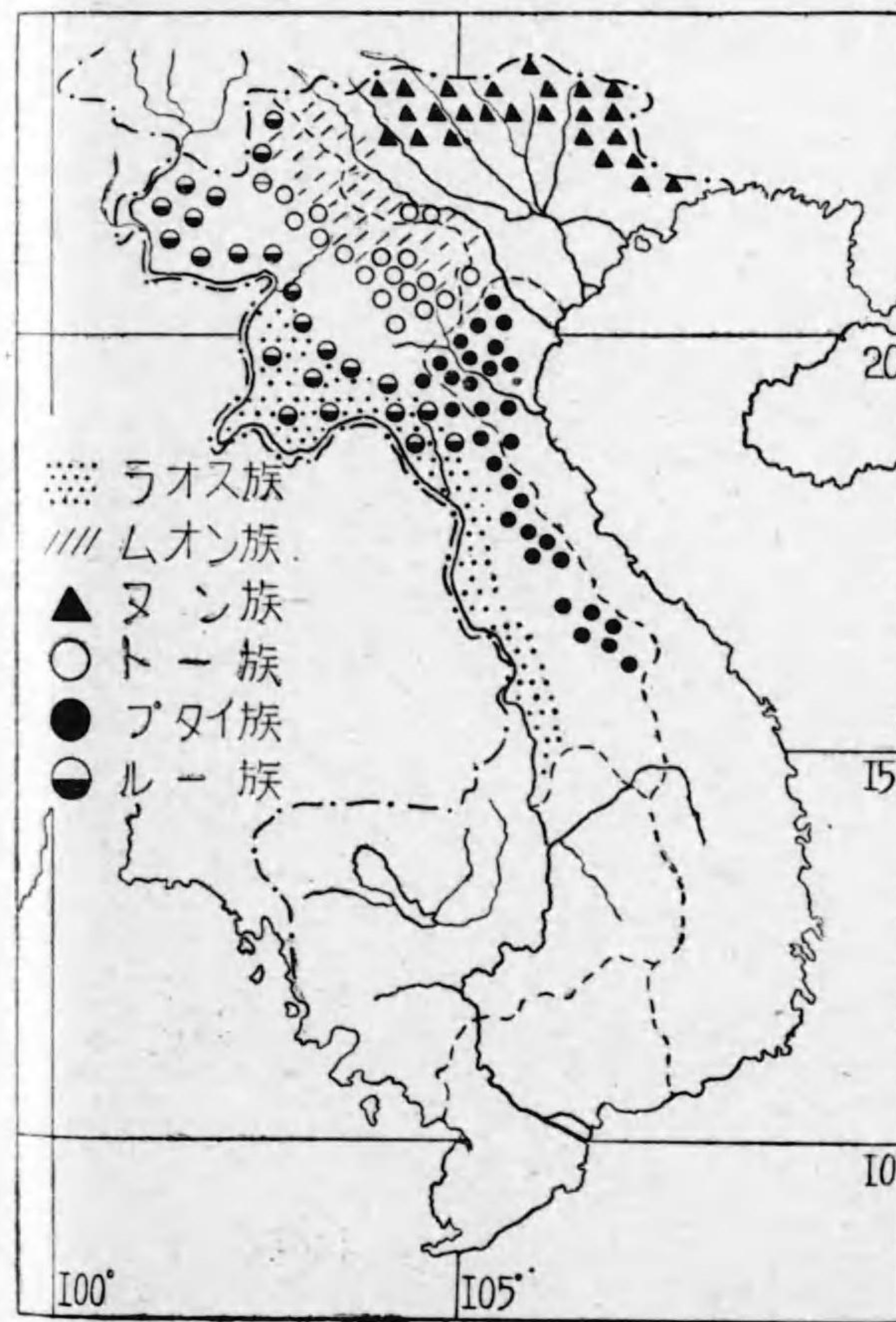


第二部 南方の民族

第92圖 佛領インド支那における華僑地区別人口密度および比率
〔平方キロ當り〕



第91圖 佛領インド支那におけるタイ族の分布圖



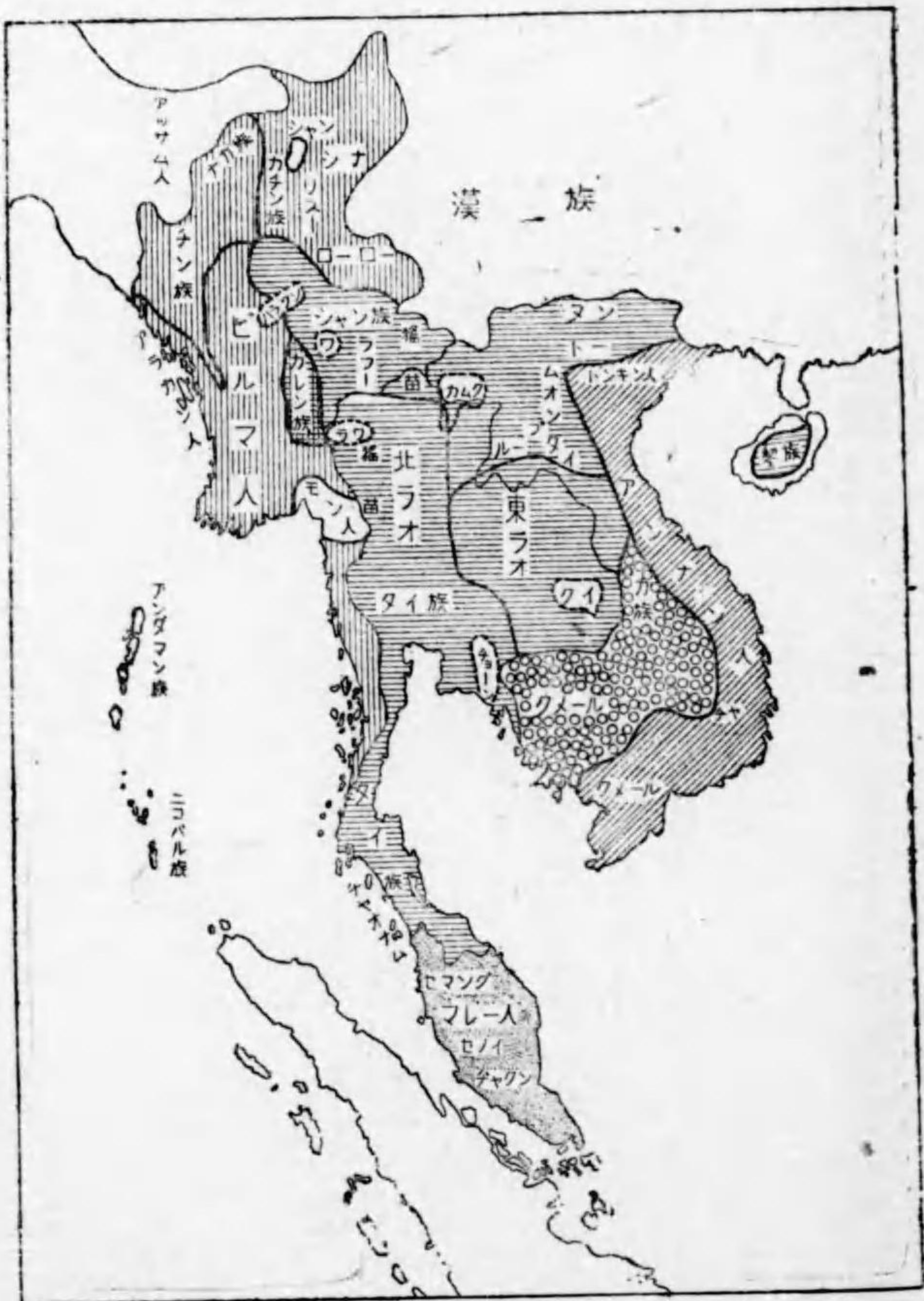
タイ族 タイ族は、アンナン人同様蒙古系のモンゴル族に属し、ウンナン方面から南下して先住種族と混血したものであり、また、七、八世紀ごろには先住民族を征服して一時勢力を伸ばしたこともある。現在の人口は北部山岳地帯に住むもの、および南部メコン河流域に居住するものを合して總數一、三七五、〇〇〇餘人で全佛領インド支那人の六パーセントを占めてゐる。

タイ族のうちで代表的な種族は、メコン河峡谷に住むラオス族であつて、彼らは、他のタイ族が農耕を主業とするに對して、メコン河の急流に舟をあやつるのがたくみであり、狩獵と漁業に従事してゐる。一般にタイ族は原始産業の技術におとつてをり、たゞ特色として、比較的商才にめぐまれてゐる。

華僑 總數三二六、〇〇〇人、佛領インド支那人人口の一・四パーセントを占め、その大部分が交趾支那およびカムボヂヤの都市に在住してゐる。すなはち、シヨロン、サイゴン、ブノンペン、ハイフォン、ハノイ、ナンディン、ツランの七大都市に在佛領インド支那華僑總數の三六パーセントがをり、ことに、シヨロンは華僑の町といはれるくらいで、同市人口のなかばは華僑が占めてゐるのである。

佛領インド支那華僑の經濟活動は、主として米の取引であるが、特に交趾支那およびカムボヂヤにおいては、米商人、穀仲買人、穀採集人として佛領インド支那の素人取引に對し絶對的な勢力をもつてゐるのである。すなはち、米作そのものはすべて土着民の手になるところであるが、その土地を所有する中・小地主として相當の地盤をもち、精米業者、米の輸出業者等は幫の組織を利用して相互の強固な連絡をはかつて他の追隨をゆるさない

第93圖 インド支那における民族分布圖



のである。

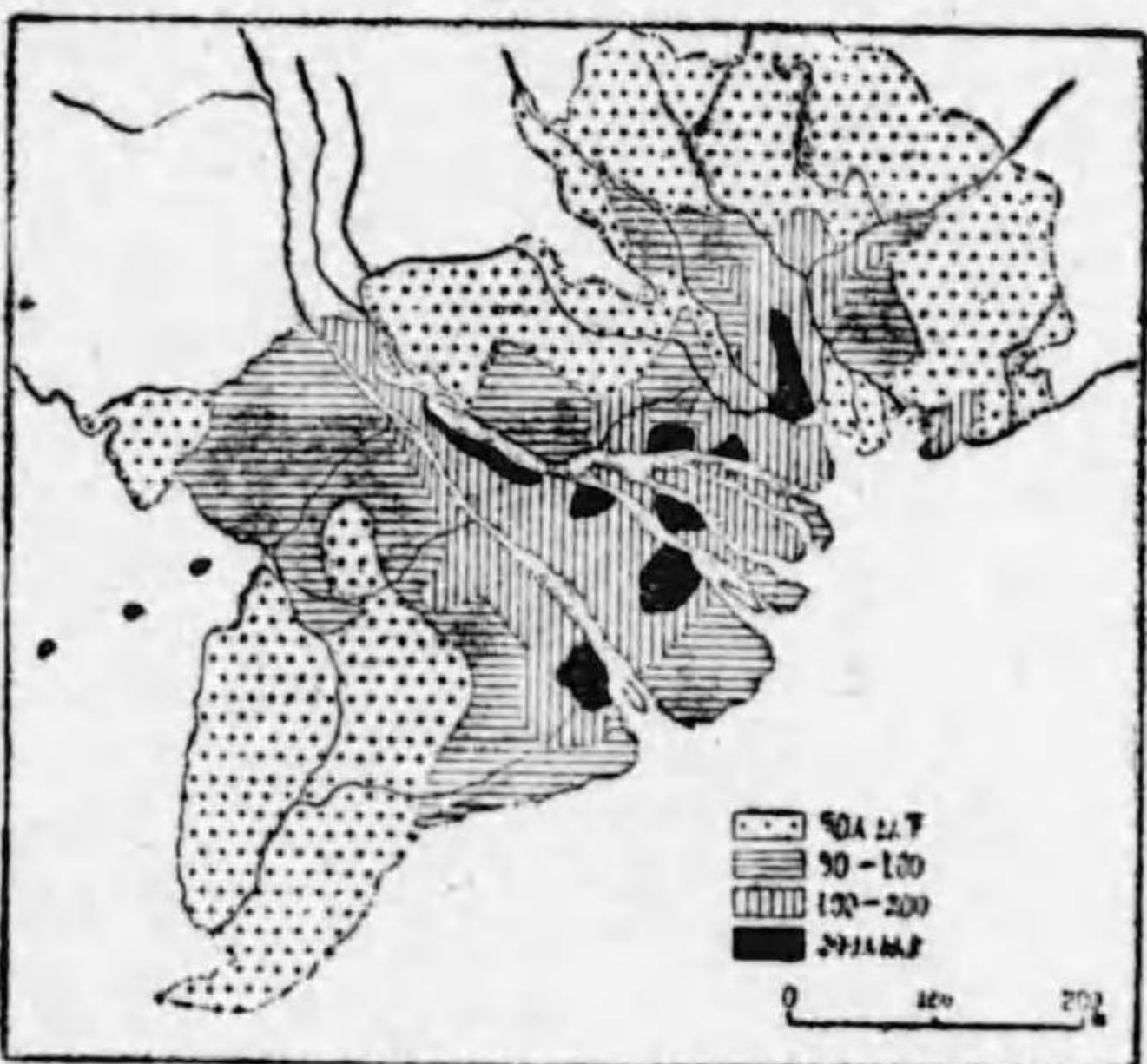
米穀に關聯して、買入組織を通じて買集められた米穀の輸送に従事するジャンクの活動も絶對といふべく、交趾支那のみでも一二、〇〇〇隻をかぞへるといはれ、トンキン灣やトンレサップ、メコン河域で漁業に従事する

約一〇、〇〇〇人にのぼる舟夫とともに注目されるころである。

また、米の他に棉花、砂糖、香料、絹、茶等にも手をおぼしてゐるが、醸造業、煙草、陶器、機械各製造工業、造船、皮革工業等の企業經營にもりだしてをり、さらに、鑛山労働者として、まことに足跡のいたらざるところのない状態であつて、佛領インド支那の經濟界にとつてなくてはならない存在となつてゐるのである。マライにおけるほどの絶對的重要性はないとしても、佛領インド支那華僑もまた、少數なるがゆゑをもつてゆるがせにはできないであらう。

第94圖 カムボヂヤの人口密度圖

〔平方キロ當り〕



② アンナン民族抗爭史

アンナン人が佛領インド支那諸民族の中核的存在であることは前述の通りであるが、このアンナン人は、漢民族に壓迫されて南支那から交趾支那平原あたりに移動してきたもので、人種としては、インドネシヤ族とタイ族の混血によつて形成されたものとされ、その人口は一六、〇〇〇、〇〇〇をこえ、佛領インド支那總人口の七二・四パーセントを占めてゐるのである。

由來、アンナン人は、ふるくから國家生活をいとなんでゐた民族であつて、紀元前二世紀ごろすでに獨立國にちかい國家を形成してゐたのである。その後、唐と不斷に闘争し、しばしば支那に征服されたが、そのあひだ主として後漢の支那文化を攝取して、民族としての水準をたかめ、皇紀一六六九年には、李太祖がたつて李朝を創め、つひに越南王國を確固不動の基礎においたのである。

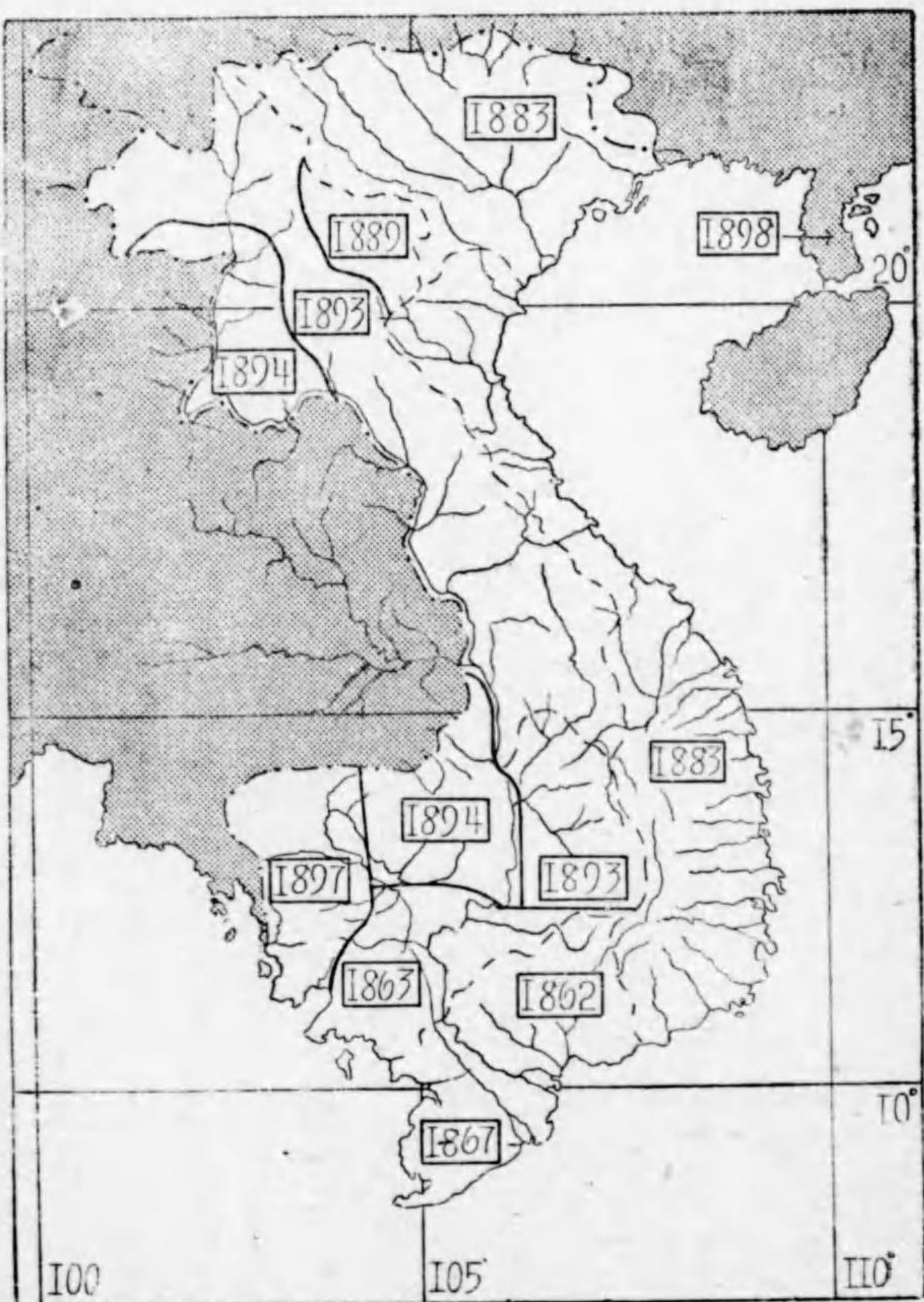
かかる傳統と文化とを持つアンナン人が、フランスの侵略に對して猛烈に反抗したことはいふまでもないが、その反抗が明瞭に民族運動の性格をおびるにいたつたのは、一九〇四年の日露戦争における日本の勝利であつたのである。

フランスのインド支那侵略は、一七八七年交趾支那王の阮福映とフランスとのあひだに攻守同盟條約が締結されたのに端を發するが、フランスは一八六三年カムボヂヤ救濟の名をかりてカムボヂヤに兵をすすめてこれを保

護國とし、また、交趾支那におこつた反フランス暴動を機として、交趾支那西部をも略取して、全交趾支那を手中にさめたのである。

ついで、一八八四年にトンキンを、翌八五年にはラオスを保護領とし、インド支那王国のすべてを支配するにいたつたのであるが、フランスがインド支那侵略にもちひた手段は、同化政策と強壓政策との反復に終始したのである。すなはち、当初は一切の地方的實情を無視し、舊來の傳統的な諸機構は、すべて野蠻な遺物として假借なき舊文化の破壊をおこなひ、その結果、土着住民の猛烈な反抗にあふや彈壓によつてこれを沈黙させ、また、厳格な同化政策の強行と、フランス官僚群の腐敗とによつて、アンナン、カムボヂヤを中心にひきおこされた騒擾を契機として、一八九七年にポール・ドゥメルが現地に派遣されることとなつたのであるが、ポール・ドゥメルの植民地統治は、インド支那を強固な政治的統一體として確立させ、特に阿片、鹽、アルコール類の專賣を斷行して、クレマンソーの「屑の植民地」とまで斷ぜさせ、一時フランス本國政界の輿論を沸騰させたほどの佛領インド支那の赤字財政を克服することに成功したのであるが、ポール・ドゥメルのこの經濟改革は、もつぱらかぎられた公共事業に力をそいだけで、土着産業はかへつて抑壓して土着民の經濟を犠牲にし、その上民衆に重税を課したため土着住民は經濟的に重大な怖威を受けるにいたり、不平、不満、怒嗟の聲をいよいよ増大させるにいたつたのである。ポール・ドゥメル以後はこれにつづくアルベル・サローの時代とともに、佛領インド支那統治は比較的成功的といはれてゐるのであるが、このサローおよびM・ロング等の統治もべールやポー

第95圖 フランスの佛領インド支那略取年代圖



ルの政策を踏襲して大體のところ安泰をたもつた程度で、佛領インド支那土着住民の反抗を鎮撫し得たわけではなく、たとへば、上述のごとく土着住民が生活上必須としてゐた鹽およびアルコールを政府の専賣としたため、はなはだしく國民の不滿をかめたことがあつた。トンキンの監獄はアルコール密造者によつて充満したとさへつたへられてゐるのである。

さらに、土着住民に對して種々の苛酷な悪税が課され、ことに、一八歳以上の成年者に對する年二ピアストル五〇セントにのぼる人頭税は、悪税の最たるものであり、これらの税に對する諸民族の鬱積した反抗が、日本の勝利を導火線として、漸次佛領インド支那諸民族の、ことに、國民的氣魄にもえるアンナン民族の獨立運動を發展せしめたのである。

一九〇四年にアンナンの儒者潘佩珠なるものが日本に來朝し、一九〇六年歸國したのであるが、かへつてから日本遊學の同志をつのり、その結果、アンナン王族の直系たる疆抵のほか、一〇〇名以上の同志が、フランス官憲の壓迫をのがれて日本に渡來してきた。彼らは日本にあつて、アンナン本國の同志にはたきかけ、その結果一九〇八年には各地に暴動の勃發をみたが、民族運動が本格化したのは、一九一二年の清朝の覆滅を機としてであり、支那における新しい中華民國の誕生は、アンナンの獨立運動に拍車をかけ、一九一四年から一五年にかけて各地に暴動が頻發し、當時の總督アルベール・サローの襲撃事件までおこるにいたつたのである。

しかし、それまでアンナン民族運動の保護者であつた日本は、日佛條約の締結によつて、アンナン志士に對し

て冷淡な態度をとらざるを得なくなつたため、アンナン獨立運動の中心は支那にうつり、一九一二年には廣東に越南光復會が組織され、また、同會を主體として假政府が設立されたのである。

廣東の假政府は、支那革命黨と連絡をとつて、さかんに本國にはたきかけ、インド支那各地には革命銀行が設立され、これらの銀行は、いづれも紙幣を發行し、フランス勢力を撃退したのちに正貨と交換すべきものとし、その通用をこばむものは非愛國者として指彈された。

また、一九一四年に世界大戰が勃發し、日本および支那が聯合國側にたつたため、アンナン民族主義者は苦境にたつこととなつたのであるが、なほドイツと連絡して、トンキン、サイゴン等に反抗運動がつづけられたのである。

フランス政府は、これに對して懐柔政策をとり、アンナン人の吏官を途用して彼等の歡心をかふとともに、過激分子を徹底的に彈壓し、ようやくアンナンの民族運動は衰退するかにみへたのであるが、大戰後ロシアにおけるソヴィエト政府の出現と、世界的に激成された共產主義の風潮は一九一九年ごろから漸次佛領インド支那に波及し、これ以後のアンナン民族運動は、コミンテルンの色彩を濃厚に反映することとなつた。すなはち、一九二七年にアンナン共產黨が組織され、これとほとんど時を同じくして、非公認の秘密結社的政治團體である越南國民黨が結成されたのであるが、両者は相たづさへて一九三〇年に安沛事件をひきおこし、全フランスを震撼せしめたのである。

アンナン民族運動史表

- 一九〇三年 黄花揮將軍を首領として、北圻勤王黨を結成、また、潘佩珠、潘周楨等がたち、フランス當局の専制政治、重税方針に反抗し、日露戦争を機として漸次大規模な闘争となる。
- 一九〇五年 平定においてフランス集税人が殺害され、これに對しフランス官憲は數千人を懲役、流刑、斬首に處す。
- 一九一二年 越南光復會および越南假政府が廣東に組織され、本國の革命運動を指導す。
- 一九一四—一九一五年 サイゴン、トンキン等の各地でフランス將校に對する襲撃事件が頻發、南定において
- 一九一六年 武裝蜂起した三〇〇名以上の民衆がサイゴンのフランス街官衙を襲ひ、これを機として交趾支那一三省にわたつて官廳、監獄、火藥庫等が叛亂にみまはれた。
- 陳高文が主導し、三、〇〇〇の越南義勇軍ならびに民衆が、反フランス義勇軍をおこす。
- 一九二〇年 アンナン民族運動にコミンテルン勢力が加はるに至り、進歩的な教師と學生の一團が
- 一九二四年 越南國民黨の青年黨員范鴻泰なるものが、總督メルランに爆弾を投じ、フランス人五人を斃す。
- 一九二六年 一九二六年コミンテルン策動により全インド支那に叛亂勃發す。黎文忠が革命的宗教である高臺教を創立、一月サイゴンを中心に「高臺教暴動」がおこる。
- 一九二七年 アンナン共產黨が結成され、租税の廢止、土地の沒收、農産物の均等分配を旗幟として活動す。
- 一九二九年 越南國民黨が蜂起し、ハノイ、ハイフォン、サイゴン等においてフランス官憲を暗殺、七〇〇名の檢擧をみた。
- 一九三〇年 安沛事件勃發、安沛の兵營襲撃を契機とし
- 一九三三年 保大帝の改新政策を發表す。
- 安沛事件の彈壓により潰滅した共產黨および國民黨の地下運動により、各地にテロ事件、リンチ事件が頻發す。

- トンキンのフランス街爆破を計畫したが、未遂に終る。
- 一九二四年 越南國民黨の青年黨員范鴻泰なるものが、總督メルランに爆弾を投じ、フランス人五人を斃す。
- 一九二六年 一九二六年コミンテルン策動により全インド支那に叛亂勃發す。黎文忠が革命的宗教である高臺教を創立、一月サイゴンを中心に「高臺教暴動」がおこる。
- 一九二七年 アンナン共產黨が結成され、租税の廢止、土地の沒收、農産物の均等分配を旗幟として活動す。
- 一九二九年 越南國民黨が蜂起し、ハノイ、ハイフォン、サイゴン等においてフランス官憲を暗殺、七〇〇名の檢擧をみた。
- 一九三〇年 安沛事件勃發、安沛の兵營襲撃を契機とし
- 一九三三年 保大帝の改新政策を發表す。
- 安沛事件の彈壓により潰滅した共產黨および國民黨の地下運動により、各地にテロ事件、リンチ事件が頻發す。

この安沛事件は、約一ケ年間全インド支那にわたつた大規模な叛亂で、佛領インド支那民族運動の極點をなすものであるが、フランス官憲の犠牲となつたものは二〇、〇〇〇人以上におよび、この峻嚴な彈壓によつて、アンナン共產黨および越南國民黨は瓦解したのである。しかし、これによつてアンナンの民族運動が消滅したわけではなく、獨立運動の志士達は支那に亡命し、あるひは地下にもぐつて執拗な工作をつづけ、他方、從來の民族運動が、主として上層知識層と下層農民、労働者群とによつて支持されてゐたのに反し、近年は、社會の中堅である中産階級をも包含してをり、たとへば、減税嘆願運動などにも、民族資本案、中・小商工業者、労働者、農民、學生、中・小官吏、土着民兵、それに少年少女まで参加してゐるありさまで、アンナン民族運動は、かへつて國民全般の運動にまで擴大された傾向がみられるのである。

要するに、フランス領有以來、佛領インド支那のたどつた民族運動の歴史は慘憺たるものであり、悲劇の連続ともいふべきであるが、民族運動がこれほど執拗にくりかへされたところは、他の南方諸地域にその例をみないのであつて、ことに、その中核民族であつたアンナン人の民族的要求については、ふかい考察を加へる必要があらう。

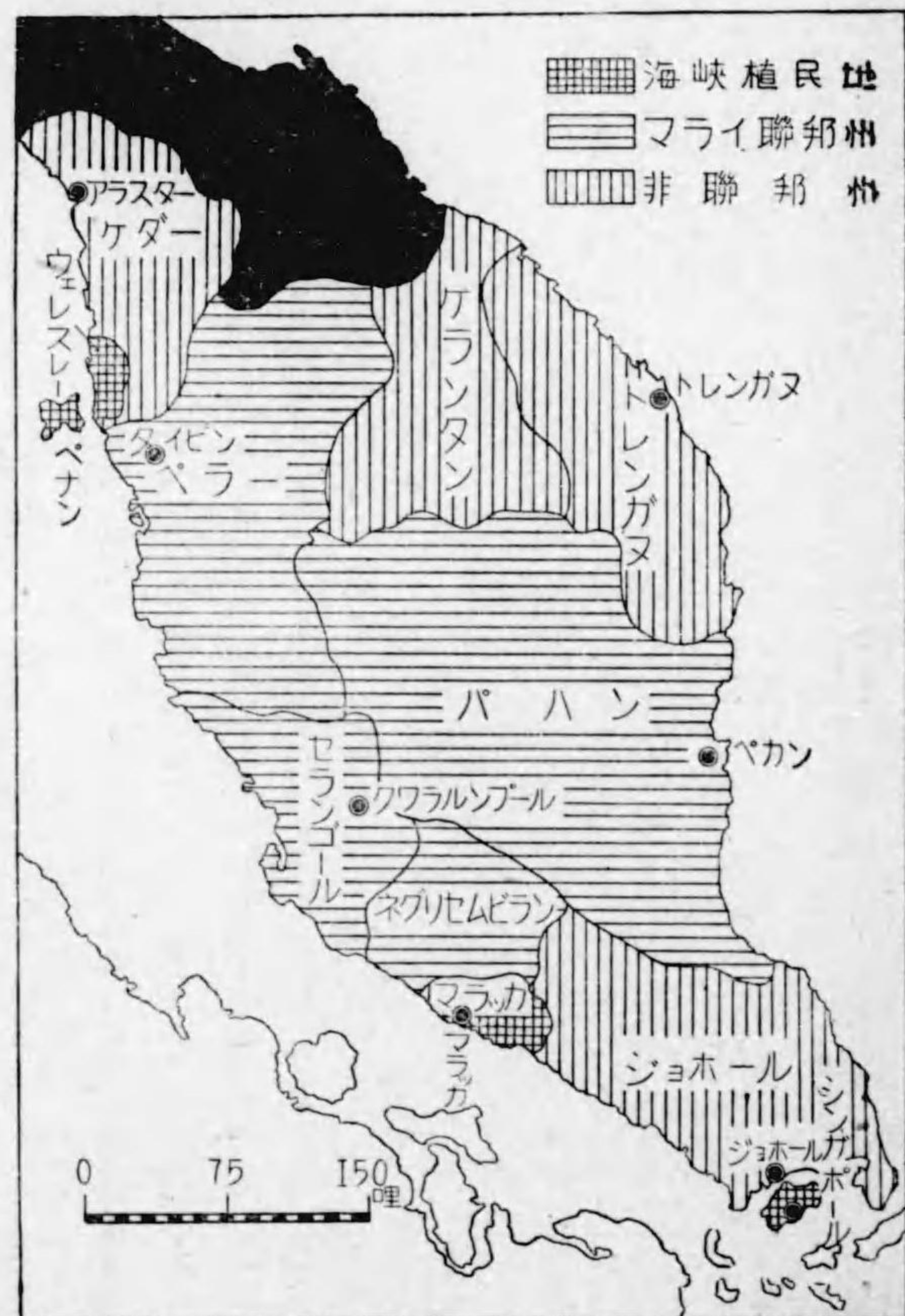
五 華僑勢力の大なるマライ

(1) 民族の構成

マライは、行政的には、昭南島、ベナン、マラッカ、ラブアン、その他ココス島、クリスマス島等數諸島をふくむ海峡植民地と、ベラク州のほか四つの土候州をふくむマライ聯邦州、およびジョホール州のほか五土候州をふくむマライ非聯邦州とに分類され、その總面積は一三八、〇〇〇平方キロで、わが國の約五分の一に相當し、北端より南端の最大距離は約七四〇キロ、東西幅員のもつとも大なるところで三二〇キロある。

構成民族は、ネグリート族、サカイ族、プロト・マライ族等の原始民族、一二世紀ごろスマトラのパレンバン地方からマライ半島に移動してきたマライ人、商業上の取引を目的としてアラビヤ人とともに移住し、現在は大半ゴム園における農業労働者となつてゐるインド人、およびアモイ、廣東、福建、海南島からなだれこんだ支那人、その他支配者たる少數の白人等であり、一九三九年末現在推定の總人口は五、三九六、七〇六人で、一平方キロあたり三九人といふ、インド支那最高の人口密度を示してゐる。

第97圖 マライの行政区劃圖



五 華僑勢力の大なるマライ

二二三

第96圖 マライ全圖



第二部 南方の民族

二二三

2) 外來民族の活動地

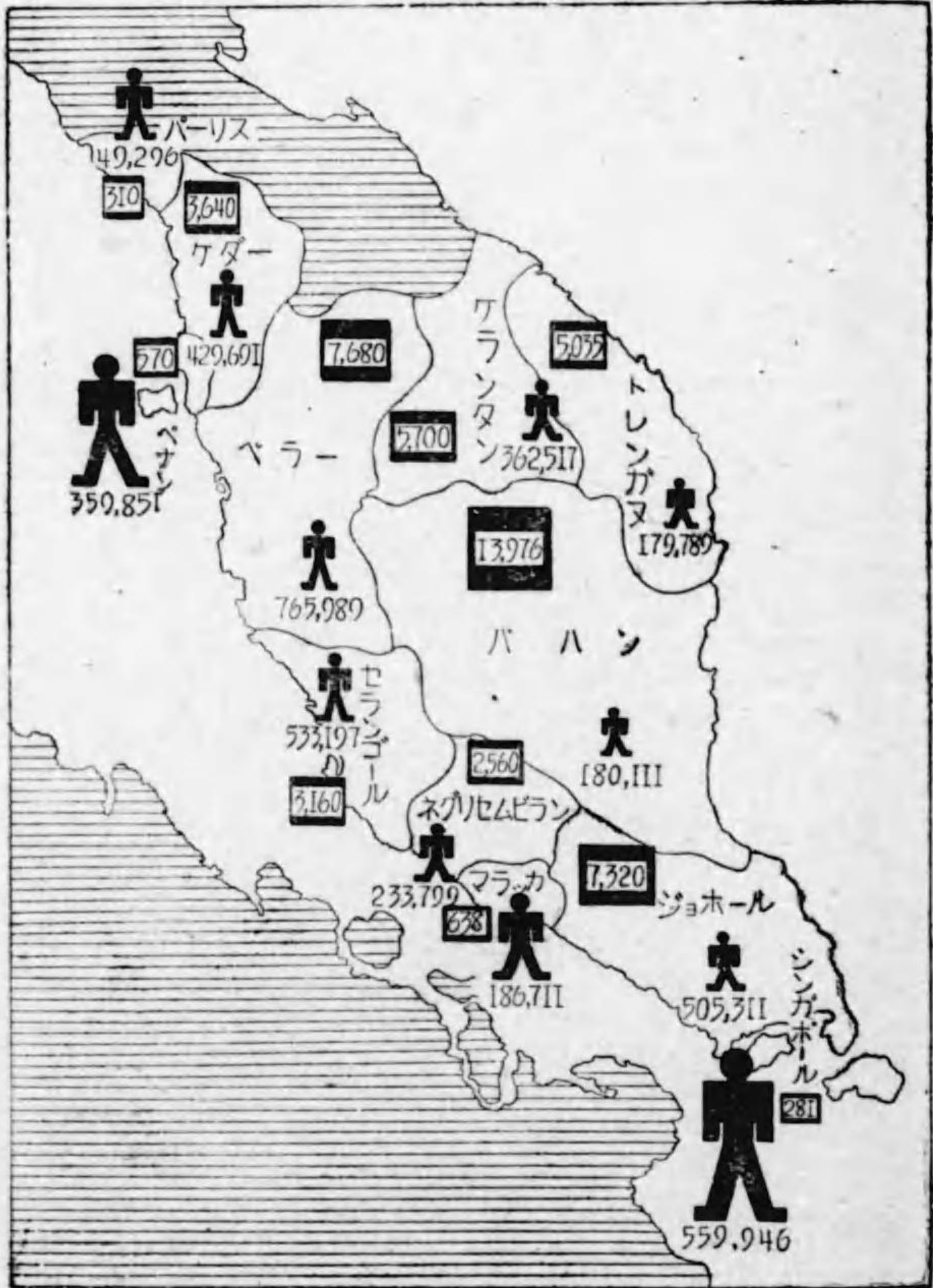
マライにおける民族問題の焦點は、土着原住民であるマライ人にあるよりも、むしろ外來者である支那人およびインド人、なかんづく、人口において首位を占める支那人—華僑にある。すなはち、次掲第四九表にみられる如く、マライの總人口五、三九六、七〇六人のうち、支那人が二、三〇〇、三五三人、マライ人は第二位で二、二四六、八八〇人となつてをり、單に數のうへからいつても、支那人、インド人を合した外來者の人口は、マライ人のそれをはるかにこえてゐるのである。

第49表 マライの人口統計
人種内譯

面積(平方マイル)	支那人	マライ人	インド人	ヨーロッパ人	歐亞人	その他	合計
海峽植民地	1,529	892,590	307,885	149,510	15,028	13,135	12,689
マライ聯邦州	27,376	953,971	700,203	464,959	9,281	5,114	17,367
マライ非聯邦州	24,306	453,792	1,238,792	130,439	1,933	596	29,472
合計	53,211	2,300,353	2,246,880	744,903	26,242	18,845	99,478
							5,396,706

〔聯邦州統計局發表。1939年12月31日現在推定。歐亞人は混血人を指す〕

第98圖 マライの地方別人口および比率
(1931年)
〔角内は面積=平方マイル〕



五 華僑勢力の大なるマライ

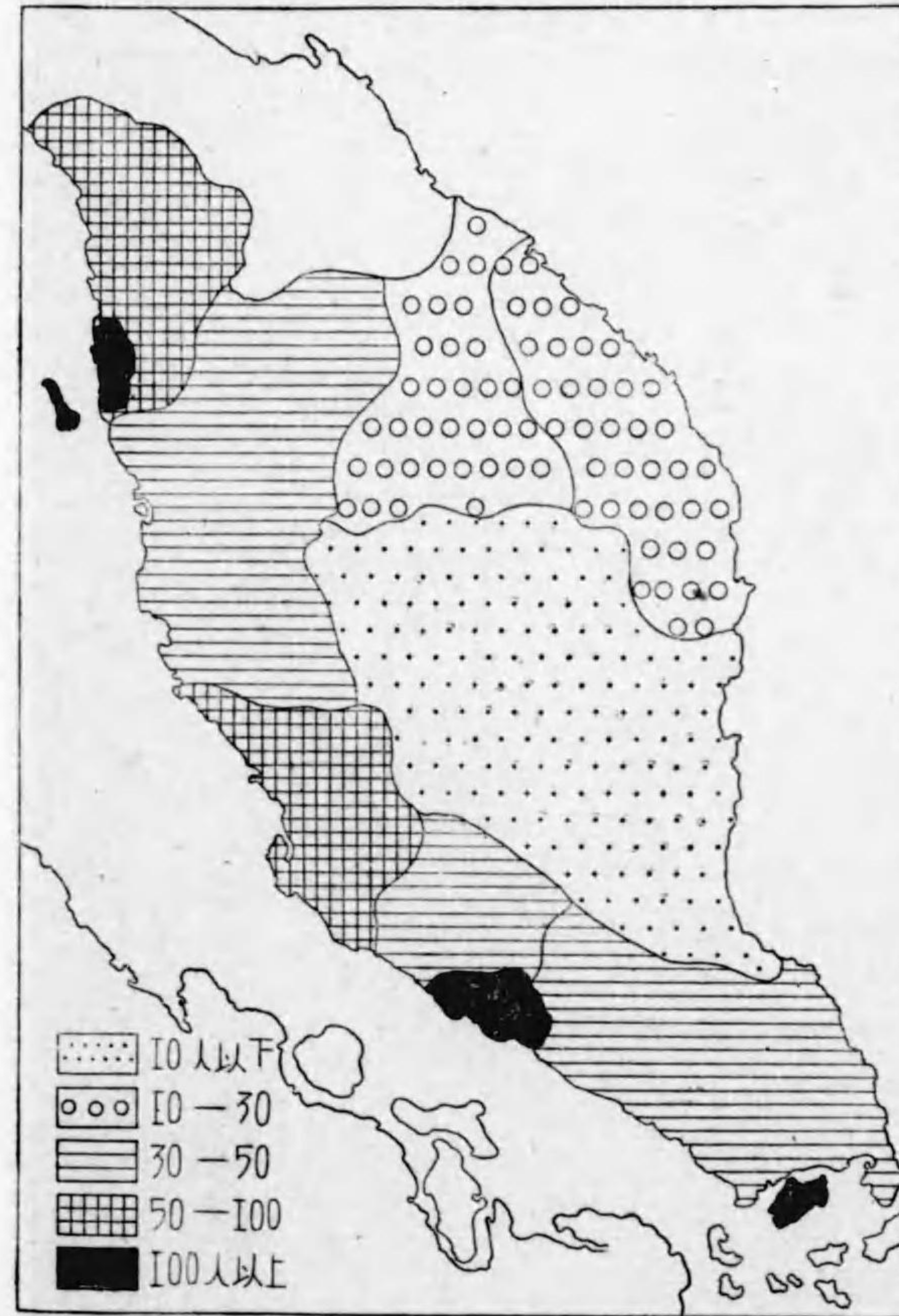
第50表 マライの地方別、人種別人口

[単位=%]

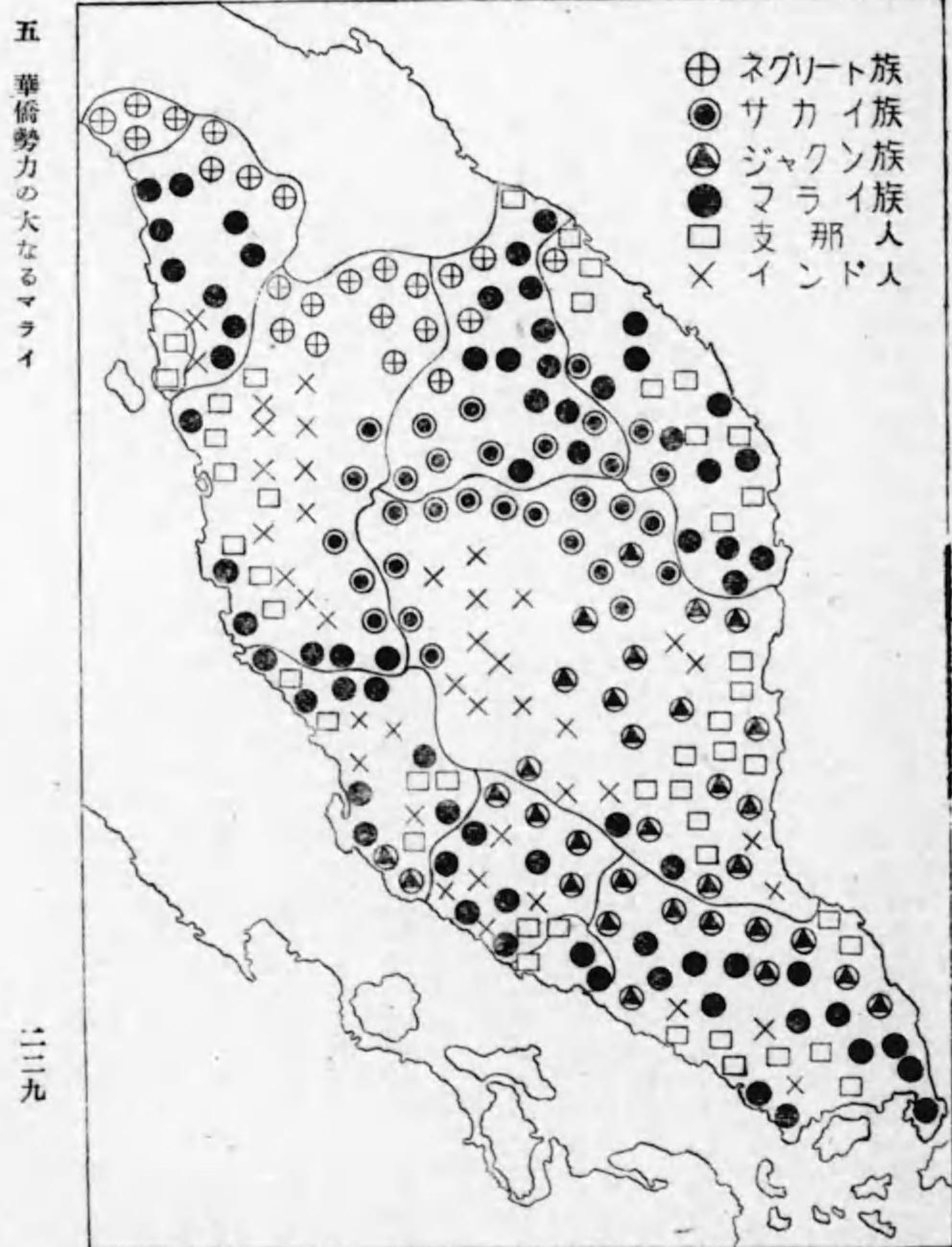
地域別	マライ人	支那人	インド人	混血人	ヨーロッパ人	その他	計
昭南島	11.8	74.9	9.1	1.2	1.5	1.5	100
ペナン	33.0	49.1	16.1	0.7	0.4	0.7	100
マラッカ	51.0	34.9	12.4	1.1	0.2	0.4	100
ラバアン	66.6	30.1	1.8	0.5	0.3	0.7	100
計	25.6	59.6	11.9	1.0	0.9	1.0	100
ベラ	35.6	42.4	20.8	0.2	0.3	0.7	100
セランゴール	23.1	45.3	29.2	0.4	0.5	1.5	100
ネグリスマビラン	37.3	39.5	21.4	0.3	0.4	1.1	100
バハ	61.4	29.0	8.2	0.1	0.2	0.8	100
計	34.7	41.5	22.2	0.2	0.4	1.0	100
ジョホール	46.4	42.6	10.1	0.1	0.1	0.7	100
ケダ	66.6	18.3	11.8	—	0.1	3.2	100
パーリス	80.8	13.2	2.0	—	—	4.0	100
ケランタン	91.2	4.9	1.9	—	—	2.0	100
トレンガヌ	91.5	7.4	0.8	—	—	0.3	100
ブルネイ	89.6	8.9	1.3	—	0.2	0.1	100
計	69.6	21.4	7.2	—	0.1	1.7	100
總計	44.7	39.0	14.2	0.4	0.4	1.3	100

[1931年調査. 1931年においては支那人人口はマライ人のやや下位にある]

第59圖 マライの州別人口密度圖



第100圖 マライの種族分布圖



五 華僑勢力の大なるマライ

第51表 昭南島の人口 (1933年)

人種別	人口(人)
支那人	383,617
マラヤ人	67,050
インド人	40,991
ヨーロッパ人	7,611
ユーラシアン	7,051
その他	3,180
計	514,500

第二部 南方の民族

さらに、職業關係をみても、マライ人が主として農業生活をいとむのに對し、インド人の大半は、より近代化されたゴム栽培に従事し、支那人は、商業、鑛業等に多く活躍してゐるのであつて、もし、マライ半島の存在理由が錫にあり、ゴムにあり、鐵にあり、マンガンにあるとすれば、この點においてもまた、マライ人は第二義的立場にあるといはなければならないのである。

また、マライの人口分布状態は、未開の東海岸方面にいちじるしく疎散であり、ベナン、マラッカおよび昭南島をつらねる西海岸において反對に、いちじるしく稠密なるものを示してゐるのであるが、前にかかげた第九八圖および第五〇表の如く、西海岸の稠密人口は、決して土着住民たるマライ人によるものではなくして、外來者たる支那人と、インド人によつてゐるといふ、他の植民地には類のない奇妙な相貌を呈してゐるのである。たとへば、昭南島の人口をみても、上掲第五一表の如く、一九三三年の總人口五一四、五〇〇人のうち、支那人は三八三、六一七人といふ大多數を占めてゐるのである。

(3) 無氣力なマライ人

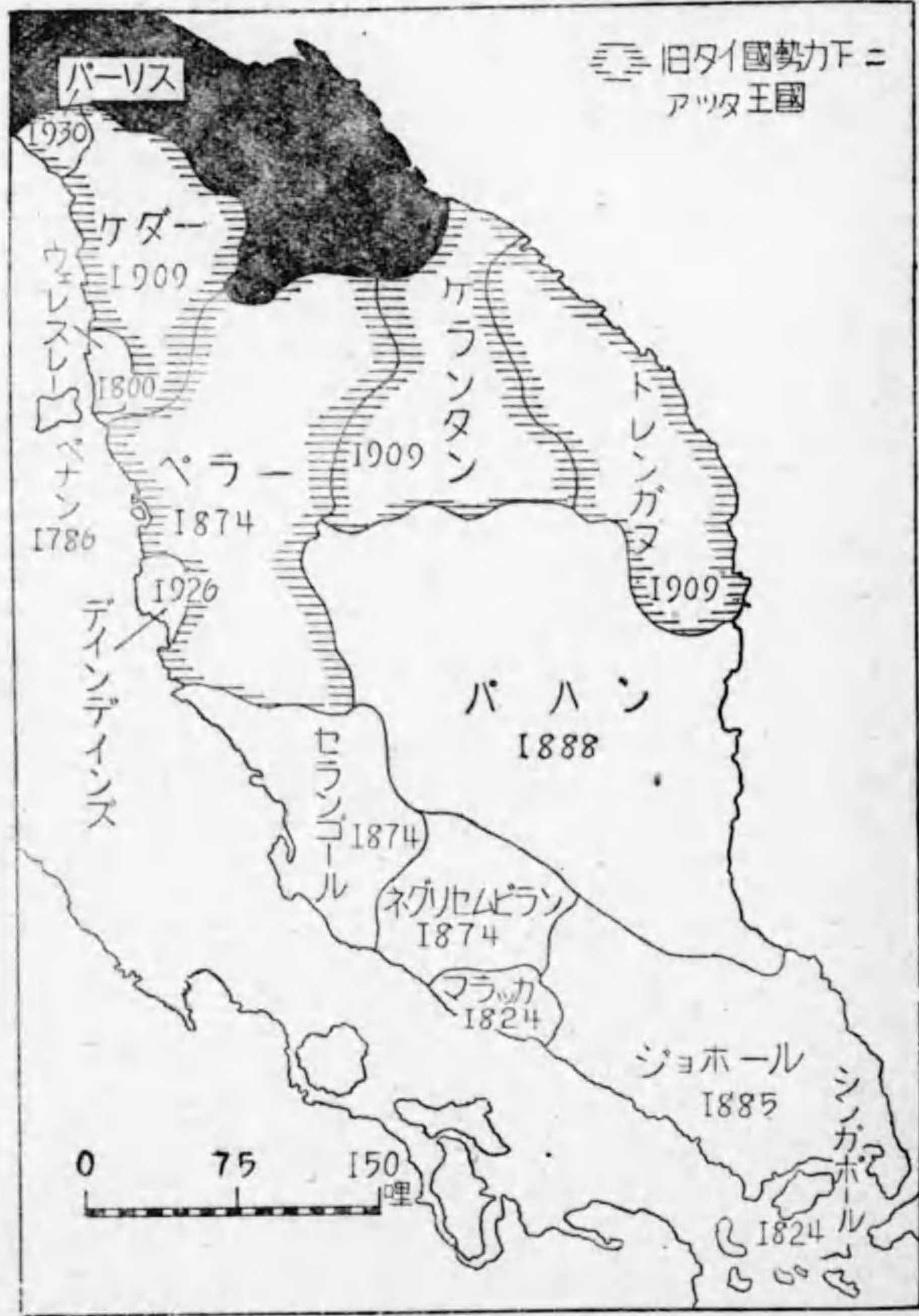
マライ人は、オーストロネシア系のインド支那における代表的種族であるが、このオーストロネシア族は、インドネシア語、およびポリネシア語、メラネシア語をふくむ語族であつて、南方諸地域に廣汎に分布してゐるにしても、これと同系統に屬するオーストロアジア語族が、その代表的種族であるクメール人によつて、かつて壯大なアンコール・ワットの建造物をいとなみ、旺盛な文化力を發揮したのに比して、別段みるべき發展を示してゐない。

現在のマライ人は、このオーストロネシア語族とインド人との混血によつて生れたものとされてゐるが、インド支那の他の地域における主要原住民である佛領インド支那のアンナン人、タイ國のタイ人、ビルマ人等にくらべると、その能力においても、また、國民的氣魄においても、いちじるしくみおとりがする。

マライ半島は、このマライ人の他に、原住民として古民族群に屬するセマング族、サカイ族、チャクン族、チャオナム族等をふくんでゐるが、いづれもきはめて少數であり（三〇、〇〇〇）、強力な集團とはなつてゐないのである。

事實、このマライをイギリスの寶庫たらしめ、また、東亞侵略の牙城たらしめるに力あつたのは、外來移民たる支那人であつて、決してマライ人やその他の土着種族ではなかつたのである。ジャングルをきりひらき、鑛山

第101圖 イギリスのマライ半島略取年代圖



五 華僑勢力の大なるマライ

にふみいつて、悪疫、酷暑とたたかひながら、直接に開發を擔當したのは支那人であつた。

イギリスは、この勤勉な恩人を、黒奴賣買となんらことなることなき人身賣買の手段によつてマライへ移入したのであるが、さらに、阿片專賣制度といふ巧妙な方法によつて、海峽植民地だけでも租稅收入總額の四〇パーセントに相當する阿片收入を、支那人から搾取したのである。その反面にまた、イギリスは狡猾な懷柔政策を講じ、財産所有權、課稅等の適用については、支那人を白人と同等の地位に置き、政治的にもある程度の發言權を認めてをり、イギリス植民政策一流のやり口がよくうかがはれるのである。

要するに、マライにおけるイギリスの民族政策上の努力は、ほとんど支那人を對象としたものであつた。

マライ人は、單に氣力を失つた回教徒たるにすぎず、彼らが住民の最大構成要素をなしてゐるマライ非聯邦州においてすら、ジョホール、ケダ、ペラー、ケランタン、トレンガヌ等の各土候國のあひだには、相互になんらの政治的關聯もなく、イギリス顧問官の事實上の獨裁行政によつて、やすやすとあやつられてゐたのであつて、大東亞共榮圈の一環としてのマライ民族をかたる場合、支那人、すなはち華僑がまづ第一の對象として注視されなければならないのである。

六 民族意識の昂揚せるタイ國

タイ國は、北は山岳地帯にかこまれ、南は海に面し、そして中央に肥沃なるメナム平原を有する。インド支那

半島の中央にくらゐるこの國は、まさしく人類が社會形態、もしくは、國家形態をいとむためには、理想的な地域といはなければならない。

従つて、ここが民族移動の交錯點となり、現在タイ族のほか、多種多様の種族がここにふくまれてゐることは當然である。

(1) 人口の増加

タイ國の總面積は五一〇、〇〇〇平方キロで、上掲第五二表の如く、その總人口は、一九三七年の統計で一四、四六四、一〇五人であり、人口密度は、平方キロあたり二七人を示してゐる。インド支那諸地域のうちでは、ビルマの人口密度平方キロあたり二六

第52表 タイ國における原住民と外國人人口對照表 (1937年)

籍	實數	%
タイ國原住民	13,841,304	95.70
支那人	524,062	3.60
イギリス人	55,576	0.38
フランス人	38,736	0.27
オランダ人	3,067	
日本人	514	
ドイツ人	188	0.02
その他	133	
合計	525	
合計	14,464,105	100.00

六 民族意識の昂揚せるタイ國

第53表

在タイ國各國人男女ならびに子供数人口別統計

人種別	1930年		1920年に比して増減人口	
	男	女	男	女
タイ人	5,193,554	5,299,750	10,493,304	1,144,090
華僑	313,764	131,510	445,274	108,294
インド人	191,535	188,083	379,618	18,995
アンナム、カムボヂヤ	52,898	33,091	65,987	17,678
キョービルヤ	17,530	14,855	32,385	334
暹羅人	1,241	679	1,920	86
日本	181	114	295	13
その他	44,362	43,060	87,422	20,725
總計	5,795,065	5,711,142	11,506,207	1,195,393

〔1930年調査、#は減〕

人（一九三九年現在）につぐ人口の疎散な國であるが、この國の中核民族であるタイ人の増加率をみるならば、前掲第五三表に明らかな如く、一九二〇年から三〇年にかけての一〇年間に、成年男子において一、一四四、〇九〇人、成年女子において一、〇八八、九九七人、子供においては二、一三三、〇八七人、合計四、四六六、一七四人といふ激増ぶりであつて、總人口の増加率も次掲第五五表の如く、一九二九年から三七年にわたる年間の平均増加

第54表 インド支那の人口密度比較表

地域	總人口	平方杆當密度	年度
タイ國	14,464,105	27	1937
佛印	23,030,000	31	1936
マライ	5,396,706	39	1939
ビルマ	15,797,000	26	1939

第55表 インド支那の人口増加比較表

地域	年間平均増加數	増加率	期間
タイ國	369,737	3.2	1929—37
佛印	468,274	2.5	1926—36
マライ	126,420	2.3	1931—39
ビルマ	143,700	1.0	1931—39

數は三六九、七三七人、すなはち三・二パーセントの増加率を示してをり、ビルマの同増加率一パーセント、マライの二・三パーセント、佛領インド支那の二・五パーセントに比して壓倒的に高率であるのみならず、他の南方諸地域に比しても最高位にある。

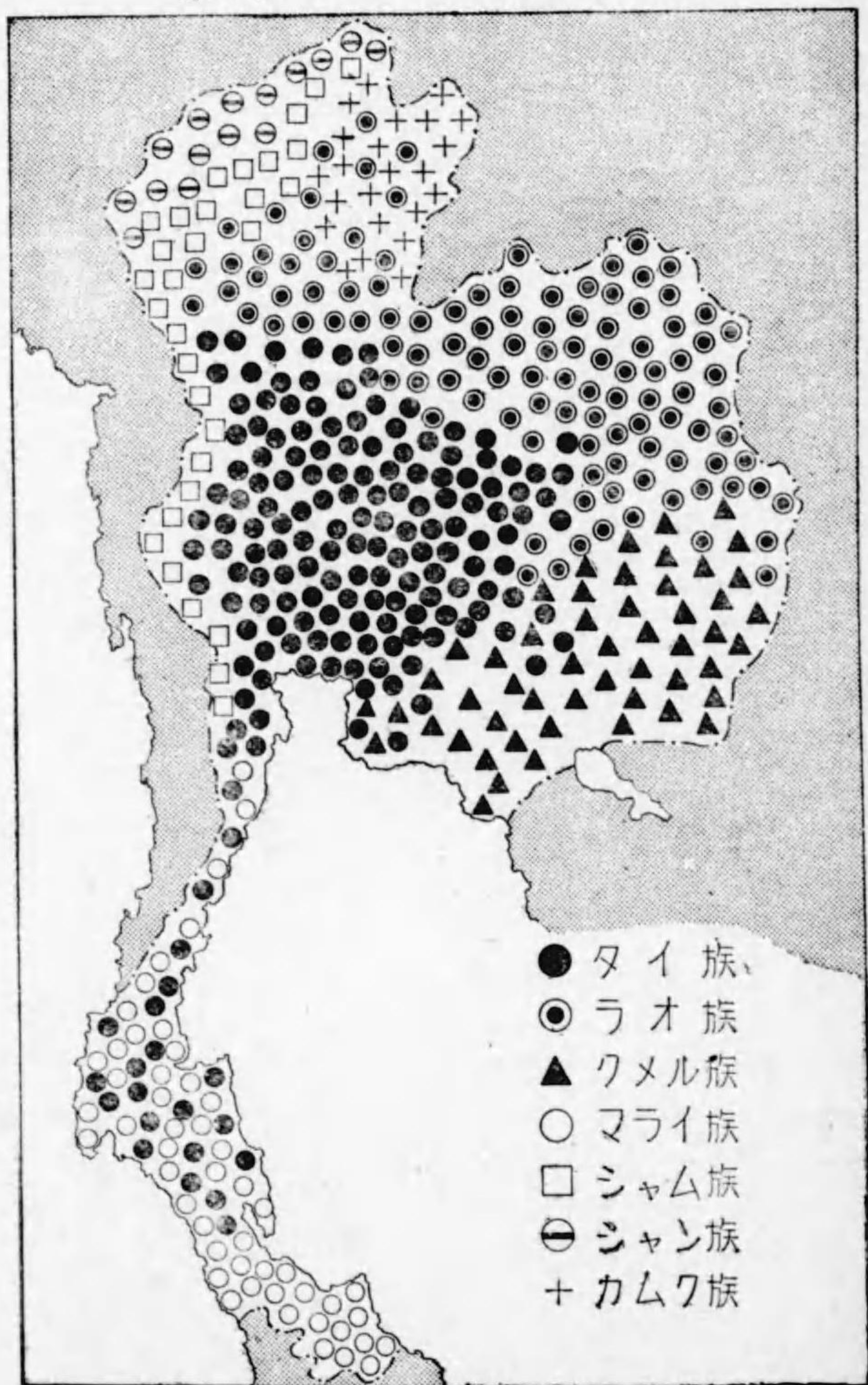
これらの事實は、躍進タイ國のすがたを端的に表象するものであるが、現在タイ國の計畫してゐる人口三〇、〇〇〇、〇〇〇運動も、今後この増加率を維持するならば、三〇年を以てして實現し得ることとなるであらうと思はれる。

(2) 構成種族

タイ國の構成種族はきはめて複雑であるが、いまそれぞれについて略説してみよう。

ネグリート族 タイ在住のネグリート系種族は、セマン族だけである。かつてタイ國全土に分布した種族であるが、タイ人、マライ人等の後來民族に壓迫されて衰亡の一途をたどり、現在はバタニー、チャイヤー地方の山

第105圖 タイ國の種族分布圖



六 民族意識の昂揚せるタイ國

第104圖 タイ國構成種族

南部	中部	北部
タイ族 マライ族	タイ族 カム族 アム族 モク族 マライ族	ラオ族 カム族 シヤム族 苗族 ロ族
五人—五人	稠密 バンコック を除き 五人—五人	稀薄 一平方 里當 五人—五人 乃至それ 以下
海岸	高原、 沃野	山岳地帯
鑛産物	米	木材
イギリス人	華僑	タイ族 ラオ族

第二部 南方の民族

人種 人口密度 地勢 主要物産 經濟的指導者

フィリピン等のマライ族とはかなりことなつた種族となつてゐる。宗教は回教であるが、回教のおきてをそれほど遵守してはゐないやうである。

嶽地に約六、〇〇〇人をかぞへるにすぎない。ながい被壓迫生活の経験から、他の種族になじまず、放浪の未開生活を送つてゐる。
オーストロネシア族 マライ人、チャオナム族の二種族がこれに屬するが、いづれも南部地方に居住する。
【マライ人】
 マライ人は約四〇〇、〇〇〇をかぞへ農耕および漁撈に従事してゐるが、タイ在住のマライ人は、タイ人その他の雑婚によつて、本来の蒙古的性質をうしなひ、マライ半島、

【チャオナム族】

チャオナム族は、オーラン・ラウト（マライ語で海の人の意味）ともよばれ、マライ半島部を根據に漁撈生活をいとむ、きはめて少數の種族である。ジャングルの植物を利用して船具の一切をつくり、海參、海龜の卵、沈香、油脂等を採用してゐる。

モン・クメール族 この種族には、サカイ族、ラワー族、カムク族、チョーン族、チャオボン族、ソー族、セーク族、カレウン族、カー・ブラオ族、カー・ヒンハオ族、クキ族、カムボチャ人、モン族等がこれに屬する。

【カムボチャ人】（クメール族）

佛領インド支那との國境諸州に居住し、現在の人口は約一六〇、〇〇〇人、佛領インド支那の項でみたごとく、かつての壯大な文化を忘却した滅亡種族である。

【モン族】

バンコックその他中部平原、沿岸地方に居住し、人口約六〇、〇〇〇、タイ人にまったく同化され、言葉もタイ語をはなしてゐる。

チベットービルマ族 チベットおよびビルマの主なる種族はつぎの如くである。

【ムーソー族】

かつてチベット國境附近にムーソー王國を建設した種族で、現在は北部タイ山岳地方にすみ、一〇〇人にもた

らない種族である。

【ラワ族】

ボーダー山脈中に居住してゐるが、附近の種族にまったく同化されてゐる。

【メオ族】

山間の高嶺地帯にすみ、ヤオ族と同じく農耕、伐採をいとむ未開人である。

タイ族 タイ族は、居住地たる支那南部から發して、東はトンキンおよび海南島、西はアッサムにいたる東南アジアにひろく蔓延してをり、その總數一八、〇〇〇、〇〇〇人に達するが、その半數の約九、〇〇〇、〇〇〇人がタイ國內に居住してゐる。すなはち、タイ國總人口の六三パーセントにあたり、華僑とともにこの國の指導中核層で、アンナン人、ビルマ人とともに、インド支那における若い發展性にとんだ民族である。

タイ族は、いはゆるタイ人、コラート・タイ族、ラオ族、シャン族、ロロ族、ブタイ族、ヨー族、サム・サム族等に細分されるが、その中核をなしてゐるのは、いふまでもなくタイ人であつて、コンタイ・ムアンタイ（自由の國・自由の民）復活運動の推進力である。

南部支那からの民族移動の途次に、先住のモン族およびクメール族と混血し、また、華僑とも雜婚して現在タイ人が形成されたのであるが、佛敎の影響をうけて文化水準たかく、寛容であり、他種族をきがるに抱容する反面、佛敎がビルマ人に影響したごとく、また、熱帯の高温が南方諸民族に作用したごとく、生來怠惰であり、安

逸をむさぼる傾向がつよい。

タイ人は、中部高原、沃野地帯を中心に、タイ全土に分布してゐるのであるが、その他のタイ族と同じやうにほとんどが農業に従事し、封建的なシステムのもとに、主として米作をいとなんでゐる。

【ラオ族】

ラオ族は、タイ人につぐ勢力をもつ種族であるが、生活風習その他あらゆる點で、ほとんどタイ人と變るところはなく、タイ人の文化滲透につれて、ちかいつ將來にはこの兩族はまつたく一つの種族に同化してしまふであらうとさへいはれてゐる。

居住地域は、主として北部および東部山岳地帯で、約五、二〇〇、〇〇〇人口を有するが、北部ラオ族は東部ラオ族に比して素質がたかく、勤勉であり、宗教的良心にとんでゐる。また、一般に藝術的能力にめぐまれてをり、音楽、繪畫、彫刻、刺繡等の才能は、タイ人とくらべて遜色がない。

【シャン族】

シャン族は、人口約三〇、〇〇〇あり、ビルマのシャン州から移動してきたもので、主として西北部國境地方に居住してゐる。少數ではあるが進取的な種族で、バンコックでは商業者として活躍し、チャンダブーン地方の寶石鑛山は、一時まつたくシャン族の獨占到ゆだねられたこともある。また、タイ人の統治に反抗し、タイ國政府をしていくたの行政的改革をよぎなくさせたのもシャン族である。

3 タイ國維新史

・タイ族が支那南部を原住地とすることは前述したのであるが、この民族は、すでに西紀六五〇年の早くから、揚子江以南の地に南詔帝國を建設してをり、六世紀の長きに亘つて繁榮をほしのままにした歴史をもつてゐるのである。その後、元帝國の勢力に追はれ、インド支那に流入して現在のタイ國を形成したのであるが、スコータイ王朝、アユチャ王朝、バンコック王朝等の盛衰を経つつ、また、一八世紀以後はイギリスおよびフランスの侵略に苦しみつつもよく民族的意識を保持しつづけたのは、一つにその傳統のしからしめるところであらう。

タイ民族の蹶起は、一九三二年六月二四日の立憲革命に於いて明確な形をあらはしたのである。この革命によつて、世界無比の專政國と稱されたほどの王朝政治をくつがへし、イギリス、フランス等の諸外國勢力の傀儡として、國民の民族意識を壓伏しつづけてきた王族および重臣層を一掃したのであるが、まづ、國內改新によつて外國勢力の侵略を排除しようとした點で、わが國における明治維新、支那における清朝覆滅の革命とまつたく軌を一つにしてゐるのであつて、近世東洋における國民國家形成の典型的な一例とみられるのである。

この革命によつてあらたなる支配層となつた官僚はただちに獨立、秩序、經濟、權利平等、自由、教育の六大原則を基本とした憲法を發布し、完全な獨立自主をめざして國家整備に努力したのであるが、これによつて排外の理想を達成するためには、なほ内外情勢にめぐまれません、革命政府はその内藏する保守派との對立に力を消耗し、

また、たえず白人顧問達の干渉になやまなければならなかつた。

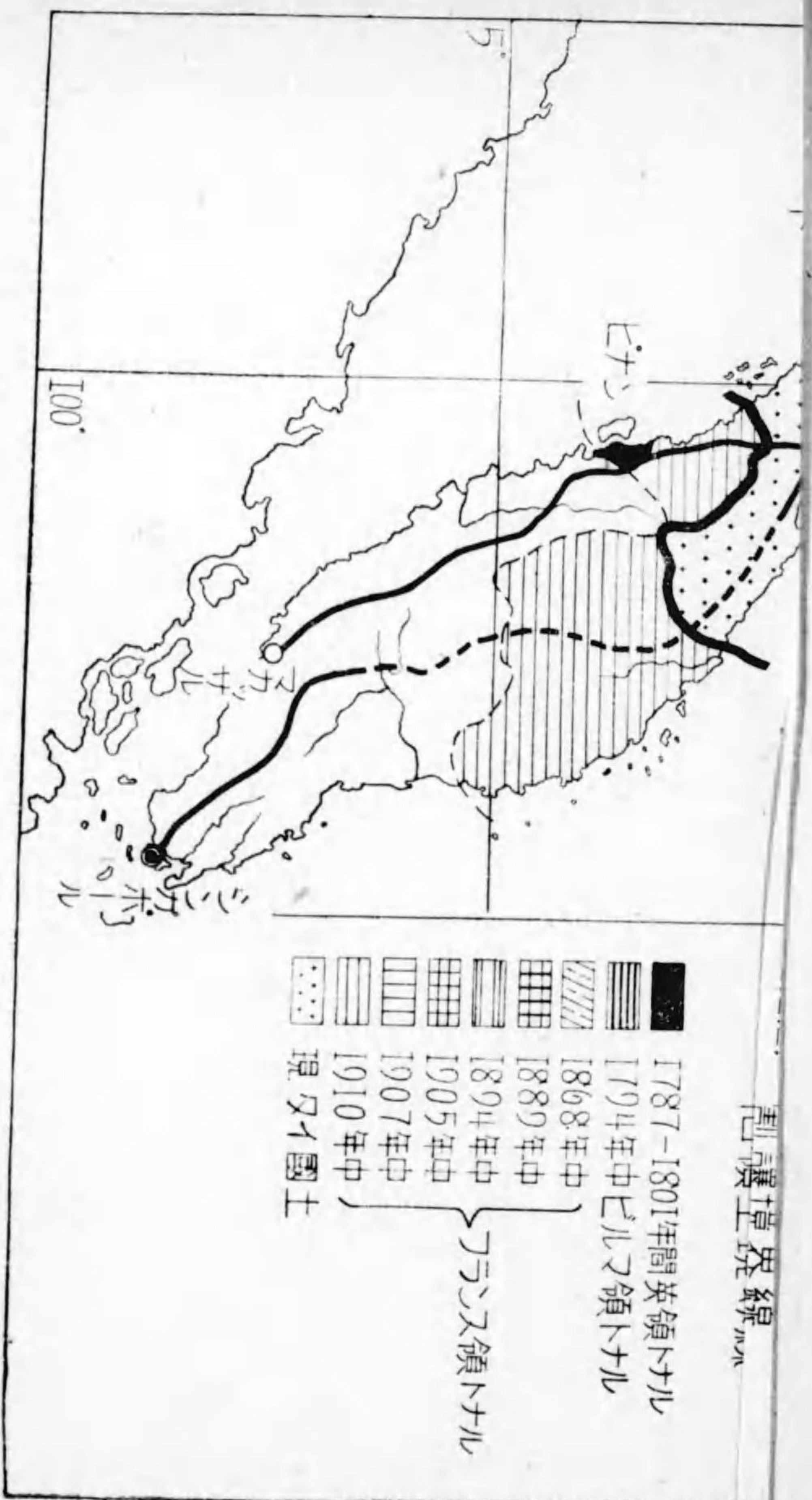
一九三三年國際聯盟總會の投票に際し、棄権の一票をもつてわが國に對する萬腔の共感を示したことは、當時の革命政府の心情を端的に表現したものにほかならないのである。

一九三三年六月二〇日の拂曉、人民黨のブラヤー・パホンを擁立するルアン・ビブン、ルアン・スーブらの軍部革新派の蹶起は、遅々としてすすまなかつた第一次革命後の國內更編を一舉に推進することとなつた。この第二次革命によつて成立したパホン内閣は、皇族ボワラテートを首領とする新政權打倒派の兵亂をはじめ、保守派の蠢動とたたかひつつ、人民代表議會を中軸として、コンタイ・ムアンタイの實現に邁進した。

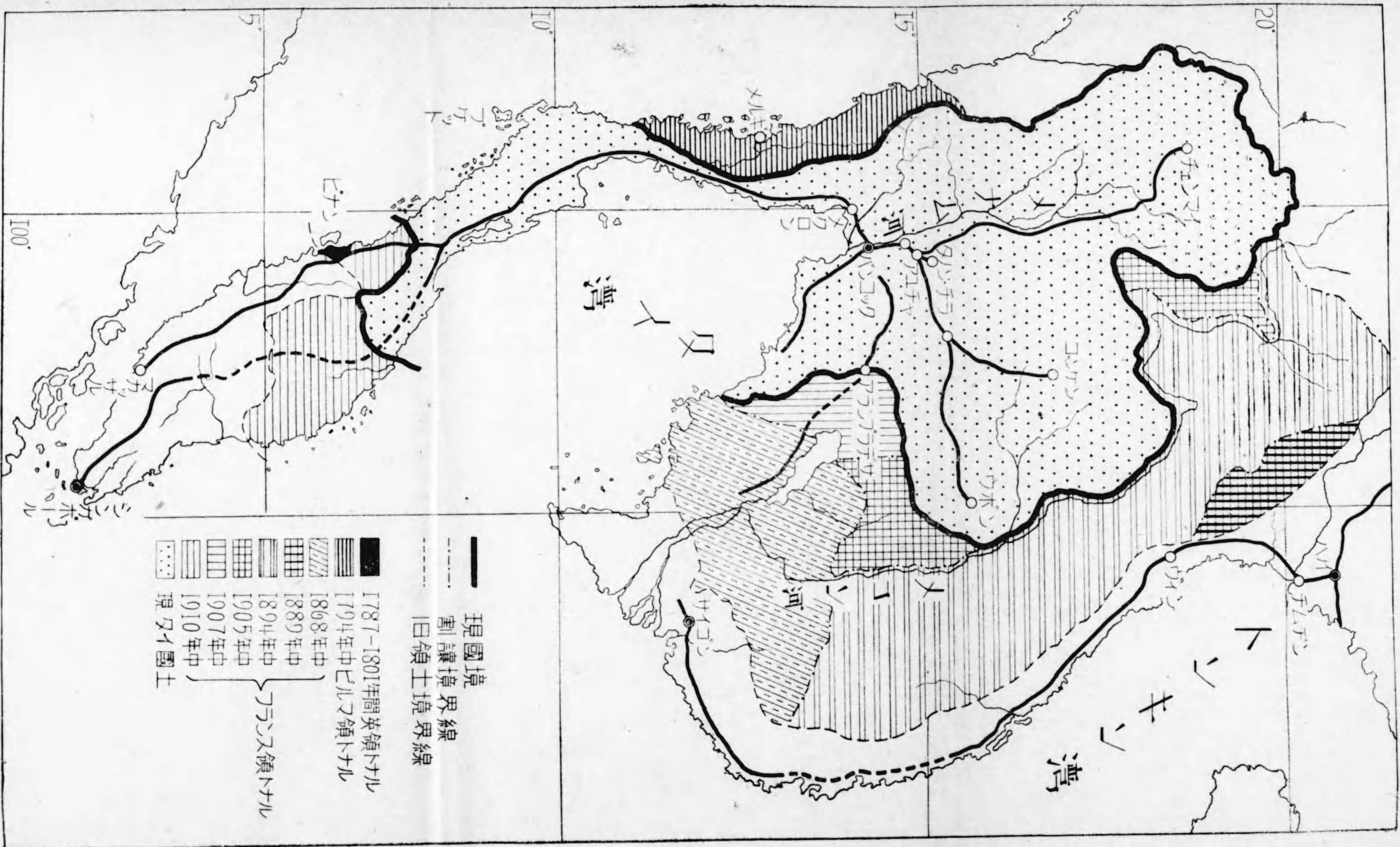
新政權が第一次革命から繼承した政綱は、

- 一、法權および財政經濟の獨立擁護
- 二、國內治安の維持
- 三、國民經濟福利の増進
- 四、國民平等權の確保
- 五、國民自由權の確保
- 六、國民教育の普及

の六項目であるが、新政權があらゆる施策の根本問題として力をそそいだことは、タイ國民の民族的啓蒙、訓練



第106図 タイ國の尖地年代圖



であつて、政府の懸命なる指導によつて、王朝の専政と、外力の侵入によつて、久しきに亙つて眠りつづけてゐた國民の民族意識は旺盛と奔騰し、ことにバホン内閣の後をうけて、現在のビボン内閣が一九三八年一月に成立をみた以後は、ラタニヨム運動をはじめ、あたらしい生活運動が、燎原の火の如く國民の中にひろまりつつある。

(4) 新生活運動

このラタニヨムとよぶ新生活運動の第一目標は、國民教育の普及と國民體位の向上に置かれ、一九三七年においてなほ全國民の六八・九パーセントにあたる六、九〇〇、〇〇〇人が文盲であるといふ状態から脱却するため、教育施設の充實に努力するとともに、ユワチョン・ユワナリ（青年男女訓練）運動を展開して、次代の國民鍊成をはかつてゐるが、この新生活運動と並行して、躍進するタイ國が目指してゐるのは、民族資本の育成による國民經濟力の強化である。

由來、タイ國は佛教の國であり、この佛教が國民にうゑつけた經濟蔑視の觀念は、ビルマにみられると同様に、相當根柢よいものがあつた。さらに、南方民族の通有性として怠惰癖があり、タイ國の經濟はその九五パーセントまでをイギリス人もしくは華僑等外國人の手にをさめられてゐたのである。

この經濟的無力が、タイ國の獨立國としての發展にとつて致命的な弱點であることはいふまでもなく、民族と

しての眞の發展に必須な土着民族資本の強化をはかるために、政府は國內企業法、會社銀行法、土地法、外國人入國法等の改正によつて、また、國家の援助のもとに近代工業を建設することによつて、うばはれたる産業利得を國民の手に回収しようとしてゐるのである。

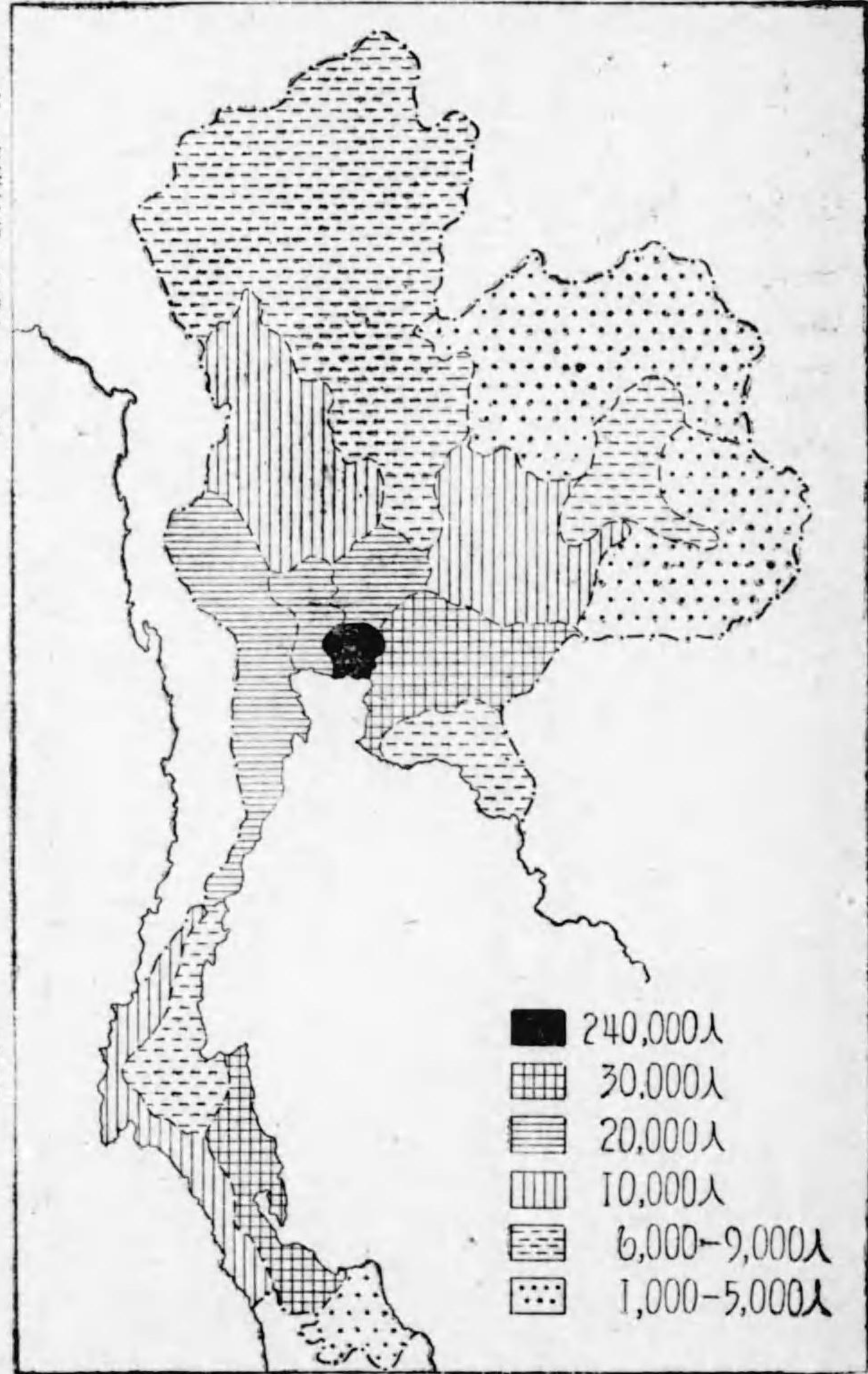
(5) 華僑の勢力

ここにおいて華僑の存在がきはめて重要な問題として登場するのであるが、タイ國に在住する華僑数は、一九三四年の僑務委員會の發表によれば二、五〇〇、〇〇〇人、すなはち、全世界華僑總數の二〇パーセント強、南洋華僑の約四〇パーセントにおよび、タイ國總人口の二一・七パーセントを占めてゐるのである。

タイ國華僑は潮州人がもつとも多く六〇パーセントを占め、廣東人、福建人、海南島人がそれぞれ一〇パーセント、客家人、その他が一〇パーセントとなつてゐるが、産業部門では、農業、牧畜、水産業、鹽業、錫鑛業、精米、製材、その他各種工業、分配部門は、貿易、商業、金融、運輸など、あらゆる經濟面へ進出し、また、勞働力としてタイ國の經濟開發にきはめて重要な存在となつてゐるのであつて、一九三〇年の對タイ華僑投資は實に六〇〇、〇〇〇、〇〇〇バツと推定されてゐるのである。

従つて、これら華僑の本國送金額もきはめて巨額に上り、一九三七年から三八年六月までの送金は四、五〇〇、〇〇〇元とされてゐるが、それだけタイ國における民族資本の蓄積を阻害してゐるわけで、新政府は入國法の改

第107圖 タイ國における華僑分布圖



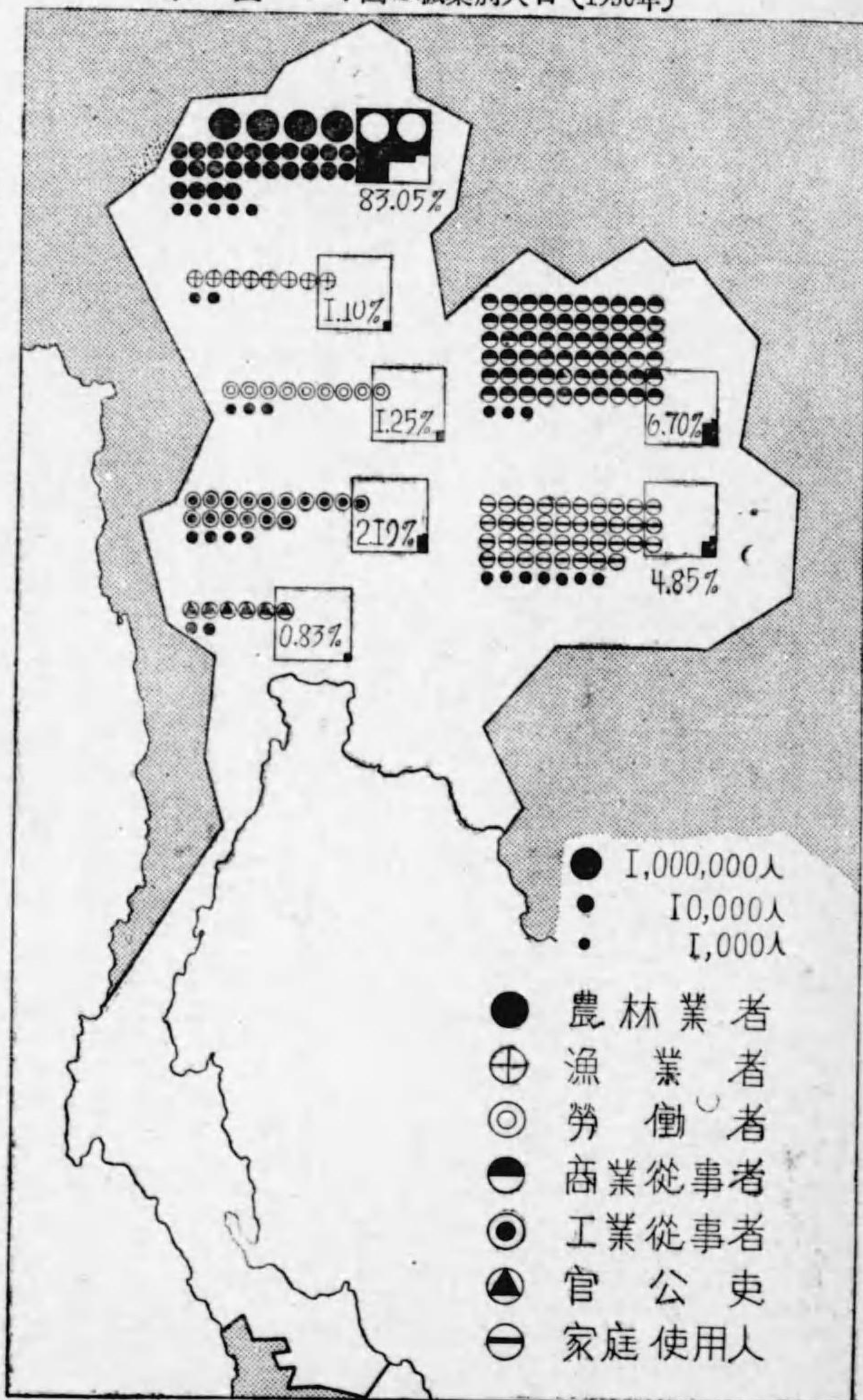
正、支那人使用制限令、營業登録法等の實施によつて支那人華僑の經濟活動を壓迫し、從來の華僑同化政策から、華僑制壓政策に轉じつつある。

(6) 粗弱なる營農形態

タイ民族は、佛領インド支那におけるアンナン人、ビルマにおけるビルマ人等と同様に、基本的には農業民族である。つきにかかげる第一〇八表の職業別人口統計が示すやうに、總人口の八三・〇五パーセントが農林業者であるが、それは肥沃なデルタを中心とするインド支那半島の地勢が必然的に結果したものであつた。しかしながら、この國の基盤ともいふべき農業は、躍進タイ國にふさはしい發展を決して示してゐないといへるであらう。王朝の専制政治を排し、革命によつて一應の近代國家形態をつくりあげたことは前にのべた通りであるが、外來帝國主義の侵略と華僑資本の寄生的搾取の結果として、タイ國の農業は舊態依然たる停滞にとどめられ、いまなほ「アジア的生産様式」から脱却することを得ないのである。

タイ國における耕地面積の約八〇パーセントは米作にあてられ、この國が世界的な米産地となつてゐることは周知の通りであるが、この米作といへども、時として單純な再生産をすら困難とするほどで、これを實際の數字にてらしてみても、タイ國における全耕地面積約四〇、〇〇〇、〇〇〇ライのうち、一九三七年度における實際耕作に利用した耕地はその五〇パーセントの約二〇、〇〇〇、〇〇〇ライで、全國土面積の六パーセント餘といふ餘

第108圖 タイ國の職業別人口 (1930年)



弱さで、しかも毎年メナム河の定期的な氾濫による水害その他で一〇パーセント餘が收穫不可能な状態である。また、その農家についてみても、農家一戸あたりの耕地は、中部で三ライ弱、北部で一〇ライ弱、南部で五ライ、東北部で六ライ弱で、はなはだしい小農形態である。一般中地主は華僑、タイ人、マライ人、大地主は王族、土侯等で片重されてをり、その耕作技術はほとんどすべて集約的勞力農法で、機械や家畜の使用はおこなはれておらず、自然に依存する原始的な農法で貧弱なものである。

新政府は、米單作依存の危険を緩和するために、棉花、甘藷、ゴム、胡椒等の並行栽培、家畜を加味した多角經營を奨励し、同時に、土地の改良、開墾、産業組合等の近代的組織の育成に努力してゐるが、なほ封建的、半植民地的性格は根づよく、いまなほ五〇パーセントから六〇パーセントの高率地代、農奴制等の前資本主義的形態が一般的である。

タイ民族の眞の解放は、自主的農業經濟の發展のみによつて達成し得るのである。タイ國力の充實といひ、タイ諸民族の東洋民族としての覺醒といひ、一つに農業の發展にかかつてゐるのであつて、先進農業國たる日本のこれに對する指導如何は、眞に重大問題といはなければならぬ。

七 佛教徒ビルマ人

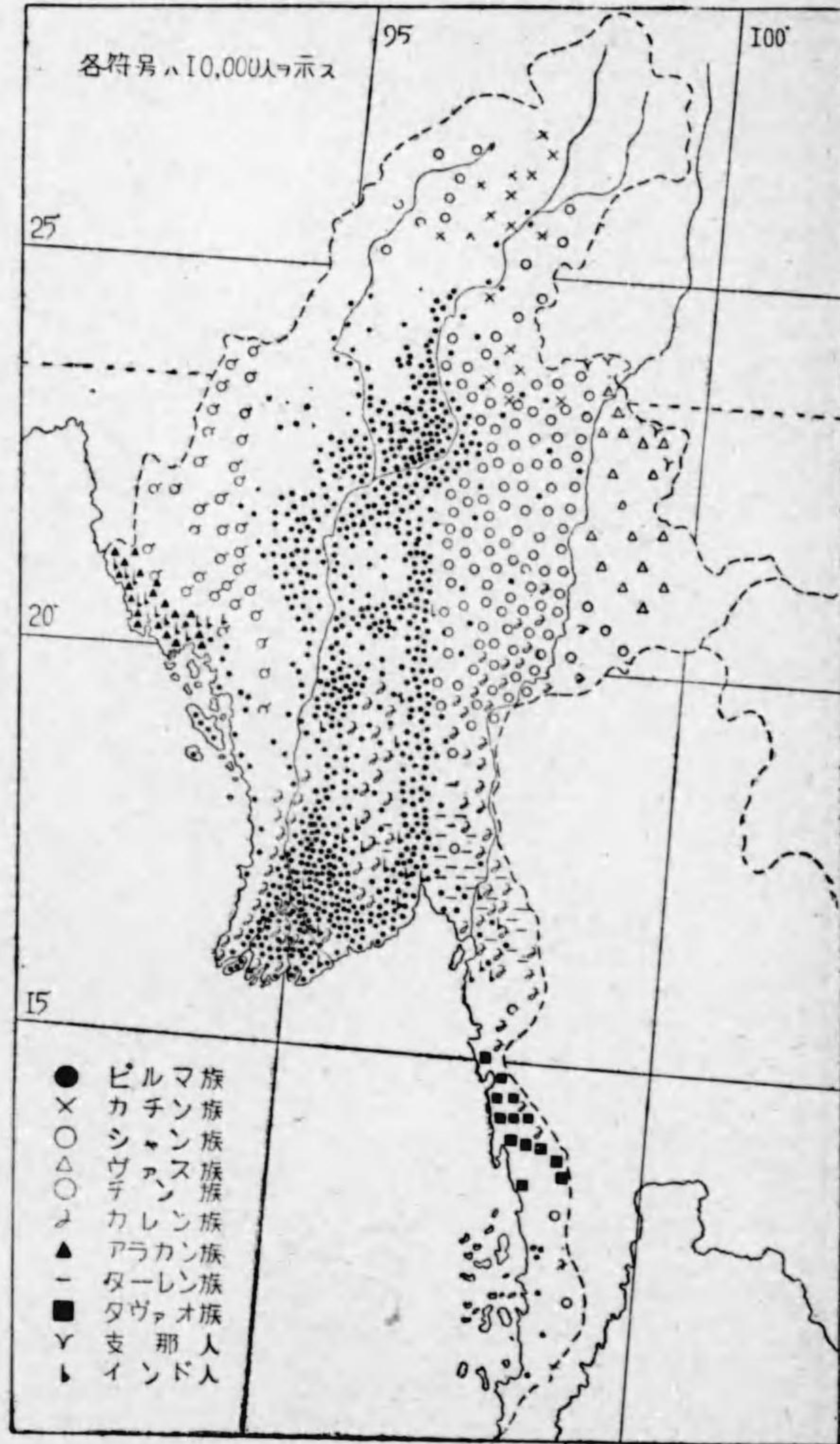
ビルマはインド支那半島の西部を占め、東は佛領インド支那およびタイ國に、北は支那、西はインドに接し、北緯二八度三〇分より九度五五分、東經一〇一度九分より九二度一〇分に位置し、總面積六七八、〇〇〇平方キロで、南北は約一、九〇〇キロ、東西は約九〇〇キロに達し、地形はタイ國と酷似し、背後には山岳地帯、海に面した中央部に肥沃なイラワディ・デルタをもつてゐる。

一九三一年におこなはれた調査によれば、總人口一四、六六七、一四六人、人口密度は一平方マイルあたり六四人で、インドの一平方マイルあたり二一人にくらべると、いちじるしく稀薄であり、また、他のインド支那の諸地域と比較しても、人口密度はもつとも低位にある。

1 民族の構成

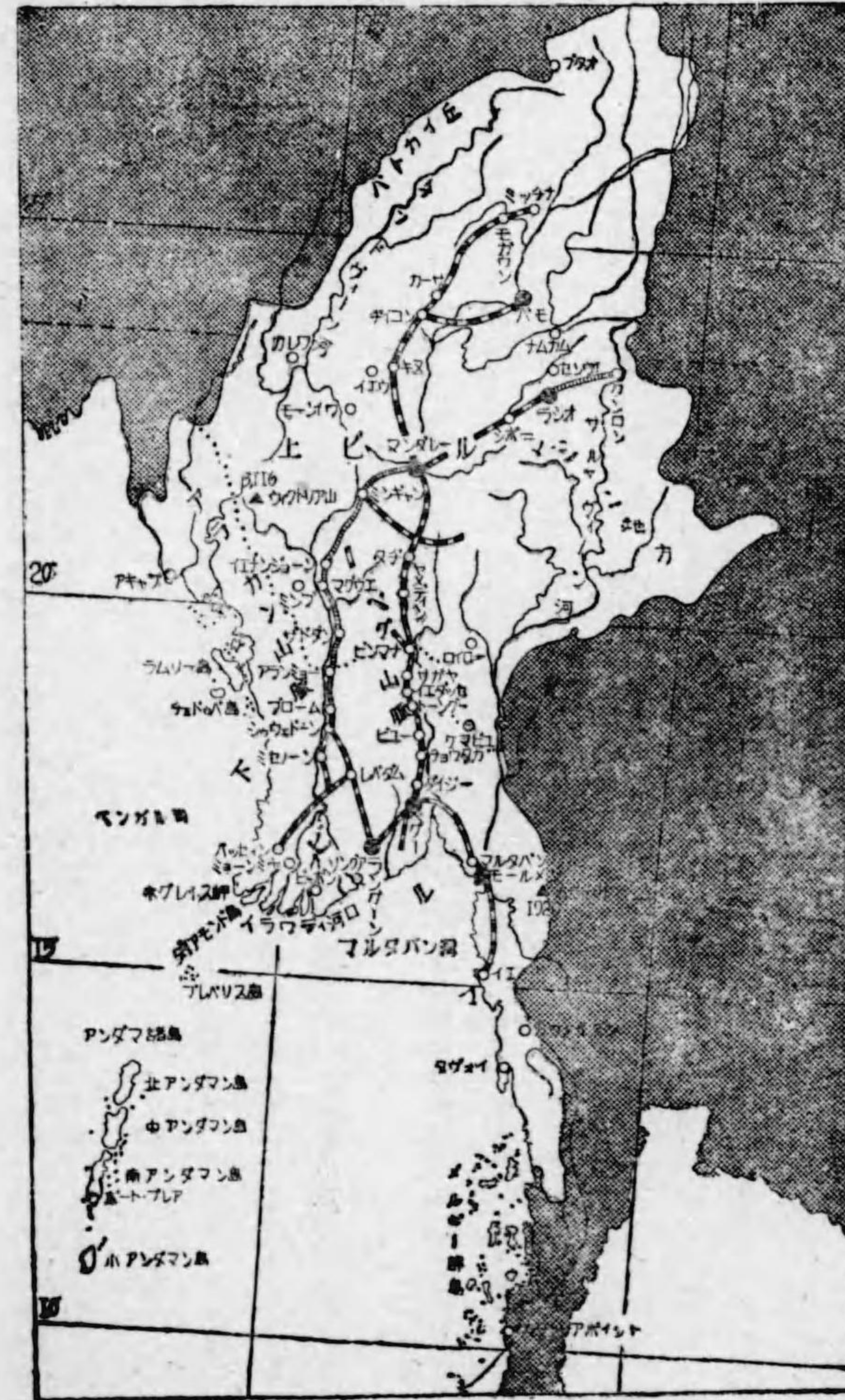
ビルマの原住民族の構成は、ビルマ族、カレン族、シャン族、アラカン族、ヤンビー族、チン族、クライン族、カチン族、パラウン族の九種族であるが、基幹民族は、いふまでもなくビルマ人であつて、つきにかかげる第一一二圖の如く人口約七、六四〇、〇〇〇、總人口の六一パーセントを占めてゐる。これについてシャン人が一、〇

第110圖 ビルマの種族別人口分布圖



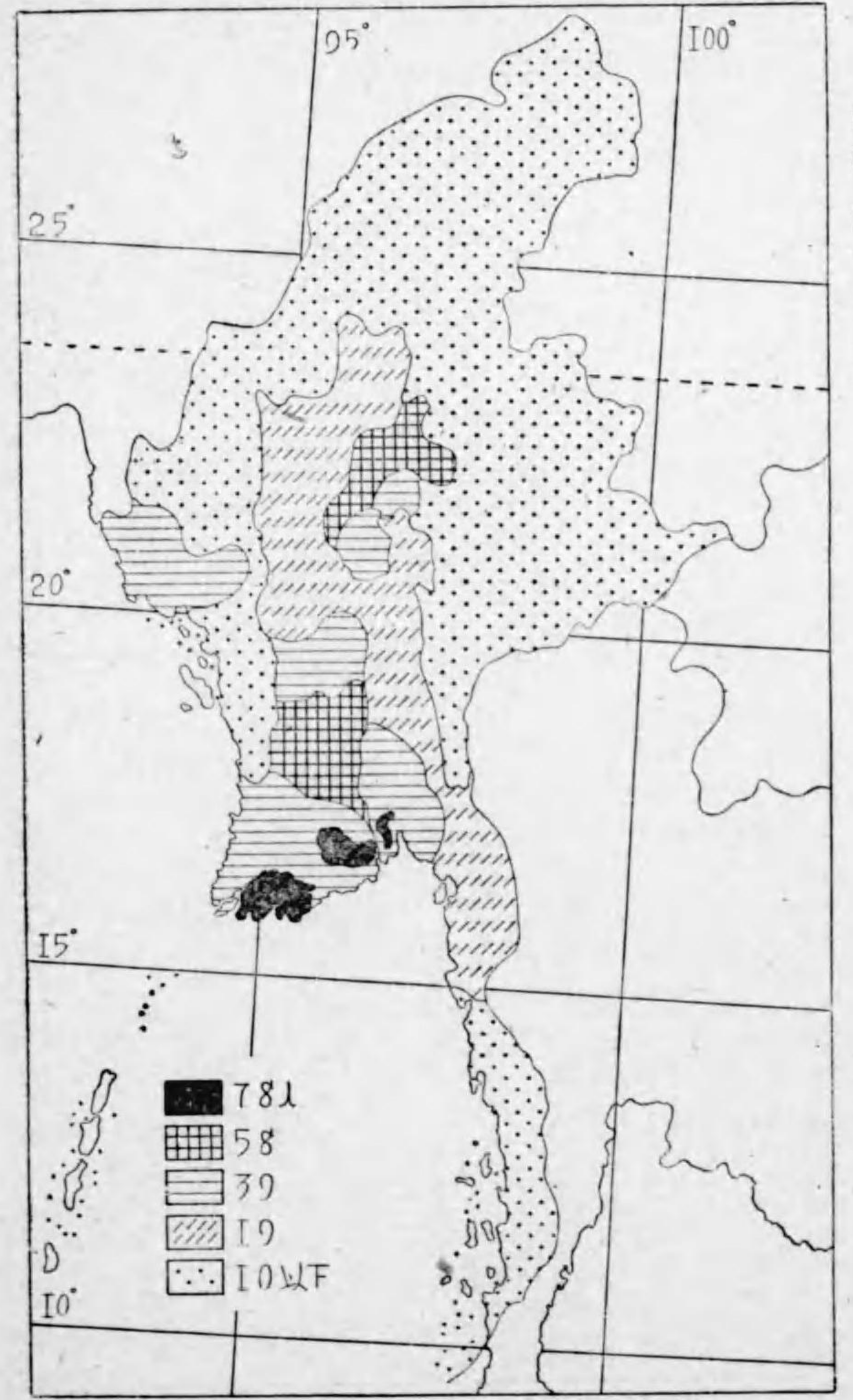
七 佛教徒ビルマ人

第109圖 ビルマ全圖

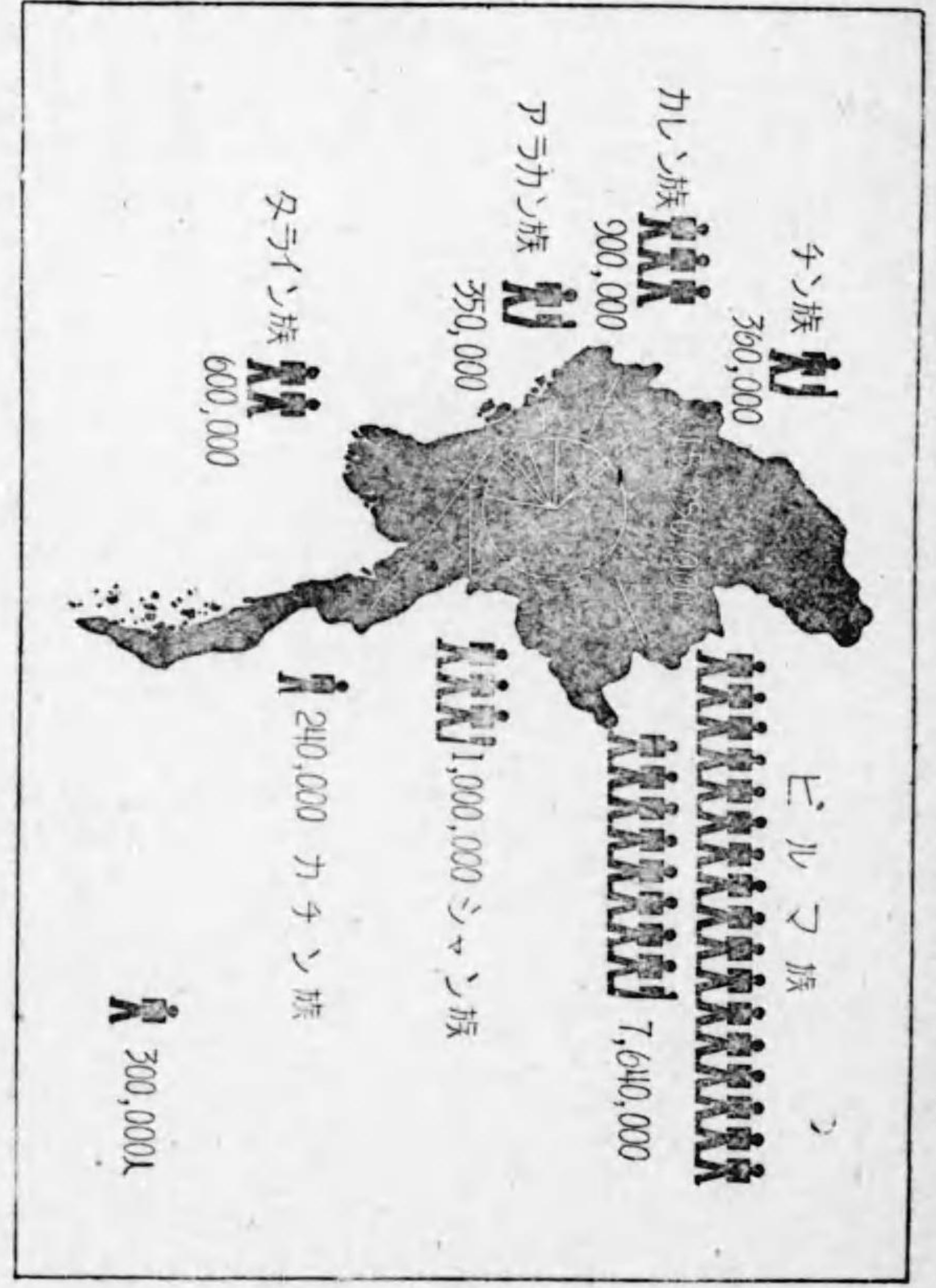


第二部 南方の民族

第111圖 ビルマの人口密度圖



第112圖 ビルマ構成種族人口および比率(1931年)



七 佛教徒ビルマ人

第113圖 ビルマの外国人
人口比率(1931年)



第56表 ビルマの地域別人口
(1931年)

地域別	人口(人)
乾燥地帯	5,336,434
デルタ地帯	4,884,411
テナセリム地方	1,872,668
シヤン地方	1,545,449
アラカン沿岸	1,008,535

〇〇、〇〇〇餘人で九・四パーセント、カレン人が九〇〇、〇〇〇人餘で七・一パーセントを占めてゐるのであるが、その他は、數においても、社會的勢力においても、ほとんどいふにたらないもので、かつてすぐれた佛教文明をもつたタライン族などは、ビルマ人に壓迫されていまはみるかげもなく、わづかにビルマ總人口の二・三パーセントを占めてゐるにすぎない状態である。

ビルマ在住の外国人としては、インド人がもつとも多く、一、〇一七、八二五人(一九三一年)で、外國人總數の七一パーセント餘を占め、これについて支那人が一九三、五九四人(一九三一年)で一三・六パーセント、その他ビルマ人とインド人の混血人が多く、その比率は一二・八パーセント、ヨーロッパ人は三〇、四四一人で、わづか〇・三パーセントにすぎない。

(2) ビルマ盛衰史

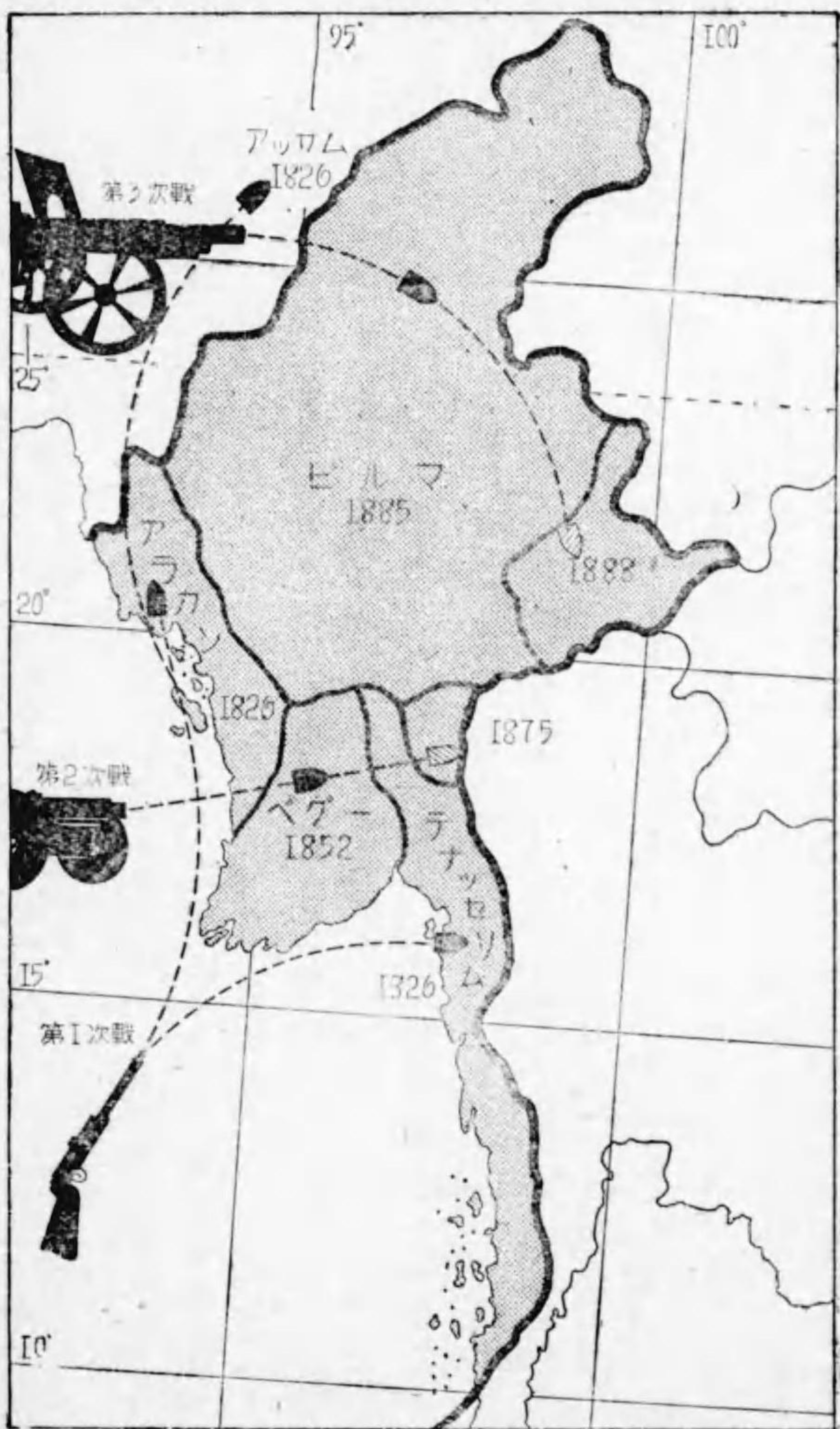
ビルマの民族構成は、他の南方諸地域からみれば、たしかに複雑性がないといへるのであるが、それかといつて、ビルマの民族問題が、ただ単にイギリス人對ビルマ人といふ單純な形であらばはれてゐるわけではないのである。

ビルマにおいては、ビルマ人とイギリス人とのあひだに第三者としてインド人が介在し、現實問題としては、このインド人がビルマ人にとつて多大の問題を提起してゐるのであり、素質のたかいビルマ人が總人口の過半數を占め、また、比較的種類の少い土着住民が、ビルマ人を中核としてインドネシアやフィリッピンなどくらべてはるかにまとまりをみせてゐる割には、ビルマの民族問題は複雑である。

由來、ビルマは西紀一世紀後半からすでにバガン王朝を建設し、佛教國として永く繁榮してきた歴史をもつ國である。

ビルマとイギリスとの交渉がはじまつたのは一八世紀末葉頃で、當時のビルマ王「孟雲」が、ビルマ近隣一帯の諸種族を征服し、イギリス領インドと直接國境を接するにいたつてはじめて關係を生じたのであるが、その後新興の意氣にもえるビルマ人が、アラカン族を追つてアッサムに侵入したが、イギリスのビルマ侵略に好個の名目をあたへる結果となつて、一八二四年に第一回イギリス・ビルマ戦争が起り、イギリスはアッサム、アラカ

第114圖 イギリスのビルマ侵略年代圖



ン、テナッセリムを略取したのである。

ついでビルマ人の反英運動を機として、一八五一年に第二回イギリス・ビルマ戦争、一八八四年にアンナン方面からビルマに侵入したフランスとビルマとの紛争に乗じて第三回のイギリス・ビルマ戦争がおこり、イギリスは一戦ごとに勢力を扶植して、一八八五年つひに全ビルマはインドの一屬州として、イギリスの領土となつたのである。

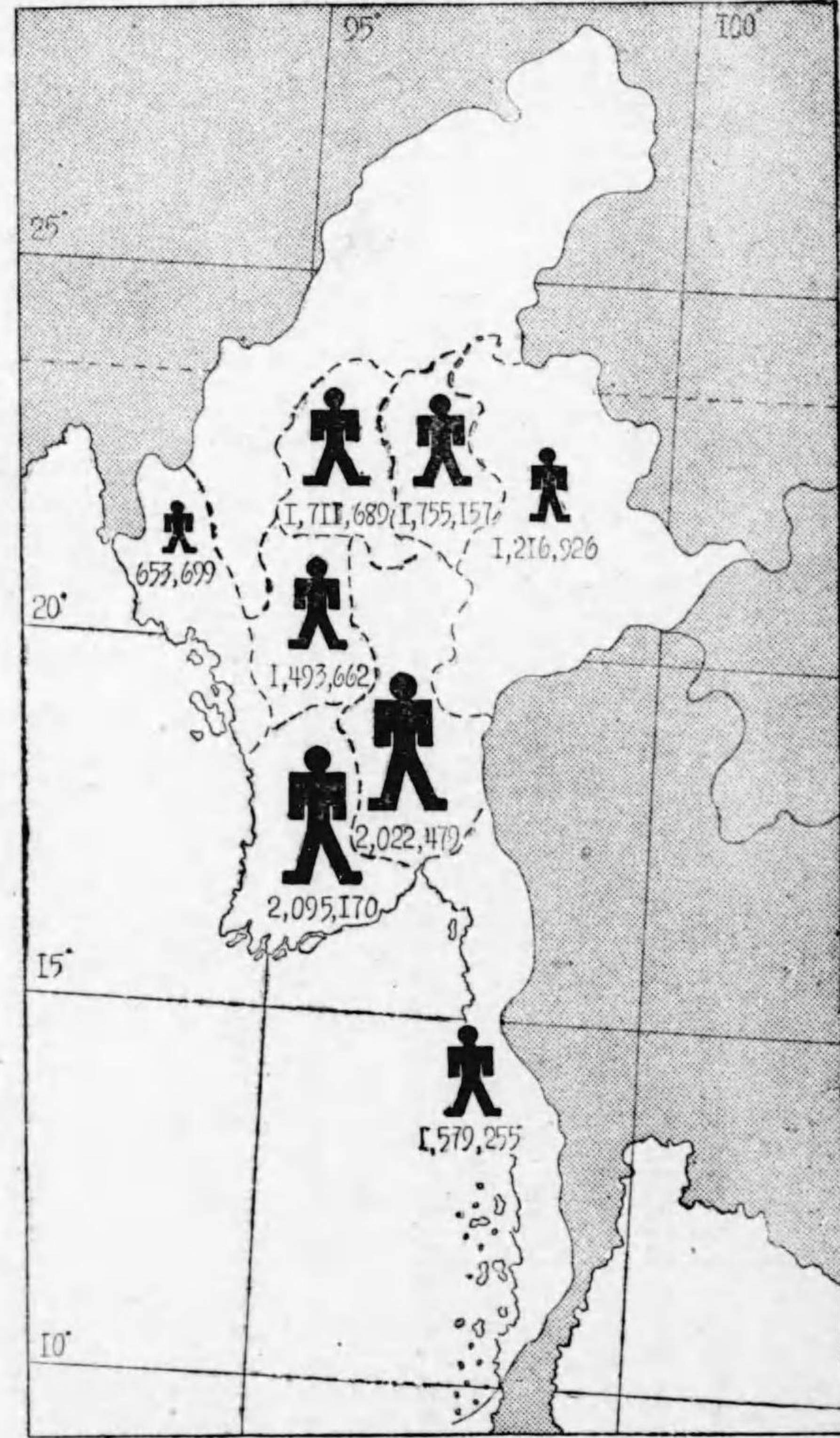
このあひだ、かつてはなやかなバガン王朝の夢をもち、新興民族として烈々たる意欲にもえるビルマ人が、侵略者であるイギリスに對して、はげしい闘争をつづけたことはいふまでもないことで、全世界にまたがるイギリス領植民地のうち、ビルマの反抗ほど激烈で執拗なものはないとされてゐるくらいであるが、イギリスとビルマの関係が、つねにインドとビルマの関係の如き形でおこなはれたこと、および一八七六年ベンガル地方のインド人七、〇〇〇人がビルマに移住したのをはじめとして、インドとビルマの合併後、急速に流入したインド人が、漸次ビルマの經濟を掌握するにいたつたことによつて、ビルマ人の反英感情は、直接にはインド人を對象とする結果となり、従つてまた、ビルマの獨立運動も、インドからの羈絆脱却といふ形であらはれたのである。

(3) ビルマ人と佛教

一九三一年現在の統計で、ビルマ在住のインド人は一、〇〇〇、〇〇〇人を突破してゐるのであるが、インド人

第115圖 ビルマにおける佛教徒の地方別分布圖

七 佛教徒ビルマ人



二六一

第57表 ビルマの宗教別人口

宗教別	人口(人)
佛教徒	12,348,037
精靈教徒	650,388
回教教徒	584,839
インド教徒	570,953
キリスト教徒	331,106
シーク教徒	10,907
ユダヤ教徒	1,218
ジャナイ教徒	721
陰陽教徒	419
その他原始精靈教徒及び無信仰者	148,909

第二部 南方の民族

二六〇

がビルマにおいて占める地位は、タイ國において華僑が占める地位と同様であつて、彼らは優秀な労働者として、チテニアと稱する高利貸業者として、あるひはまた、ビルマにおける唯一の近代産業である輕工業の經營者として、全ビルマの經濟的實權をにぎつてゐるのである。

ビルマの華僑は、米の仲買人、中・小雜貨商、精米業者として經濟的勢力はインド人につぐが、タイ國、佛領インド支那、マライ等にみられるほどの絶對的な力はない。ことに、ビルマの基本産業である農業の經營にとつて、インド人労働者とインド人金融業者の存在は、不可缺のものとなつてゐる。

かくてただ一つ原始的な、そしてまた、小規模農業のみがビルマ人にのこされたのであるが、ビルマ人のこの經濟的無力さは、彼らの奉信する小乗佛教に由来するところが多い。

現在ビルマ人の半數、またビルマ土着住民の八五パーセントまでが佛教徒となつてゐるが、この佛教は、タライン人に發し、タライン人を壓倒して全ビルマを統一したビルマ人によつて繼承され、上にかかげた第五七表の如く、今日の廣汎な分布をみるにいたつたのである。

しかし、この佛教は、新興ビルマ人の民族發展の推進力として大

な力を示した反面、經濟蔑視、金融蔑視の觀念を根づよくビルマ人の中にうゑつけたのであつて、その功罪はあひなかばするところである。

4) 佛教と農業形態

インド人とビルマ人のこの經濟活動における優劣は、兩者間にたえざる紛争を惹起し、一九三一年にはインド人排斥の暴動が起つたりしたのであるが、ビルマ人のインド人に對する反感には、民族的輕蔑感といつたものもふくまれてゐるのである。

かつてバガン王朝時代、ビルマ人はアラカンの峻嶮を越えて遠くベンガル地方にまで侵入したのであり、そのインド征服の記憶は、いまなほビルマ人の意識から去つてゐないであらうし、また、ビルマ在住のインド人が多く労働者であり、チテイアであることに對する輕蔑は、ビルマ人にとつてせめてもの自慰であらう。

かうしてビルマの民族運動は、インドからの獨立といふ方向をとり、その努力が實を結んで、一九三七年に、「ビルマ統治法」がイギリスの議會を通過して實施され、ビルマはインドの屬州たる地位を脱して、イギリスの直轄植民地となつたのであるが、これによつて對インド人問題が解決したわけでは決してなく、第八十一帝國議會において東條首相の明らかにした如く、年來の熱望であつたかがやかしき獨立を自暁のあひだに迎へた今日、インド人の占める經濟的地位の壓倒的強力さは、そしてまた、ビルマ人にくらべてはるかに高い人口増殖率をも

つインド人の人口問題は、依然重要問題としてのこされるであらう。

ビルマ人は、精悍なチベット・モンゴルの血液をひいてゐる。若く、勇猛心にとみ、佛領インド支那におけるアンナン人、タイ國におけるタイ人とともに、インド支那の指導的民族である。しかし、インド支那諸民族の共通的性格として、ビルマ人もまた農本民族であり、そして植民地特有の現象として、ビルマの農業がビルマ人にとつて必要な方向に指導されてゐなかつたことは注意しなければならないところである。

佛教はビルマ人にとつて日常生活の血肉化してをり、佛教をけなれてビルマ人を理解することは出来ないまでになつてゐる。

この佛教も、多く阿片としてのみ作用してゐるのであるが、かつてはビルマ民族が伸びるための力であつたのであり、ビルマ民族運動の指導者が主として僧侶であり、また、その民族運動がつねに佛教問題を緯として提起されてゐる事實は、對ビルマ佛教政策に重要性を加へるものであらう。

原始的段階にとどめられたビルマの農業を、ビルマ人のために發展せしめ、阿片と化した佛教を民族の推進力たる本來の姿にかへすことは、一つに農業の先進國であり、同じく佛教を廣汎に經驗した日本の指導にかけられてゐるといふはなければならないのである。

昭和十九年一月二十日 初版印刷
昭和十九年一月二十四日 初版發行 (五、〇〇〇部)

(出版會承認)
420301

不許
複製

【圖說】南方共榮圈
定價 三圓
特別行爲稅相當額二十一錢
賣價 三圓二十一錢

編者 社団法人同盟通信社
發行者 杉田才一
印刷者 青野仙吉
發行所 社団法人同盟通信社
東京都墨田區日比谷公園二號地
(東京一〇三)

營業所 東京都墨田區
內幸町二丁目二〇區
配給元 東京都墨田區
二丁目九番地

社団法人同盟通信社出版部
電話銀座(分)七〇一—五
振替口座東京三五八〇〇番
日本出版配給株式會社

(日本出版會會員番號 220003)

終